京都府遺跡調査概報

第 18 冊

1. 青野遺跡第9次
2. 篠・西前山窯跡群
3. 味方遺跡第2次
4. 土師川改修工事関係遺跡
5. 下畑遺跡

1986

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

昭和56年4月に財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足し，間もなく5年が過ぎようとしています。その設立の目的は，京都府内の埋蔵文化財の調査，保存，活用及び研究を行い，その保護を図るとともに，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努め，地域の文化の発展に寄与することにあります。

当調査研究センターの直面する事業は，京都府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり，昭和60年度は，33件の調査を実施しました。これらの発掘調査は，いずれも道路建設，学校建設，宅地造成などの開発事業に伴う事前調査であり，調査によって発見された遺跡の多くは調査終了後破壊され，消滅する運命にあります。しかし，発掘調査したすべての遺跡が開発事業により消滅していいはずがありません。一つでも多くの遺跡がその重要性を理解され，現状のまま保存されることが望ましいのは言うまでもありません。

この「京都府遺跡調査概報」は，遺跡の重要性を理解していただくために，またたとえ保存が困難な遺跡についても正確な記録を作成し，その活用を図るために刊行するものであります。昭和60年度は，第18冊，第19冊，第20冊，第21冊の4冊にまとめることにしましたが，この第18冊には青野遺跡第9次調査ほか4件を収録しました。調査結果を速報として掲載した「京都府埋蔵文化財情報」とあわせて御活用いただければ幸甚であります。

この報告書をまとめるまでの現地調査では，開発関係者はもちろんのこと京都府教育委員会，各市町村教育委員会をはじめ関係機関の御協力を受け，さらに炎暑の下，極寒の中で熱心に作業に従事していただいた多くの方がたがあります。この報告書を刊行するにあたって，これら多くの関係者に厚く御礼申しあげます。

昭和61年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1.　本冊に収めた概要は

　1.　青野遺跡第９次　　2.　篠・西前山窯跡群　　3.　味方遺跡第２次

　4.　土師川改修工事関係遺跡　　5.　下畑遺跡

　を対象としたものである。

2.　各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 青野遺跡（第９次）	綾部市青野町吉美前	昭60. 6. 25 ～ 昭60. 8. 6	京都府土木建築部	辻本　和美 森下　衛
2. 篠・西前山窯跡群	亀岡市篠町大字森小字前山	昭60. 11. 20 ～ 昭61. 2. 27	京都府土木建築部	水谷　寿克 岡崎　研一
3. 味方遺跡（第２次）	綾部市味方	昭60. 6. 4 ～ 昭61. 3. 31	京都府土木建築部	辻本　和美 西岸　秀文 引原　茂治
4. 土師川改修工事関係遺跡	福知山市長田	昭60. 9. 26 ～ 昭60. 11. 13	京都府土木建築部	長谷川　達 肥後　弘幸
5. 下畑遺跡	野田川町三河内	昭60. 5. 20 ～ 昭60. 7. 19	京都府教育委員会	竹原　一彦

3.　本冊の編集には，調査課企画資料担当が当った。

目　　次

1.　青野遺跡第９次発掘調査概要…… 1
2.　篠・西前山窯跡群発掘調査概要……13
3.　味方遺跡第２次発掘調査概要……23
4.　土師川改修工事関係遺跡昭和60年度発掘調査概要……45
5.　下畑遺跡昭和60年度発掘調査概要……53

挿図・付表目次

青野遺跡第９次

第 1 図　調査地位置図(1)…… 2
第 2 図　調査地位置図(2)…… 2
第 3 図　土層断面図…… 3
第 4 図　調査地平面図…… 4
第 5 図　SK05実測図 …… 5
第 6 図　SK09実測図 …… 5
第 7 図　SB01実測図 …… 6
第 8 図　SK18実測図 …… 7
第 9 図　出土遺物実測図(1)…… 8
第 10 図　出土遺物実測図(2)…… 9
第 11 図　出土遺物実測図(3)……10
第 12 図　出土遺物実測図(4)……11

篠・西前山窯跡群

第 13 図　調査地位置図……14
第 14 図　調査地全体図……16
第 15 図　西前山１号窯実測図……17
第 16 図　灰原堆積断面図……18
第 17 図　窯状遺構(1)実測図……19
第 18 図　窯状遺跡(2)実測図……19
第 19 図　出土遺物実測図……20

味方遺跡第２次

第 20 図　周辺遺跡分布図……24
第 21 図　トレンチ配置図……25
第 22 図　7・8トレンチ拡張区遺構配置図 ……26
第 23 図　9トレンチ遺構配置図……28
第 24 図　7・8トレンチ東壁土層断面図 ……29
第 25 図　SB01・SB05・SB06・SK02実測図 ……30

第 26 図　SX01実測図 ……31
第 27 図　SB02・SK03実測図 ……31
第 28 図　SB04実測図 ……32
第 29 図　SB03・SB08実測図 ……32
第 30 図　SB07実測図 ……33
第 31 図　縄文・弥生土器拓影……35
第 32 図　弥生土器実測図……36
第 33 図　SX04出土遺物実測図(1) ……37
第 34 図　SX04出土遺物実測図(2) ……38
第 35 図　SB04出土遺物実測図 ……39
第 36 図　各遺構出土遺物実測図……40
第 37 図　包含層出土遺物実測図……41
第 38 図　石器実測図……42
付 表 1　石器観察表……43

土師川改修工事関係遺跡

第 39 図　調査地位置図……45
第 40 図　調査地周辺地形図……46
第 41 図　遺構実測図……47
第 42 図　49号墓実測図……48
第 43 図　出土遺物実測図……50
第 44 図　貨幣拓影……51
付 表 2　検出墓坑一覧表……51

下畑遺跡

第 45 図　調査地位置図(1)……54
第 46 図　調査地位置図(2)……55
第 47 図　調査地平面図・断面図……56
第 48 図　SX1平面図・断面図……57
第 49 図　弥生土器実測図……58
第 50 図　出土遺物実測図……59

図 版 目 次

青野遺跡第９次

図版第１　(1)調査地全景（北から）　(2)SD01全景（南から）

図版第２　(1)SD02全景（南から）　(2)SB01検出状況（南から）

図版第３　(1)SK09遺物出土状況（南から）　(2)SK18遺物出土状況（北から）

図版第４　出土遺物

篠・西前山窯跡群

図版第５　(1)１号窯全景（北西から）　(2)１号窯・灰原検出状況（北西から）

図版第６　(1)１号窯近景（完掘後）　(2)１号窯・灰原近景（完掘後）

図版第７　(1)１号窯焼成部窯壁状況（西から）　(2)１号窯焚口部・焼成部（北西から）

図版第８　(1)窯状遺構(2)検出状況（南西から）　第１トレンチ掘削状況（東から）

図版第９　出土遺物

味方遺跡第２次

図版第10　(1)調査地遠景　(2)調査地全景（南から）

図版第11　(1)SB02・SK03（東から）　(2)SX01（南から）

図版第12　(1)SB04（北から）　(2)SB03（北から）

図版第13　(1)SB01・SB05・SB06（北から）　(2)SB06（南から）

図版第14　(1)SX04遺物出土状況（西から）　(2)SB04遺物出土状況（東から）

図版第15　出土遺物(1)

図版第16　出土遺物(2)

土師川改修工事関係遺跡

図版第17　遺構検出状況（南から）　(2)遺構完掘状況・トレンチ全景（西から）

図版第18　(1)49号墓上部石組　(2)43号墓上部施設

図版第19　出土遺物

図版第20　(1)貨銭　(2)キセル及び飾り金具

下畑遺跡

図版第21　(1)調査前全景（東南から）　(2)調査後全景（東南から）

図版第22　(1)SX1（西北から）　(2)SD2　弥生土器出土状況（西北から）

図版第23　出土遺物

1. 青野遺跡第９次発掘調査概要

1. はじめに

青野遺跡は、綾部市教育委員会や当調査研究センター等によってこれまでに計８次にわたる発掘調査が行われ，弥生時代から中世に及ぶ中丹地方屈指の複合集落遺跡であることが知られている。

今回の調査は，京都府土木建築部道路建設課によって計画された府道志賀郷綾部本町線の白瀬橋橋梁改良工事に伴うもので，同工事関係の発掘調査としては，昭和56年度の第６次調査（道路取り付き部分），同57年度の第７次調査（橋脚付替工事部分）に続くものである。

今回の調査対象地は，昭和48年に関西電力青野変電所の建設に伴い，弥生時代中期から奈良時代にかけての多数の竪穴式住居跡や溝・土拡等が検出された青野Ａ地点に隣接する箇所である。また，道路をはさんで東側に位置する第６次調査地点においても，古墳時代初頭・同末葉を中心とする時期の竪穴式住居跡群・溝等が確認されており，今回の調査地についても遺構・遺物の存在が予想されていた。(注1)

現地調査は，当調査研究センター調査課主任調査員辻本和美(昭和59年度)・水谷寿克，同調査員三好博喜(昭和59年度)・森下　衛が担当した。

現地作業は昭和60年３月７日に開始したが，着手時期の関係上，翌60年度に現地調査の大半と遺物整理作業を繰り越すこととなった。従って，昭和59年度の現地調査期間は，同年３月７日から同年３月30日，翌60年度は，同年６月21日から同年８月６日である。

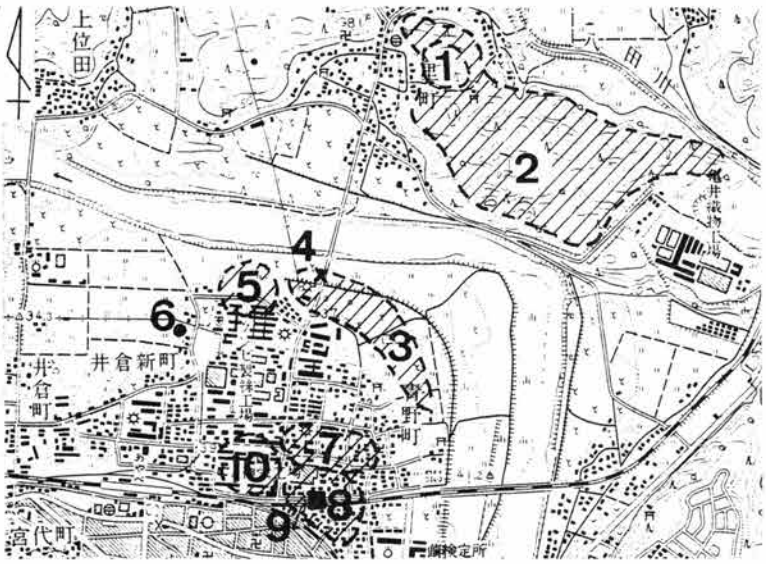
現地調査に当って，地元有志の方々及び学生諸氏には，それぞれ作業員・調査補助員として多大の参加協力を得た。(注2) また，綾部市教育委員会・同企画総務部・綾部史談会・京都府中丹教育局及び青野・綾中・味方の各自治会には，調査全般にわたって多大なる御尽力を賜った。(注3)

（辻本和美）

2. 位置と環境

綾部盆地へ流入した由良川は，一旦北へ流れを大きく転じた後，再び西へ向かう。青野遺跡は，この２度目の屈曲点から少し下流の南岸に形成された自然堤防上に立地する。

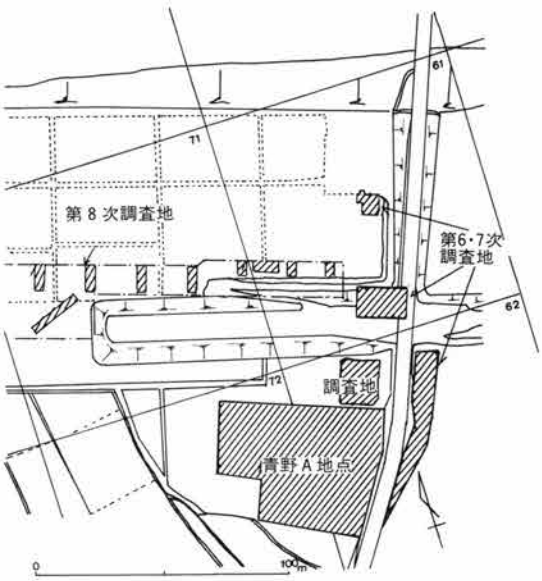
当遺跡の位置する一帯は，由良川が貫流する綾部盆地内でも古くから人々の居住に適した場所であったらしく，西方には青野西遺跡が，また南方には綾中遺跡・綾中廃寺・青野南遺跡・西町遺跡がある。各々の遺跡の内容は，ここで繰り返し述べるまでもないだろうが，お



1　久田山遺跡
2　久田山古墳群
3　青野遺跡
4　調査地
5　青野西遺跡
6　青野大塚古墳
7　青野南遺跡
8　綾中廃寺跡
9　綾中遺跡
10　西町遺跡

第１図　調査地位置図（1）

よそ弥生時代以降中世に至るまで人々の生活の痕跡を認めうるものである。(注4) しかも，７世紀頃には，青野南遺跡で郡衙跡の可能性の高い掘立柱建物群が確認されていることやそれに近接して綾中廃寺があるなど，旧何鹿郡内でも中核をなした地域であったことが推測されている。また，由良川の対岸には久田山遺跡，久田山古墳群がある。青野遺跡第８次調査で検出された旧河道が由良川旧流路の可能性を有し，青野遺跡の西から南側を流れていたことも推測されている。(注5) とすれば，当遺跡もかつて由良川の北岸に位置したこととなり，上記の遺跡・古墳群との関連も充分検討すべきものといえよう。



第２図　調査地位置図（2）

3. 調査成果

今回の調査地は，綾部市青野町吉美前に所在し，青野遺跡内でも西半部に位置する。そして，先述のように同遺跡Ａ地点・第６次・第７次調査地に隣接した地区である。

なお調査に当り，地区割は従来から綾部市教育委員会が施行しているグリ

ッド網及びその呼称法を踏襲した。ただ以下に報告する遺構番号は，通例に例えば調査年次の下2桁を含めた番号によって表現することとなるが，ここでは省略して表記した。

（1） 土層(第3図)

調査地の土層は，表土(耕作土)及び4層からなる旧耕作土，その下の黄灰色土，黄褐色土の順に観察された。なお，黄褐色土は無遺物層で約1m程の厚みがある。その下はやはり無遺物の砂礫層となっていた。

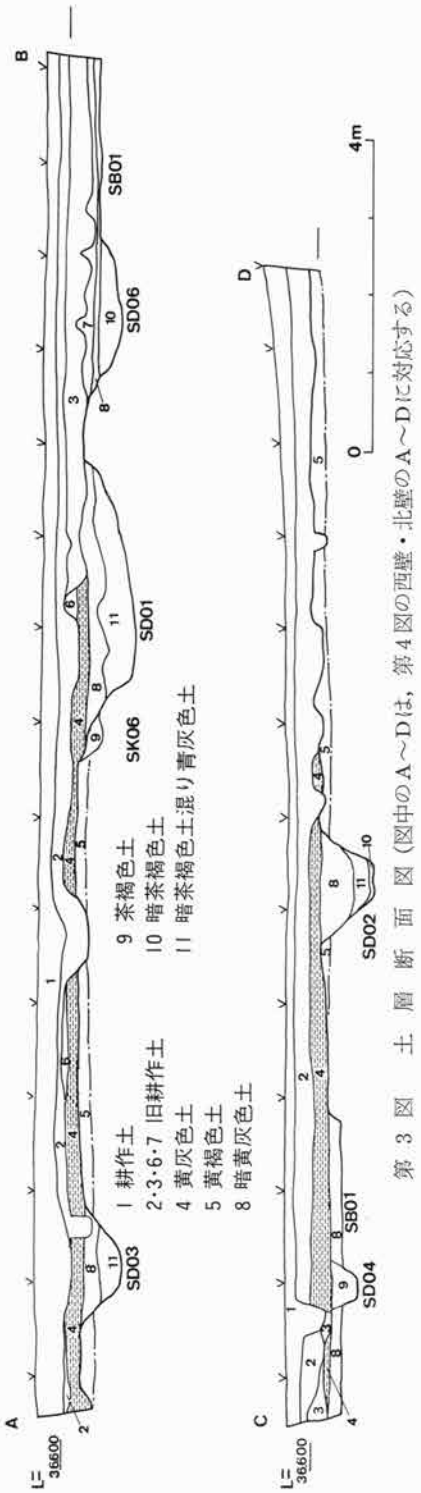
ただ，旧地目が桑畑であったことや，4層にわたる旧耕作土が示すとおり近世には畑地であったことから，深くまで耕作による攪乱が及んでいたことが判明した。そのため，本来当地域では遺物包含層であると同時に，この土層中にも遺構面の存在する可能性があると認識されている(注6)黄灰色土は極めて遺存状況が悪かった。従って，この土層中からは包含する遺物を採取するにとどまり，遺構は一様に黄褐色土上面で検出した。

なお，この黄褐色土上面のレベルをもとに旧地形を復元すると，全体に東から西へ緩かに傾斜していたようである。

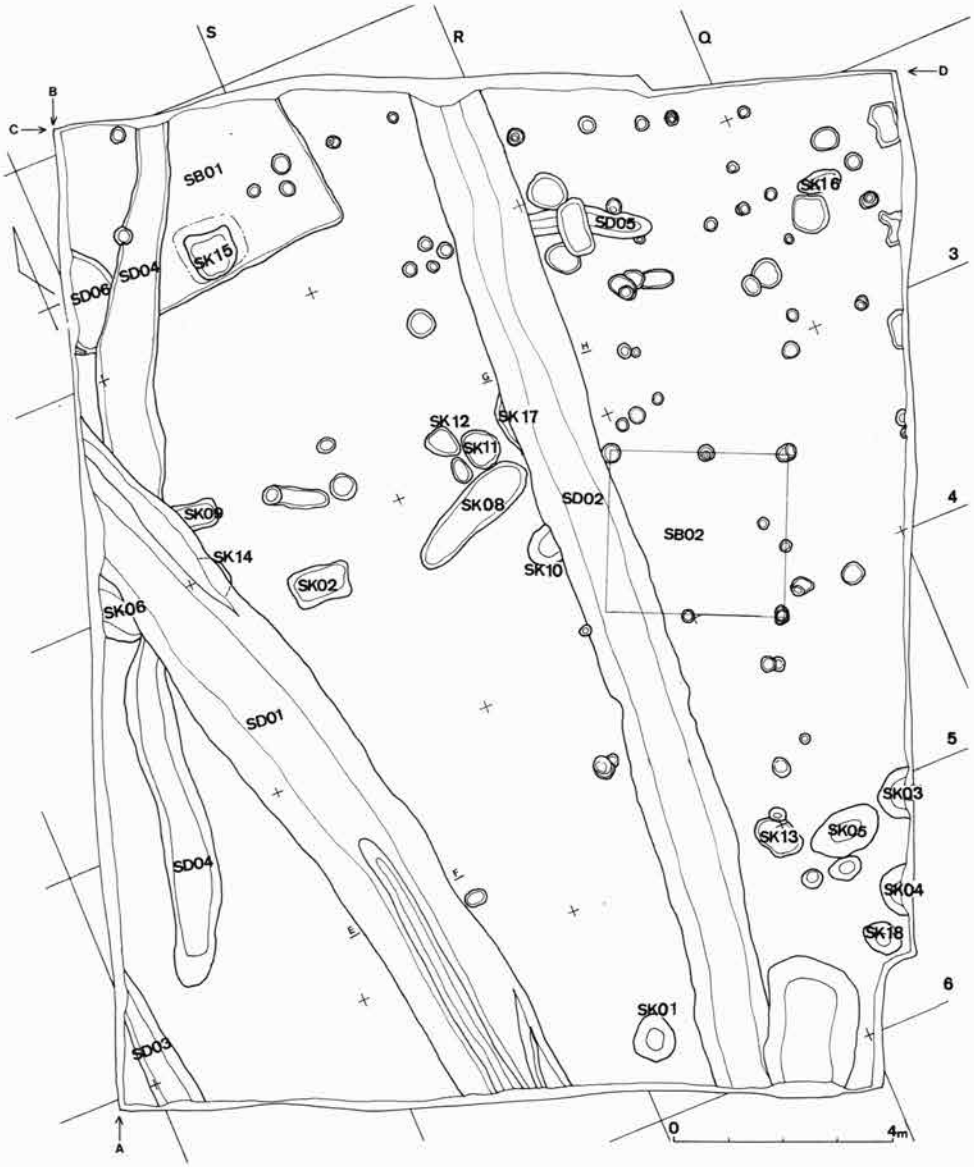
(2) 検出遺構(第4図)

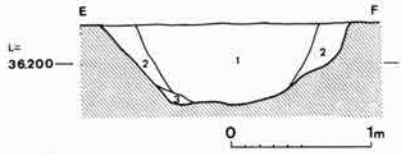
今回の調査で検出した遺構には，竪穴式住居跡SB01，溝SD01～06，土坑SK01～SK18，掘立柱建物跡SB02などがある。そして時期の明確なものをみると，弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代初頭，歴史時代(7世紀)の3時期のものに大別される。以下，時代を追いその主なものについて簡単に記す。

①弥生時代中期　この時期の遺構としては，



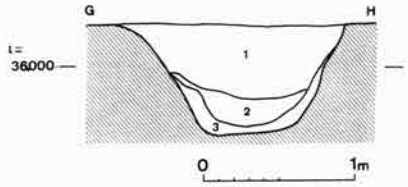
第3図　土層断面図(図中のA～Dは，第4図の西壁・北壁のA～Dに対応する)





1. 暗茶褐色土混り青灰色土　2. 暗黄灰色土
3. 黄褐色土混り黄灰色土

SD01 断面図



1. 暗黄灰色土　2. 暗茶褐色土混り青灰色土
3. 暗茶褐色土

SD02 断面図

第 4 図　調 査 地 平 面 図

SD 02・SD 05・SD 06・SK01～SK14 などがある。

SD 02 は，トレンチを南北に縦断するしっかりとした溝である。幅約 1.4 m 深さ約1.0 m を測り，断面は逆台形に近い。埋土は3層に分かれ，上層には一部古墳時代後期の須恵器片(第9図23)が混入するが，中・下層からは弥生時代中期の土器のみ出土した(第9図16～22)。

SD 05 は，幅約 0.4 m，深さ約 0.3 m を測り，断面は浅いU字形をなす。埋土は，暗黄灰色土である。西端を SD02 によって切られており，細長い土坑状を呈す可能性も考えられるが判然とせず，ここでは溝として報告する。弥生土器(第9図5・8)が出土した。

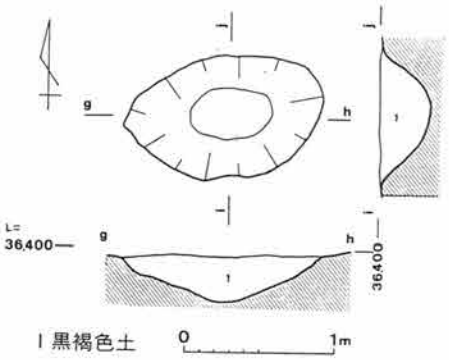
SD06は，幅約1.3mを測り，断面は浅いU字形をなす。埋土は，黒褐色土である。SB01・SD02・SD04によって切られておりごく一部を検出し得たにとどまったが，SD04との交点でそれと重なるように南側へ向って屈曲することを確認している。(注7)

土坑は，形態から3種類のものに分かれる。(注8) 1つは，SK 05 に代表されるもので，平面形が円形もしくは楕円形に近く，比較的浅く丸味をもつ底部をなす。弥生土器が細片となり出土する場合が多い(SK01～SK05, SK11～SK13, SK16, SK17)。

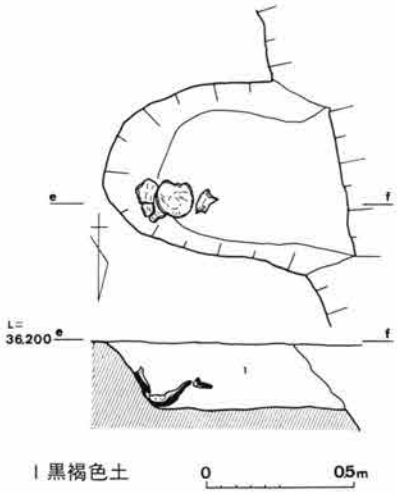
また1つは，SK08のように細長い楕円形に近い平面形をなし，比較的平らな底部をなす。SD01に切られているが，SK09もこの類のものと考えられ，その東端部分から弥生土器の破片がまとまって出土した(SK06, SK08, SK09, SK14)。

残る1つは，SK10にみるものである。SD02に大半を切られてはいるが，平面形は楕円形に近いと考えられ，底部に黄灰色粘土を貼りつけるのを特徴とする。

SK05などは，その形態や遺物の出土状況から不必要となったものを廃棄した土坑のようであり，SK08やSK09などは埋葬にかかわるもの

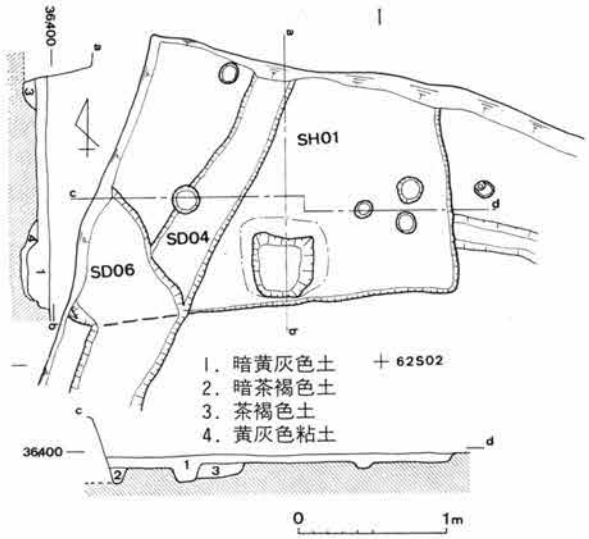


第 5 図　SK05 実 測 図



第 6 図　SK09 実 測 図

かも知れない。また，SK10の特徴としてみられる底部に黄灰色粘土を貼り付ける形態は，単に弥生時代中期に限らず，今回の調査で検出したSK15やSK18にも共通するものである。うち，SK15はSB01に伴うものと理解でき，この特徴を有す土坑は竪穴式住居跡にかかわる施設であった可能性が高い。(注9) SK 10 の周辺に竪穴式住居跡があったのであろうか。



第 7 図　SB01 実 測 図

②弥生時代後期～古墳時代初頭

この時期の遺構としては，SB01・SD03・SD04がある。

SB 01 は，調査区北西隅で約 2 分の 1 を検出したものである。一辺約 5 m 前後の隅丸方形をなすと考えられる。遺存状況は極めて悪く，深さ約 7～10 cm 程を残すにすぎない。床面からは，これに伴うと考えられる柱穴を 2 か所検出した。また南側の壁に接して SK15を検出した。先述のように底部に黄灰色粘土を貼るのを特徴とし，隅丸方形に近い平面形をなす。住居跡の床面から高杯(第10図24)が，SK 15 内から叩き目を施した甕体部片が出土した。

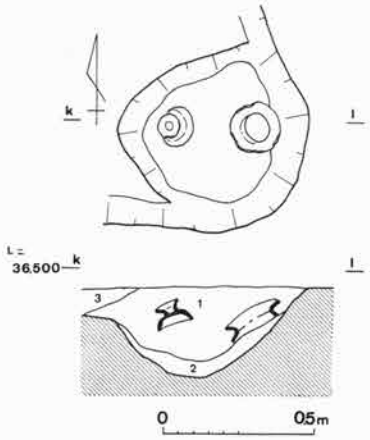
SD 03 は，調査区西南隅で一部を検出したに留まる。幅約 0. 4 cm, 深さ約 0. 2 m を測り，断面は浅いU字形をなす。埋土は暗黄灰色土及び暗黄灰色土混り青灰色で，土師器片が出土した。

SD 04 は, SB 01 を切った状態で検出した。さらに南側へのび，調査区南半部で消滅する。約幅 1 m，深さ約 20～30cm を測り，断面は浅いU字形をなす。土師器片が出土し，須恵器片を 1 点も含んでいないことから，SB 01 を切っているもののこの時期のものと判断した。

③歴史時代（7 世紀）この時期の遺構としては，SD01・SK18 がある。

SD01は，幅約 2m，深さ約 1mを測り，断面はU字形をなす。埋土の状況(第 4 図)は，一旦埋没した後に規模を縮少して再度掘削したことを示唆するものであった。ただ部分的にはそれが明瞭に表われていない箇所もあり，充分な検討を要す。なお，遺物の大半は黄灰色土混り青灰色土中から出土したが，およそ 7 世紀前半～後半期にわたる時期のものが中心をなしていた。(注10)

SK18は，径約60cmの円形に近い平面形をなし，深さ約30cmを測る。底部には黄灰色粘土を貼る。攪乱が及んでいるため全容を知り得なかったが，この土坑はさらに大きく浅い土坑状のものの一画に設けられたものと考えうる検出状況にある。先述のように，その土坑状のものが竪穴式住居跡であった可能性は極めて高いと考えている。



1. 暗黄灰色土　2. 黄灰色粘土
3. 攪乱土

第 8 図　SK18 実 測 図

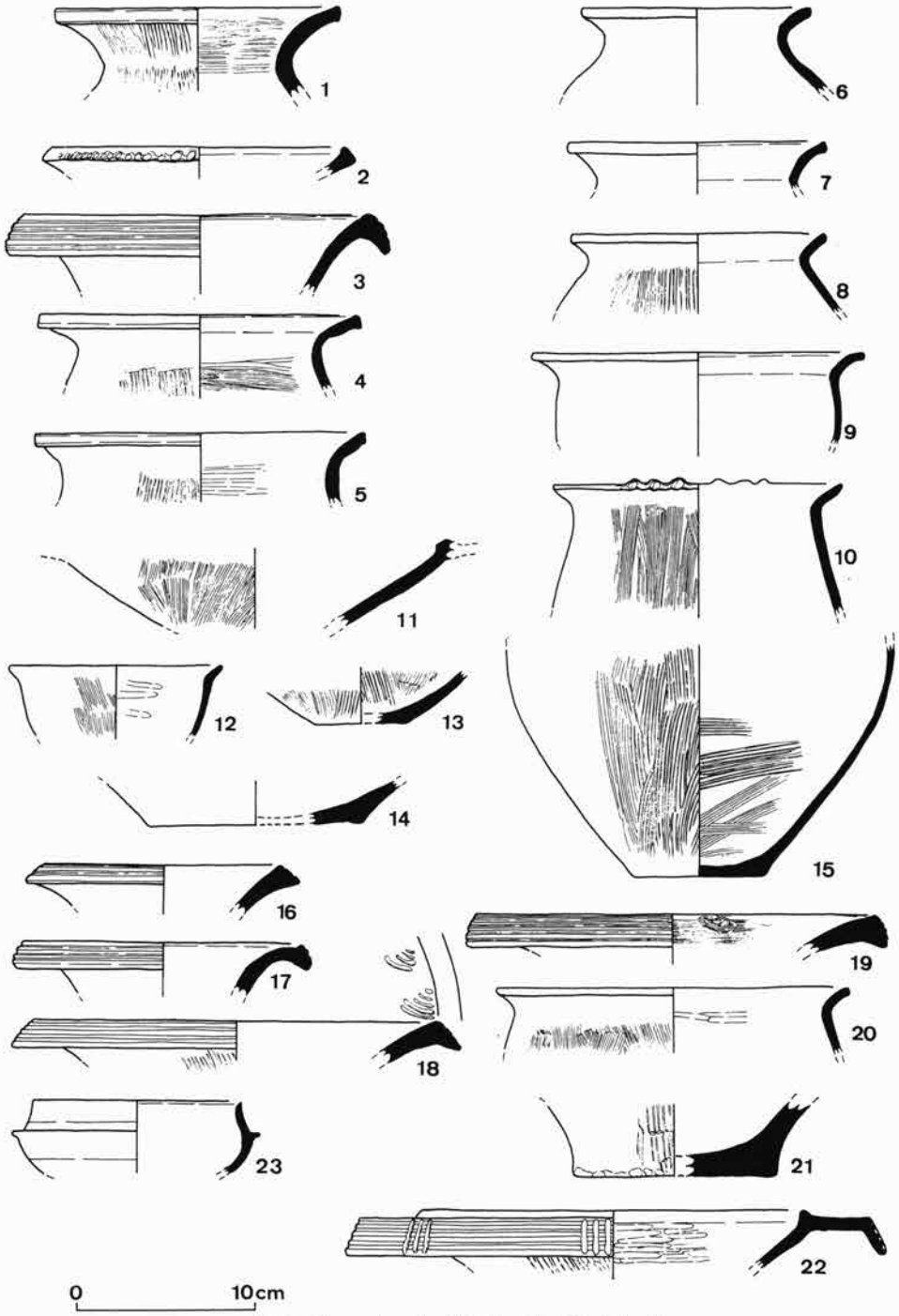
以上に記述した以外に，時期の不明瞭な遺構もいくつかある。特に，SB 02 は伴出遺物がなく，その年代を把握する確証を欠く。東西2間(3.1m)×南北2間(2.9m) の規模を持つと考えられる。なお，南東隅部の穴柱は，これが判然としていないうちにSD 20の掘削を始めたために欠けたのであり，他の柱穴の埋土の状況から，少なくともSD02より新しいものと判断している。

（3） 出土遺物(第9～12図)

出土遺物も上記の遺構に対応する時期のものが中心であり，量的には整理箱約10箱に及んだ。以下，遺構から出土した土器類を中心として，時代毎に概略を記す。

①弥生時代中期(第9図)　壺・甕・高杯・鉢等がある。

1～3・16～19は，広口壺口縁部片である。1は，細く締った頸部から短かく外反する口縁部を有す。口縁端部は，横方向のなでが施され面をなす。頸部から体部上半にかけ刷毛目を施す。2は，口縁端部のみを残す少片である。上方へつまみ上げられ，下端に圧痕文を配す。3・16～19は，大きく外反する口頸部を有すと考えられるもので，口縁端部を上・下に拡張し数条の凹線文を配す。18・19は，口縁部内面に簡略化した扇形文を配す。なお，16は高杯脚部の可能性もある。13・15は壺底部と考えられ，内外面とも刷毛目調整により仕上げる。4～10・20は甕口縁部片である。いずれも「く」の字状に口縁部が外反するものである。4は比較的強く屈曲し，5・10はゆるやかに屈曲する。また6～8は丸味のある体部から短かく口縁部が外反するものである。4・5は口縁部を強く横なでするため，端部は面をなし凹線文状を呈す。7は口縁部がややつまみ上げられた形状をなす。また10は，口縁端部を部分的に波状につまむものである。14・21は甕底部片と考えられる。11・22は高杯である。いずれも，口縁部が一旦水平近くのびた後に垂下するものである。特に22は，その垂下部分に4条の凹線文及び3本をセットした棒状浮文を配す。11は杯部外面を刷毛目調整し，22は内

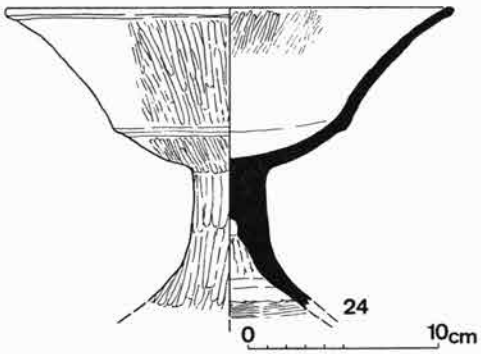


第 9 図　出 土 遺 物 実 測 図 (1)

1. SK15　2, 3, 13. SK14　4. SK08　5, 8. SD05　6, 10, 12. SK05　7, 9, 15. SK09
11. SK10　14. SK03　16～23. SD02

外面とも篦磨きを施す。12は鉢で、短かく外反する口縁部を有す。体部外面を刷毛目調整し，内面は強いなでで仕上げる。

以上，いずれも焼成は甘く，淡褐色もしくは暗黄色を呈す。明確な他地域産のものを，肉眼による胎土観察から抽出することはできなかった。



第10図　出土遺物実測図(2)

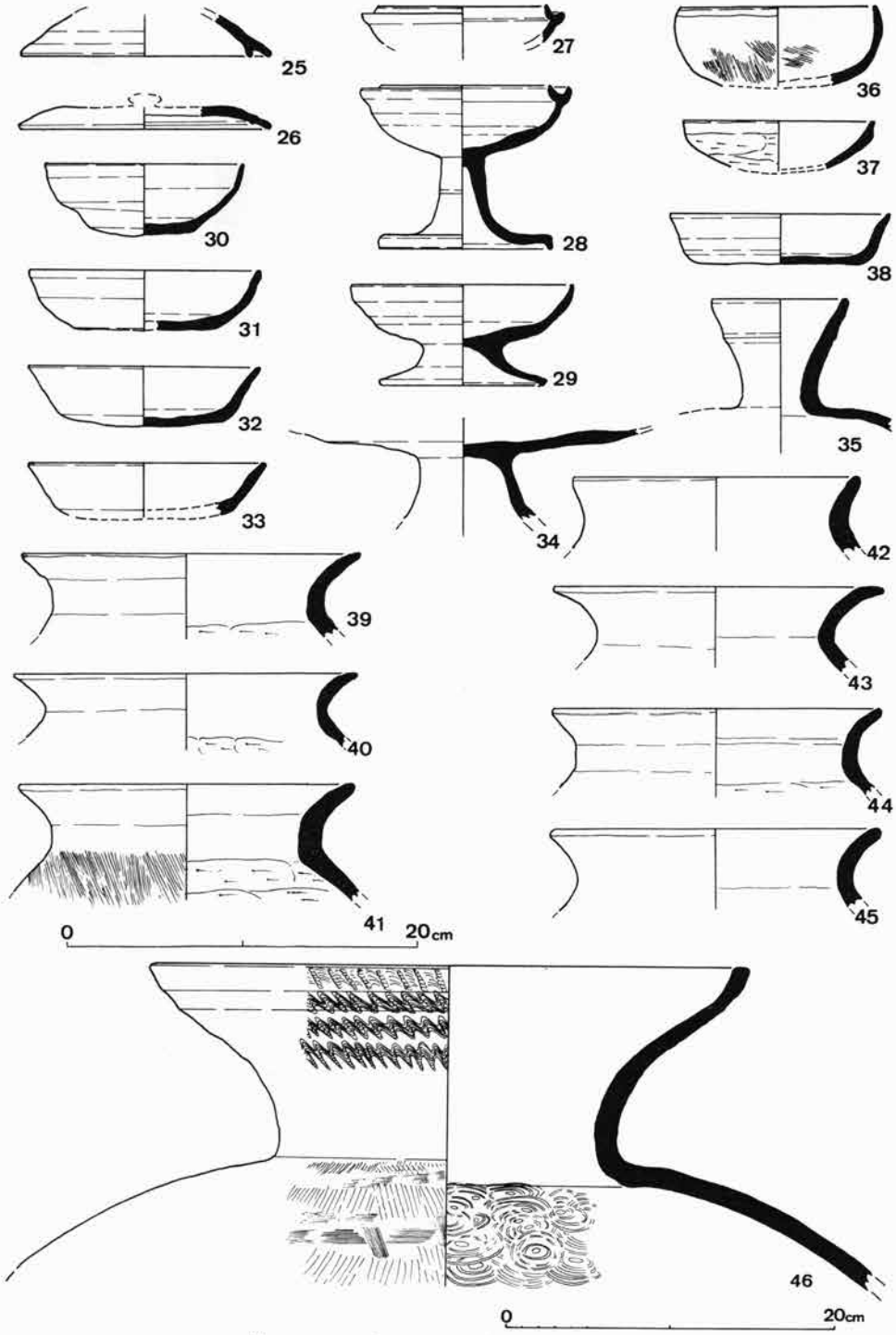
また，大半のものは弥生時代中期後葉に属すと考えられるが，遺物の出土した遺構においてSD 02とSK 10が切り合うことや，形態的にも一部古相を呈すもの(9・20・21など)が認められることから，やや時期幅を想定しなければならないだろう。

②弥生時代後期～古墳時代初頭(第10図)　この時期のものは，細片となり出土したものが多くSB 01から出土した高杯のみが図化し得たものである。丸味のある杯底部から大きく外反する口縁部がのびる。その屈曲部の外面には，明確な稜が走る。杯部内外面及び脚部外面には篦磨きが施され，脚部内面上半はなで，下半は刷毛目が施される。SB 01からは，体部に叩き目を施した甕体部片も出土しており，時期的には古墳時代初頭頃とするのが妥当なようである。(注11)

③歴史時代(7世紀)(11図)　大半のものはSD 01から出土した。25～35・46は須恵器,36～45は土師器である。

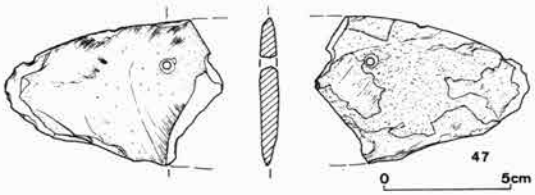
25・26は杯蓋で，いずれも内面に返りを有する。ただ26は痕跡をとどめる程度の小さなものである。27・30～33は杯身で，27は小さな立ち上りをもつ口径約10 cmの小型品，30は口径約11 cmで内湾気味に口縁部がのびるものである。31～33は口径がやや大きくなり，平底となる。28・29・34は高杯である。28は27と同一の杯部をなす。29・34は短脚の高杯で，大きく開く脚部を有する。34は，大型の盤状をなす杯部を有すと考えられる。35は直立する口頸部を有する壺で，その中位に浅い凹線をめぐらす。46は大型の甕で，外反してのびる口縁部が端部付近で内湾気味に立ち上がっている。端部は上方に面をもつ。口縁部内面には，クシ状工具による刺突文及び3条の波状文を配す。体部外面には平行叩きの後に刷毛目を，外面には同心円文の叩きを施す。

36・37は土師器杯である。36は深い体部を有し，内外面とも刷毛目を施す。37は器高が低く，体部外面に篦削りを，口縁部付近に強い横なでを施す。38は皿で，この時期のものとしてはあまり見受けない。器形は須恵器杯身に酷似する。39～45は甕で，口縁部が短かくのび



第 11 図　出 土 遺 物 実 測 図 (3)
29, 30, 41. SK18　その他 SD01

る42を除き，口縁部が強く外反しなでの痕跡を明瞭に残すという7世紀頃に当地域特有の形態をもつ。いずれも，体部外面に刷毛目，内面に篦削りを施すことを通例とする。



第12図　出土遺物実測図(4)

これらのうち，SK 18 出土遺物(29・30・41) はおよそ7世紀中葉頃の年代が与えられうるものと考えている。また SD01 出土遺物は，一部に6世紀代まで遡りうるもの(36・42)を含むが，その中心は7世紀前半～中葉頃のもの(25・27・28・37)から後半期のもの(31～33・38)で占められている。土師器甕については，この時期幅に対応する器形の変化は看取できなかったが，口縁部の外反度を1つの目安にすると，それが弱いもの(40・44・45)と強いもの(39・43)に大別される。前者を7世紀前半期頃に，後者を後半期に対応させうるのではないかと考えている。

これらの他，SD 02 埋土内から出土した須恵器杯身片(第9図23)や包含層中から出土した石器類(第12図47)がある。石器は破損が著しく，ここでは石庖丁のみ図示したが，他に磨製石斧3点，打製石斧1点がある。47も破損が著しいが，砂岩系の石材を用いたもので，遺存部の最大長 8.0 cm，最大幅 6.0 cm，最大厚 0.7 cm を測る。

4. ま　と　め

青野遺跡では，弥生時代中期～中世にわたる各時期の遺構・遺物が広範囲に確認されており，そこに細かな時期区分を確立し，土地利用の時期的な変遷を明らかとする作業は今後に残された重要な課題と言える。(注12)

以上に概述した調査成果は，やはりA地点をはじめとする周辺での諸調査と共通する面が多くあったが，長期にわたり生活空間として利用された当遺跡の様相を把握する上でいくつかの新たな知見を提供したと言えるものでもあった。以下，それらを簡単にまとめる。

①弥生時代中期の遺構は，A地点を中心とする一帯において土坑・溝などが確認されているにすぎず，今回もやはり土坑・溝を検出したのみで住居跡の発見には至らなかった。しかし，そこに認めた3形態の土坑それぞれの性格・遺構の切り合いや出土遺物から想定される時期幅等を考え合わせるならば，当地域がある段階に墓域として，またある段階には居住区として利用されていた状況が看取できるのではないだろうか。

②SB01は，時期的に古墳時代初頭頃と推測し，第6次調査地南端で検出されたSB8117に近い時期のものと考えている。青野遺跡内では数少ない資料だが，この西方約300mの青野

西遺跡で同時期の集落が確認されている点注目すべきものであろう。(注13)

③7世紀代の住居跡は，所謂「青野型住居」を中心に青野遺跡から青野南遺跡に数多く分布している。今回の調査では，SK 18 がおそらく住居跡の痕跡を留めるものだろうと考えたが，道路を狭んだ第6次調査地で検出された同時期の住居群とまとまりをなすと考えられる。またSD 01の性格も，規模等からこの時期の集落構造と深く係わるものと考えられる。出土遺物の示す7世紀前半～後半における集落の様相との関連をもとに充分検討すべきものである。

（森下　　衛）

注1　釋　龍雄・山下潔巳ほか「青野A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告書』第2冊青野遺跡調査報告書刊行会）1976
辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第6冊（財)京都府埋蔵文化センター）1983

注2　調査補助員　青井　敏・恵美寿彦・加藤隆也・詫摩恵子・福原章治・古屋敷和代・増田公威・山本英揮・綿田和子
調査作業員　太田綱雄・大槻幸作・大槻　勉・谷口嘉蔵・出口春彦・西川勇夫・畑中一江・森津五郎・中　重樹・有田秀樹・上田孝司・植田秀太郎・大槻秀行・筧　楽磨・塩尻盛男・波多野武人・森田　晋・平田卓哉・森藤浩二・山本宏美・森津正人・伊勢田辰男・有谷　覧・井上泰暢・高山健次郎・足立勇人・西山理人・吉岡　修・前田　修・前田吉範・釘元裕樹
調査整理員　並河智実・田中智子・桂　洋子

注3　調査全般にわたり綾部市教育委員会中村孝行氏には多くの御指導を賜った。記して感謝したい。

注4　中村孝行ほか『綾部市文化財調査報告』第8集～第10集　綾部市教育委員会　1981～1983

注5　小山雅人「青野遺跡第8次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注6　中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会）1982　この報告で茶褐色土とされているものがこれに相当すると考えられる。

注7　この溝は南へのびて SK06 とつながりコの字状に巡るものとなる可能性もある。

注8　注1によると，本遺跡から検出された土坑は土坑墓としての理解が主流のようである。

注9　青野西遺跡における竪穴式住居跡内特殊ピットとの類似性が指摘できるのではないだろうか。
小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983

注10　SD02 の埋土の大半を占める茶褐色土混り青灰色土は，弥生時代中期のSD01の埋土と共通しており，単に地下水の影響でこの部分のみ変色したとも考えられ充分検討を要す。

注11　注9と同じ

注12　注6と同じ

注13　注9と同じ

2. 篠・西前山窯跡群発掘調査概要

1. はじめに

亀岡市の西南部にあたる篠町の丘陵部一帯には，総数100基を超す一大窯跡群として知られる篠窯跡群が分布している。篠町には，弥生時代の石庖丁が採集された浄法寺遺跡をはじめとして，画文帯神獣鏡（仿製）が出土した円墳の王子三つ塚古墳，前方後円墳の野条古墳，方墳の滝ノ花塚古墳・桝塚古墳などがある。古墳時代後期になると，亀岡盆地東北部の丘陵一帯には百基を数える群集墳が形成されるのに対し，篠町の丘陵部一帯には群集墳がほとんど確認されず，奈良時代中頃から須恵器を主体とする一大窯跡群が出現する。この篠窯跡群は，篠町の南方部丘陵と北東部丘陵では若干その性格を異にし，すなわち南方部丘陵では，奈良時代中頃から平安時代後期にわたっての須恵器窯跡が多く分布するのに対し，北東部丘陵の王子や三軒家には瓦窯跡が点在する。

篠町の丘陵部一帯は，旧期洪積層の浸食が著しいため，小谷が多く複雑な地形を形成し，またその地質は，泥・砂・礫の互層から成り，窯体構築には適した地勢であった。

さて，篠窯跡群の調査は，昭和51年度から国道９号老ノ坂亀岡バイパス建設工事に伴う事前調査を行っており，今日までに窯跡80基の存在を確認し，その分布範囲は東西約3km・南北約２km に及ぶことが判明した。発掘調査は窯跡20基・窯状遺構４基・作業場跡２か所を実施した。その結果，８世紀中葉から11世紀初頭まで存続する窯跡群であること，長岡京や平安京に製品を供給していたことなどが判明した。さらに窯体構造においても，10世紀を境として登窯から小型窯へと移行し，特に黒岩１号窯や前山２号・３号窯では，焚口を２か所に有し，１辺1.5m前後の平面三角形を呈する小型平窯を検出した。これらの窯跡からは緑釉陶器が出土し，緑釉焼成窯として初めて明らかにされたものであった。また，西長尾５号窯では，平面砲弾形を呈し，ロストル(火格子)型式による二重床面を有するという非常に特異な構造をもつ須恵器焼成窯であり，上記の窯跡については，現在保存協議がなされているところである。(注1)

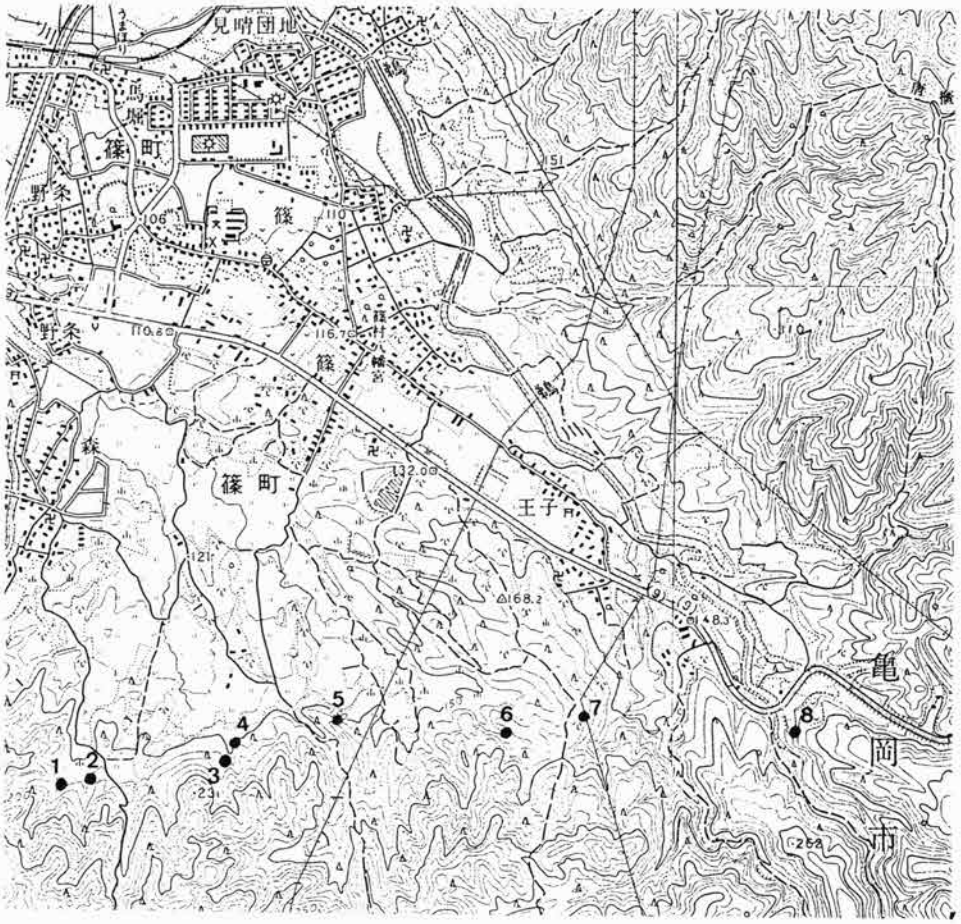
今回，篠窯跡群の支群である西前山窯跡が点在する箇所において，小柳川都市対策砂防事業が計画され，堰堤部の工事計画及び水没地域が設定されたことから，京都府教育委員会及び京都府土木建築部と再三にわたる協議が行われ，当調査研究センターが事前に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は，文化財保護法第57条第１項の規定に基づき「埋蔵文化財発掘調査届出書」を

文化庁長官あて提出し，昭和60年11月20日から昭和61年２月27日まで実施した。

現地調査は，当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員岡崎研一が担当して作業の進行をはかった。調査期間中，補助員・整理員として立花正寛氏を始めとする有志学生諸氏，作業員として地元篠町や本梅町の方々(注2)に寒風の中参加していただいた。又，亀岡市教育委員会・口丹波史談会等関係諸機関，土地を快く借していただいた木曽侍郎氏等に記して謝意を表したい。

なお，本書の執筆は，出土遺物の項を岡崎研一が，他の項を水谷寿克が行い，実測・トレース等には藤田育子氏の協力を得た。



第13図　調査地位置図(1/25,000)

1. 西前山窯跡群　2. 前山窯跡群　3. 黒岩窯跡群　4. 小柳窯跡群　5. 芦原窯跡群
6. 西長尾窯跡群　7. 西長尾奥第２窯跡群　8. 石原畑窯跡群

2. 調査の経過

西前山窯跡群は，篠町大字森小字前山に位置し，前山窯跡群が点在する丘陵から西へ約100m隔てた丘陵西側斜面に立地している。この窯跡群は，旧堰堤部の南側に設けられた林道の崖面に灰原が一部露呈し，さらに約30mほど狭谷を入った地点に窯滓や須恵器片が点在していたことから，2基以上の窯跡の存在が推定されていた。

調査は，灰原が露呈している箇所を面的に〔調査地(1)〕，須恵器片等が点在している箇所には試掘坑を設け〔調査地(2)〕掘削し，遺構の有無を確かめることにした。

〔調査地(1)〕 樹木の伐採・下草刈りを行ったところ，丘陵稜線に垂直に幅約2m・長さ約7mの溝状落ち込みを確認し，その部分を中心に1m×5mのトレンチを2本設け掘削した。その結果，溝状落ち込みのライン上に，被熱を受けた赤色焼土層2条を検出し，西前山1号窯と名付けその箇所の面的調査を行うことにした。

調査は，林道を境として窯体部トレンチ（8m×8m）と灰原部トレンチ（11m×8m）に分けて実施した。

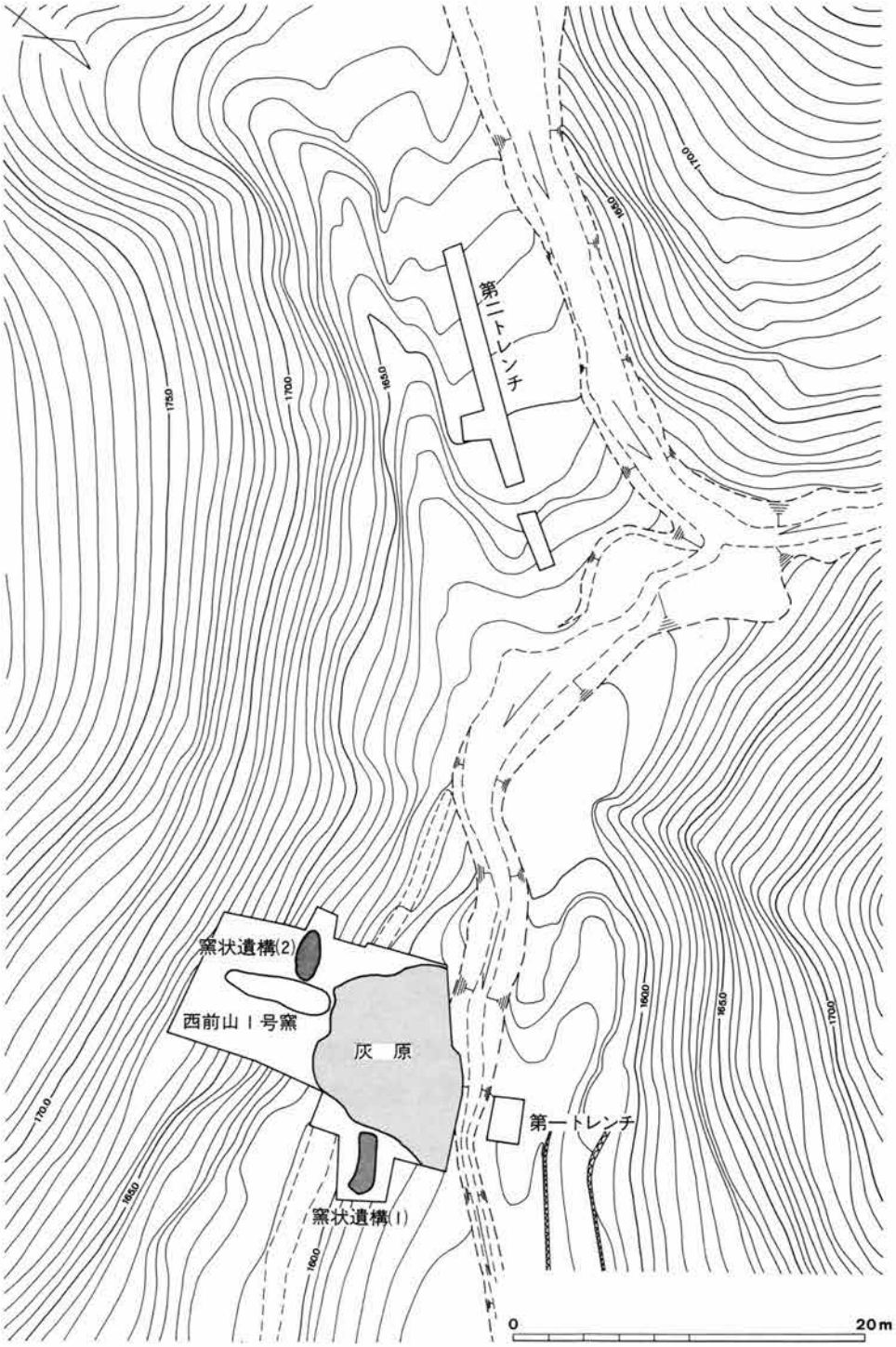
窯体部トレンチでは，全面に表土，黄褐色土を掘削し精査したところ，溝状落ち込みライン上に赤色焼土層が巡り，幅1.6m・長さ約7mの窯体を確認した。また焚口部から掻出された灰原も一部検出した。さらに窯体中央部両側においても，黒色灰・炭層を検出（窯体東側はケシ炭が多く，西側には黒色灰が多い）し，一部拡張して精査を行った。

窯体内は，8区画に分け調査を行い，天井部・側壁部の崩落堆積状況を観察しながら慎重に掘削した。焼成部付近では1m近く側壁が遺存し，窯体内埋土中より焼成の甘い須恵器が数点出土した。

灰原部トレンチでは，灰原が窯体焚口部から南北10m・東西10mと扇状に広がっており，4区画に分け掘削した結果，黄褐色土層，赤色焼土層（窯体流出土）を境として少なくとも4層に分かれることが判明した。

また灰原精査中において，トレンチ南東端より丘陵稜線に沿って幅約2mの黒色灰・炭層を検出し，帯状にトレンチ外へ延びることから拡張して掘削したところ，窯状遺構であることが判明した。

〔調査地(2)〕 窯滓・須恵器片を表採した地点には，1.5m×20mの試掘坑（第2トレンチ）を設け掘削した。しかし礫層・砂礫層の互層からなる堆積がみられ，窯体の確認はできなかった。表土下層より厚さ約5cmの灰原2次堆積層を一部検出し，摩滅した杯・埦（10世紀代）や窯滓が出土したが，窯体は調査地外，すなわち狭谷の奥に築かれたものと考えられる。


第二トレンチ
窯状遺構(2)
西前山1号窯
灰　原
第一トレンチ
窯状遺構(1)
1750
1700
1650
1600
0
20m

第 14 図　調 査 地 全 体 図

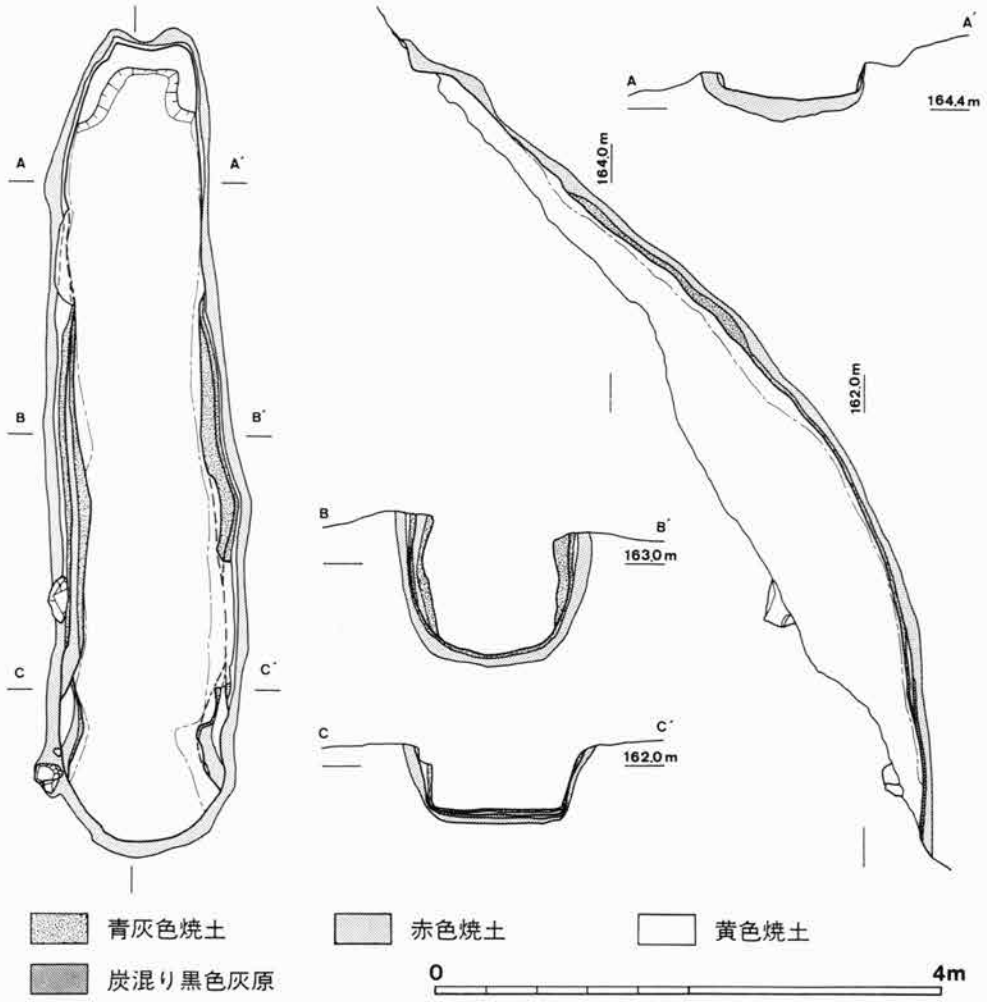
3. 検 出 遺 構

〔1号窯〕

丘陵北西斜面に築かれた半地下式登窯である。窯体は，丘陵斜面を利用し，丘陵稜線に垂直に溝を掘り込み，スサ入り粘土を貼り付けて側壁・天井部を架構し構築している。

窯体の規模は，残存長 6.7 m，焼成部最大幅 1.6 m，焼成部床面傾斜25度を測る。窯体の主軸方位は N-163°-E である。

窯体は，青灰色焼土・赤色焼土・黄色焼土の順に熱を受けている。焼成部と煙道部の境においては，両壁が約15 cmずつしぼり込まれる箇所がみられ，その上部と下部では壁の被熱状態が異なることから，窯内温度の調整(熱焼効率)を考慮して設置されたものと考えられる。



第 15 図　西 前 山 1 号 窯 実 測 図

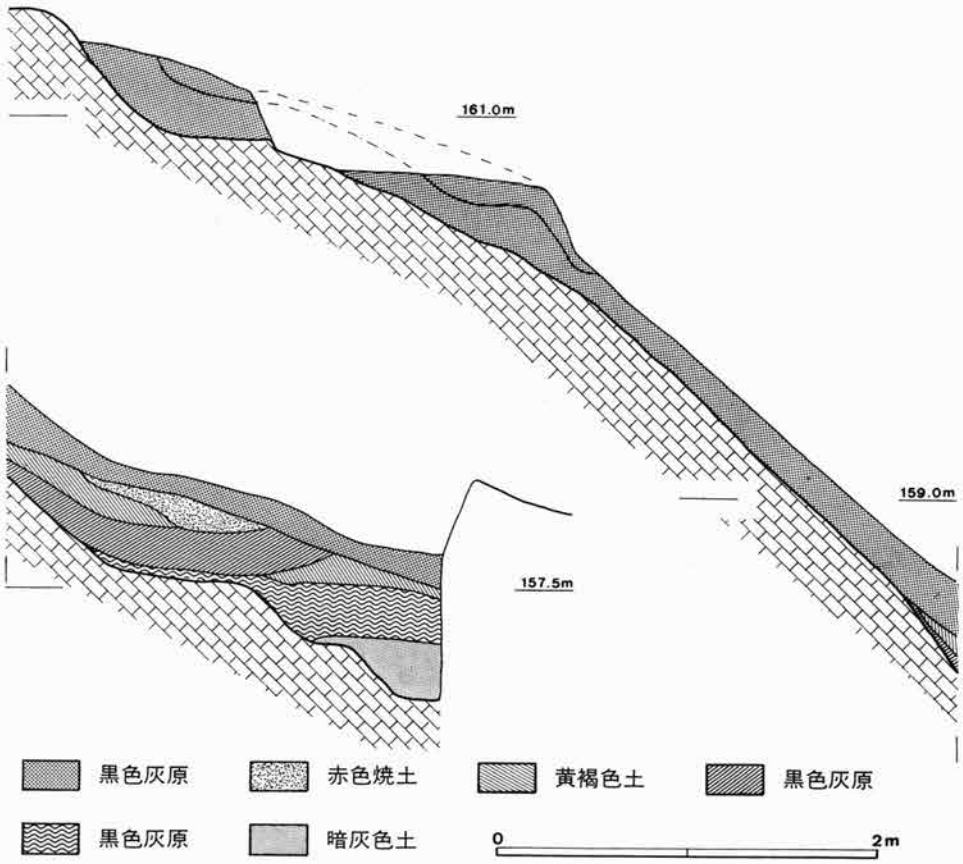
また下部においては青灰色焼土が2層に分かれ検出された。

窯体天井部は崩落し，両側壁は遺存状態のよい焼成部分で床面より1 mを測る。

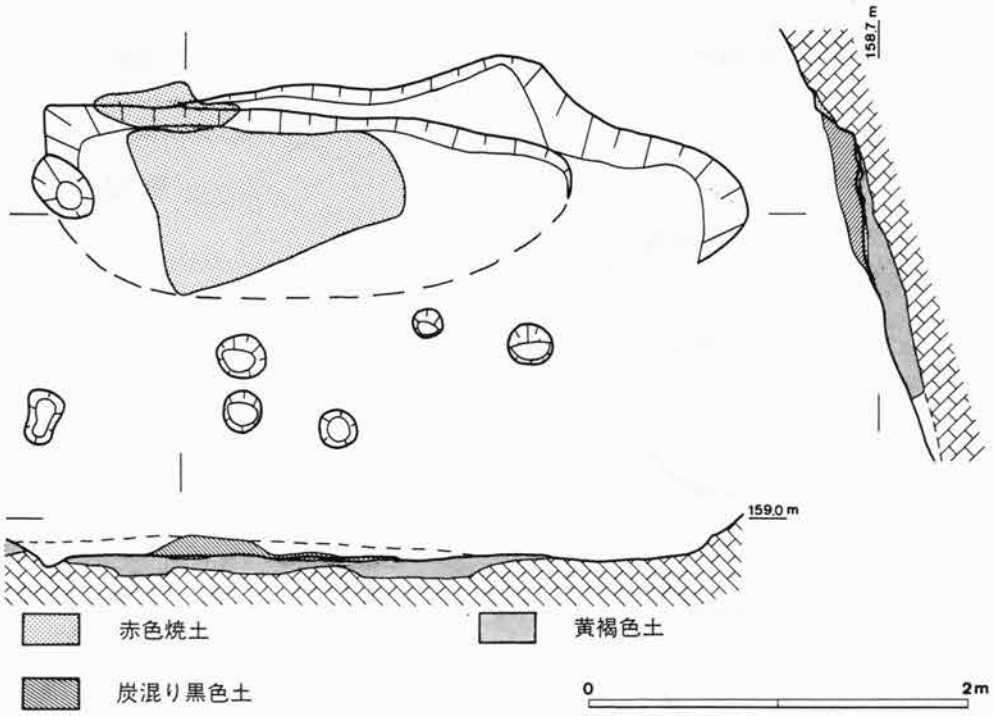
焚口部では，人頭大の焼け石を1個確認した。焚口閉塞石か，補強のための石材と考えられる。また，焚口から熱焼部へ約80 cm入った地点に両壁のしぼり込みがみられ，さらに窯体床面の断ち割りにおいてこの地点まで青灰色焼土の床面下に炭混りの黒色灰が約3 cmの厚さで堆積していたことが確認され，2次にわたる焚口の修復(窯体の拡張)が行われたことが判明した。

〔窯状遺構(1)〕

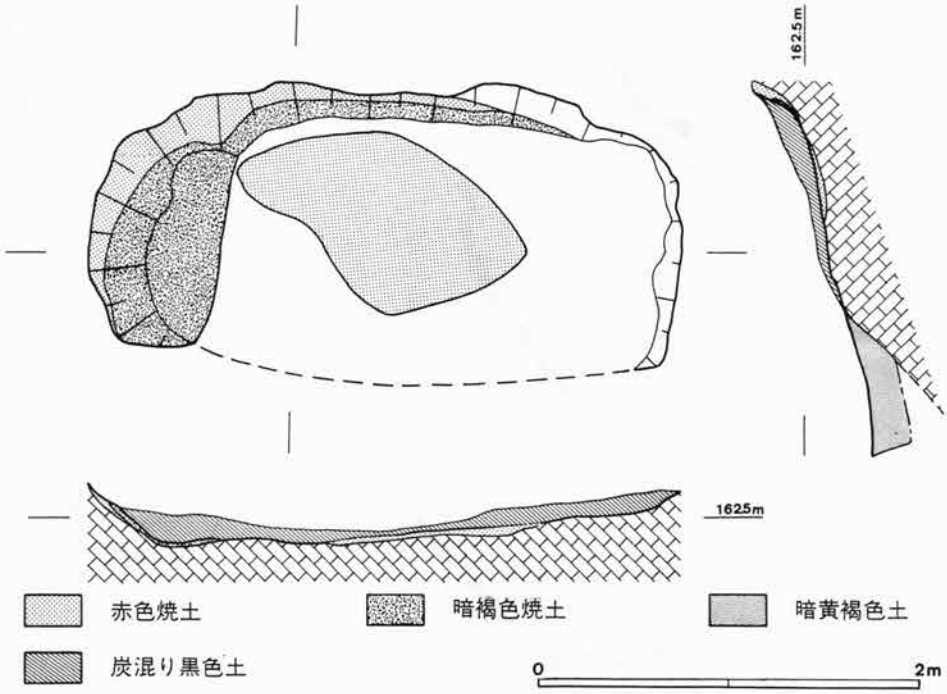
1号窯北東10 mの位置で検出した。窯体は丘陵斜面を利用し，黄褐色土を盛土し，平坦にして，丘陵稜線に平行に築かれている。丘陵側の壁及び床面が一部残るだけで，谷川部は削平を受け遺存状態が非常に悪い。壁は赤色焼土層が床面より約10 cm遺存する箇所があり，3 mm の厚さで熱を受けていた。床面直上には厚さ約15 cmの炭層が堆積しているが，遺物の



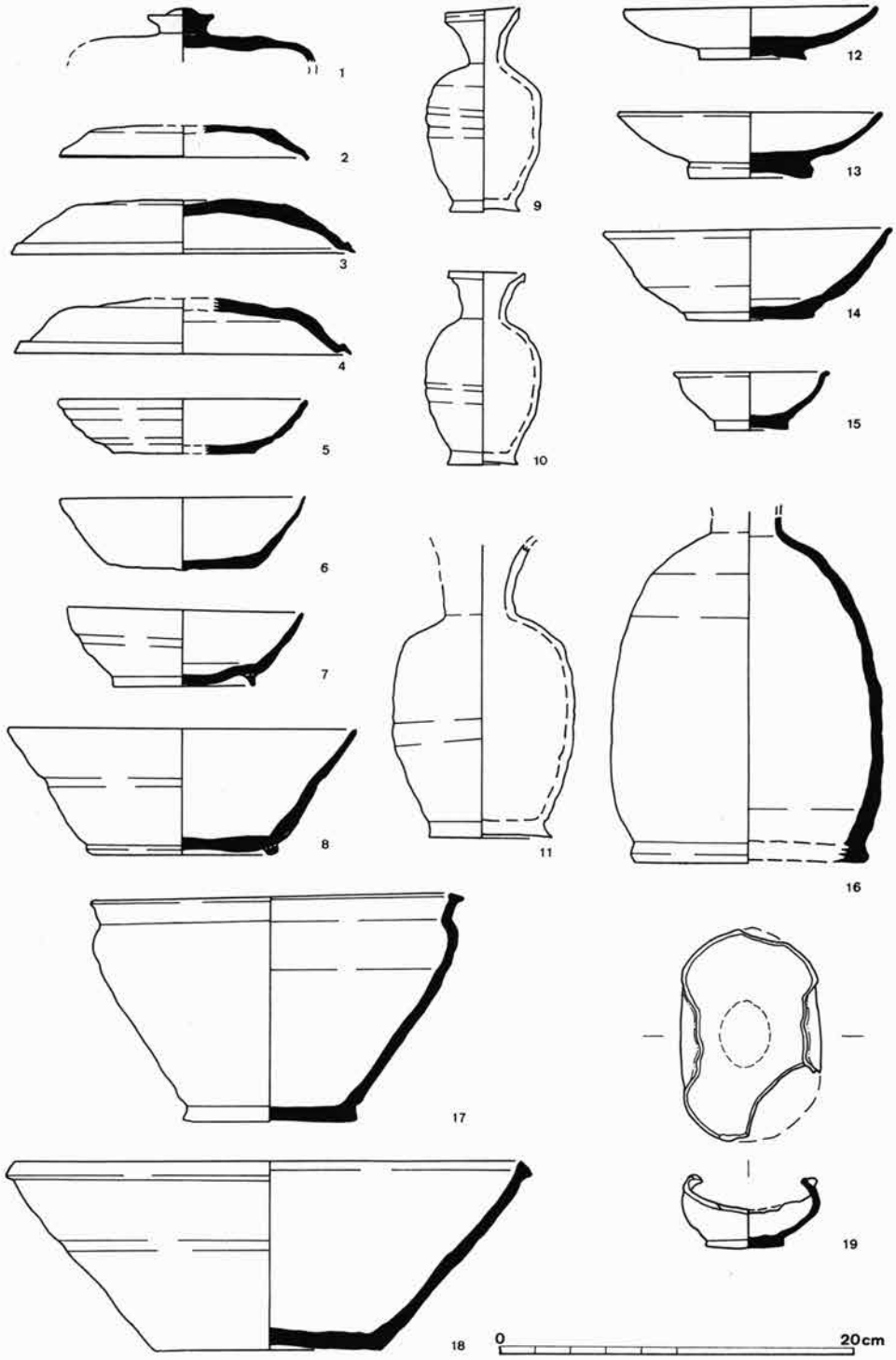
第16図　灰原堆積断面図



第 17 図　窯 状 遺 構 (1) 実 測 図



第 18 図　窯 状 遺 構 (2) 実 測 図



第 19 図　出 土 遺 物 実 測 図

混入はなかった。推定規模は，幅1.3 m,長さ3.5 mである。

〔窯状遺構(2)〕

1号窯に隣接して検出した。窯体は丘陵斜面を削平し，平坦にして構築している。丘陵側では壁が約20cm遺存し赤色に熱を受けていた。床面直上には窯状遺構(1)と同じく厚さ約15cmの炭層が堆積しているだけであった。推定規模は，幅2 m，長さ3.2 mである。

これら窯状遺構は窯の形態及び検出状況から須恵器焼成窯とは認め難い。また1号窯灰原の下層から検出されたことにより，1号窯に先立つものと考えられる。

4. 出 土 遺 物

今回出土した遺物は，その大半が1号窯灰原部からのもので，出土量は，コンテナ・バット約100箱を数える。これらの出土遺物は，杯・蓋・皿・壺・瓶子・鉢・酒杯・耳杯など9世紀後半と考えられるものである。遺物は，9世紀前半の形態を引き継ぐものから，10世紀代の様相を示す，過渡期のものであり，前者は，第19図(1～4，6～11，16～18)であり，後者は(5，12～15，19)が該当する。以下，現在整理中ではあるがその代表的な器種を器形別に形態や手法上の特徴を記すことにする。

蓋は(1,2～4)は，(2～4)が口縁部付近がS字状に屈曲して天井部に至るものである。つまみのない蓋である。天井部より口縁部にかけては，ロクロナデにより成形されており，天井部外面には，切り離した際のヘラ切り痕が残っているもの，ヘラ切り後，ナデ仕上げを行っているものがある。(1)は，つまみを有した短頸壺の蓋である。

杯は，平底のもの(6)と輪状高台を巡らすもの(7・8)がある。平底の杯(6)は，平坦な底部から外上方に立ち上り，口縁部でさらに上方に屈曲する。口縁部から体部にかけては，ロクロナデ調整を施しており，底部外面にはヘラ切りの痕跡が残る。輪状高台を巡らす杯(7・8)は，杯(6)の形態・手法上の特徴は変わりなく，9世紀前半の杯と比較すると，体部の立ち上りがゆるやかになり，高台の断面形も退化したものとなる。

瓶子(9・10)と壺(11)は，体部形が細長い卵形をしており，底部は平底である。瓶子は，ロクロナデ調整で，底部から口縁部まで一気に成形しているが，壺は，体部と頸部との境で貼り付けている。また，砲弾形をした壺(16)は，欠損している所で底部と体部を貼り付けているものと思われる。鉢は，口縁部でく字に屈曲するもの(17)と，口縁部まで外上方に真っすぐ立ち上るもの(18)がある。(17・18)とも，平坦な底部に粘土紐を巻き上げ，ロクロナデ調整によって成形している。

次に，10世紀の様相を示すものとして，杯(5，12～14)，酒杯(15)，耳杯(19)がある。

杯(5)は，9世紀から受け継がれてきた平底の杯の終焉を物語るものであり，(12～14)は，体部がゆるやかに立ち上り，口縁端部は上方に丸くおさめている。底部外面は，糸切り痕を残すもの(13・14)と，糸切りで切り離した後，中央部をわずかに削っているもの(12)がある。

5. ま　と　め

以上，西前山窯跡の概略を記した。ここで今回の調査成果をまとめると以下のようになる。

1)　西前山窯跡は，篠窯跡群の中で最も西端に位置する窯跡群である。

2)　丘陵西側斜面で9世紀後半の半地下式登窯(西前山1号窯)1基を検出した。また遺物の出土からみて10世紀代の窯跡(西前山2号窯)の存在もほぼ確実であろう。

3)　1号窯灰原の下で検出した窯状遺構は、篠窯跡群で4基見つかっており、その用途は不明であるが，今後このような遺構を考えうるうえで貴重な一資料となった。

さて，篠窯跡群は老ノ坂峠から西前山まで東西約3 kmの範囲内に分布しており，時期的には8世紀中頃の窯跡が東側，9・10世紀の窯跡が西側に築かれている。このように築窯においては東から西へという傾向がみられ，工人集団の移動，燃料消費等を考えるうえで興味ある資料が得られた。また篠窯跡群では10世紀を境として登窯から小型窯へと窯体構造が変化し，その画期を考えるうえでも貴重な資料となった。

注1　堤圭郎・安藤信策ほか「昭和52年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1978
安藤信策「昭和53年度国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1979
安藤信策・水谷寿克ほか「昭和54年度篠窯跡群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1980
安藤信策・水谷寿克ほか「昭和55年度篠窯跡群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1981
水谷寿克・石井清司ほか「篠窯跡群昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982

注2　立花正寛・佐藤勝憲・西垣真史・竹岡光男・青井　敏・西井淳也・藤田育子・宇野三雄・平田数太郎・法貴四郎・矢代四一郎・高橋一義・石野正男・小川ふじ・木村一江・西田初恵・中西宏・中西ふみ子

3. 味方遺跡第２次発掘調査概要

1. はじめに

味方遺跡については，昭和59年度に国道173号線の新丹波大橋橋梁新設工事に伴い，本線敷設部分の試掘調査を実施している。調査の結果，調査地区のほぼ中央から由良川沿岸にかけての区域で，弥生時代から奈良時代にわたる種々の遺構・遺物を検出し，従来不明であった当地域の様相の一端が知られるに至った。

本年度の調査(第２次調査)は，昨年度の試掘調査(第１次調査)で遺構の検出が最も顕著であった７・８トレンチについて，道路予定地いっぱいまで拡張して調査を行った。あわせて，第１次調査の期間の関係で上面のみの確認にとどまった遺構について，その全容の把握に努めた。

調査は昨年度に引き続き京都府土木建築部の依頼を受け，当調査研究センターが実施した。

現地調査は，調査課主任調査員水谷寿克・同調査員引原茂治・森下　衛・西岸秀文が担当した。調査期間は，昭和60年８月５日から60年10月５日までである。

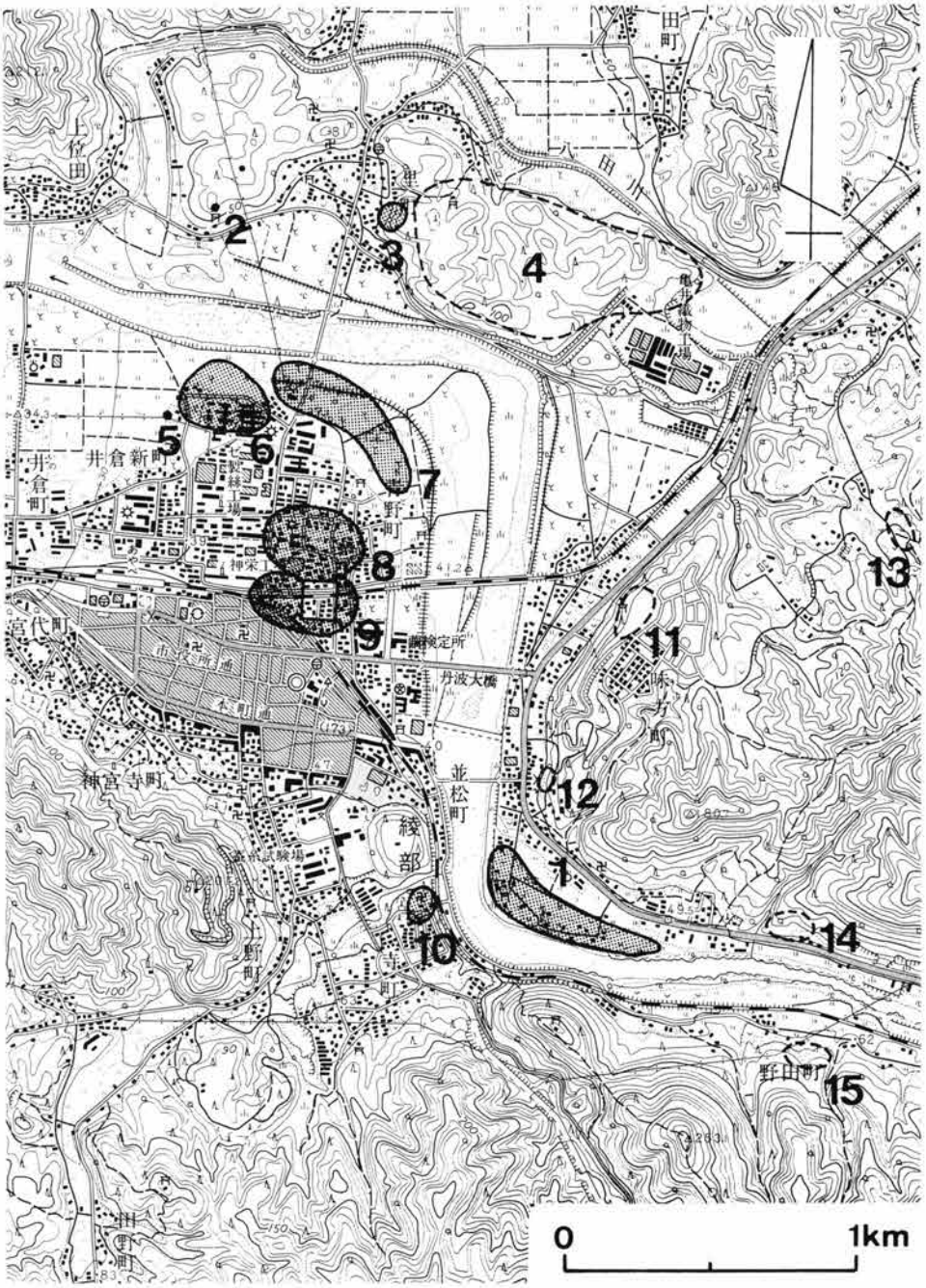
現地作業では，昨年度同様今回も地元有志の方々並びに学生諸氏に，それぞれ作業員・調査補助員として多くの参加協力を得た。また綾部市教育委員会・同企画総務部・綾部史談会・京都府中丹教育局・株式会社若宮酒造及び味方・綾中・青野の各自治会には，調査全般にわたって多大なる御尽力を得た。(注1)

なお，本稿では前回，整理の都合で詳しく触れることの出来なかった第１次調査の出土遺物もあわせて報告しておきたい。　(辻本和美)

2. 位置と環境

丹波高原の山間部を縫うように流れる由良川は，綾部盆地に入る手前で西から北へ大きく流れを変える。味方遺跡は，この流路屈曲部の右岸に位置する。この付近は北東にある低平な丘陵の裾から南西の由良川河岸に向かって緩やかな傾斜面を形成している。現在は主に水田・畑地として利用されている。標高は山麓部で 50 m・河岸部で45.6 mを測る。

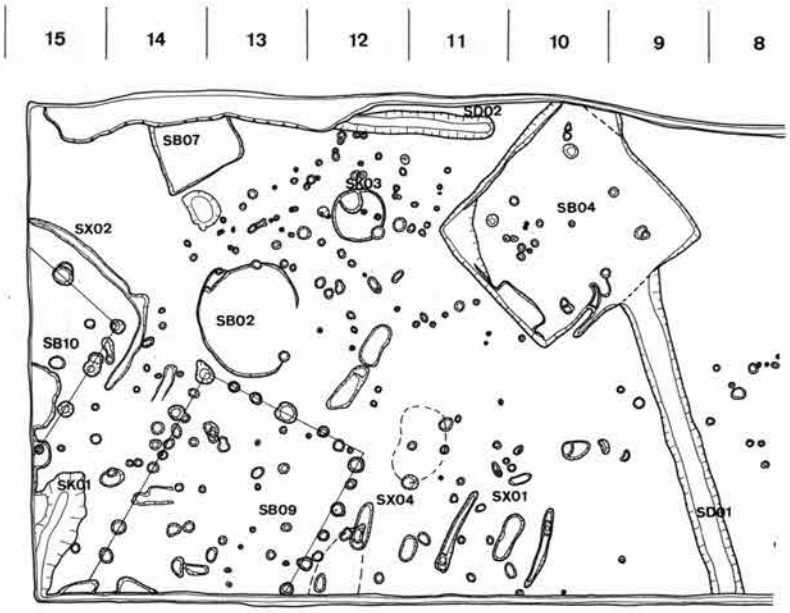
昭和45～46年頃に，綾部市教育委員会・綾部史談会が分布調査を行った。その結果，由良川の河岸に沿って帯状に広がる自然堤防上の微高地を中心に遺物が採集され，味方遺跡として『京都府遺跡地図』に記載された。特に，今回の調査地に近接する笠原神社周辺の畑地と，その東方約400 m付近の２地点は，遺物の散布が密であった。



第20図　周辺遺跡分布図

1：味方遺跡　2：里古墳　3：久田山遺跡(弥生・古墳)　4：久田山古墳群(前方後円墳2：円墳・方墳その他69)　5：青野大塚古墳(円墳)　6：青野西遺跡(弥生末～古墳前)　7：青野遺跡(弥生中～古墳)　8：青野南遺跡(弥生～奈良)　9：綾中遺跡・廃寺(古墳～奈良)　10：寺町遺跡(弥生)　11：斉神社古墳群(円墳7)　12：平古墳群(円墳2)　13：ごまさの池古墳群(円墳2)　14：古墳群(円墳3)　15：野田古墳群(円墳2)

第21図　トレンチ配置図



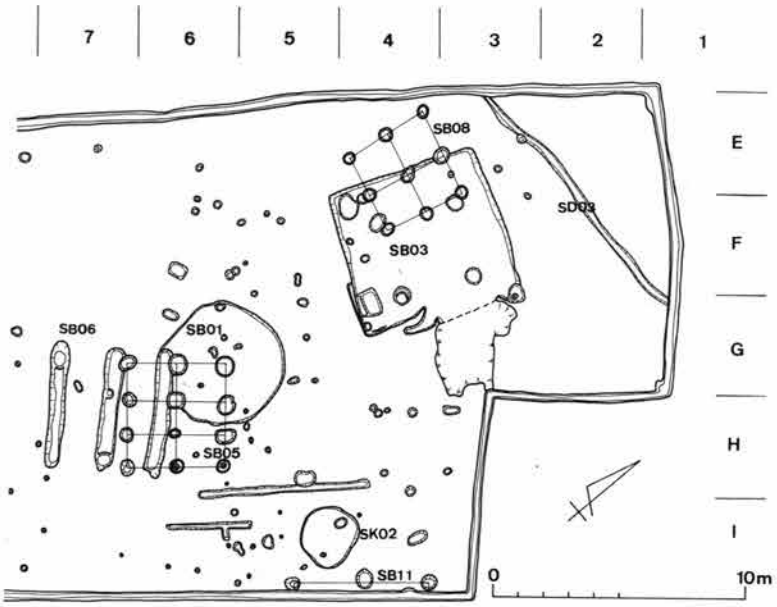
第 22 図　7・8 トレンチ

採集された遺物には，縄文時代・弥生時代に属する石鏃・チャート片・サヌカイト剥片，弥生土器さらに古墳時代から中世・近世にかけての須恵器・土師器片がある。当地域が人々の生活と場として適しており，早くから利用されていたことがわかる。

綾部地域には，当遺跡の少し下流域に，青野遺跡(第20図７)・青野西遺跡(第20図６)・青野南遺跡(第20図８)・綾中遺跡(第20図９)等の大規模な集落遺跡が存在する。これらの遺跡は，弥生時代から中・近世に至るものである。各遺跡はその集落活動の中心となる時期に若干の差異が認められる。このうち，青野南・綾中遺跡では古墳時代集落跡上に奈良時代前期に遡る寺院跡(綾中廃寺)や何鹿郡衙跡と想定される大規模な掘立柱建物群が検出されている。当地域が，盆地内上流域の中心と考えられる。

一方，味方遺跡は由良川上流の山間部と盆地平野部を結ぶ接点にある。また，日本海側の舞鶴・若狭湾方面への交通の要衝でもある。当遺跡が立地上からも，重要な位置にあることが理解できる。

当遺跡の周辺には，２～５基を単位とする小規模な古墳群が点在する。ただ，内容については不明な点が多い。このうち，当遺跡の北方の斉神社古墳群中の１基・紫水ケ丘古墳(第20図11)は，扁平な板石を用いた組合式箱式石棺を埋葬主体としていた。出土した小型勾玉や鉄鏃等から４世紀後半の築造年代が与えられている。これは，綾部市内の数多い古墳の中でも古い例に属する。



拡張区遺構配置図

3. 調査の経緯と概要

(1) 第１次調査(試掘調査)の概要

昨年度の第１次調査(試掘調査)は，国道27号線から由良川河岸に至る延長260 mの区間を対象とした(第図21)。その結果，山寄りの１～６トレンチについては，顕著な遺構・遺物等を検出しなかった。これに対し，調査地の中央を縦断する農道から河岸にかけての区間に開けた各トレンチ(７～９トレンチ)では，弥生時代以後の各種の遺構・遺物を検出した。７・８トレンチ及びその拡張区については，「4. 検出遺構」で記述する。また，9トレンチ(第25図)は，由良川に沿う自然堤防上に立地しており，地山面は吸水性の強い砂質土層からなる。トレンチのほぼ中央部付近で検出した土坑は方形を呈し，１辺約1. 8m・深さ約90cmを測る。土坑埋土は砂層と黄色粘質土層及び薄い焼土層の縞状の互層からなる。土坑底部から遊離した形で奈良時代の須恵器杯身(第36図９)１点が出土した。この土坑の南辺はほぼ同様な規模・形態をもつ方形土坑によって切られている。ただし後者については時期不明である。このほか，直径約 30 cmを測る円形柱穴列や須恵器皿(第36図10)を埋納する柱状穴のピットを検出した。しかし，畑の耕作溝やトレンチ調査の制約上，建物の規模・配置については明らかにできなかった。これらの柱穴群は，出土遺物から奈良時代に属すると考えられる。10トレンチでは，地山の礫混りの黄褐色土層面で数条の桑等の耕作溝を検出したのみである。遺構

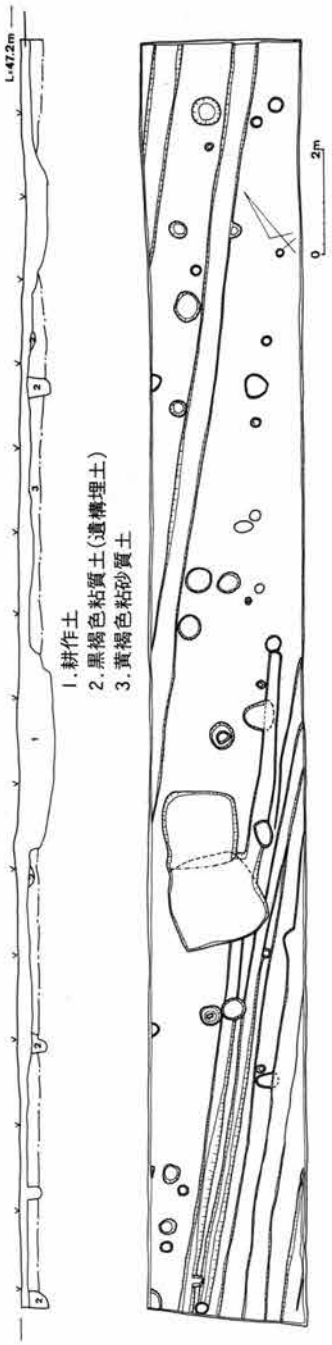
等は由良川の氾濫等によって削平されたと考えられる。

(2)　第２次調査の概要

２次調査では１次調査で掘り広げた７・８トレンチの拡張区を，さらに西側・北側に約400m²拡張した。１次調査の遺構検出面を考慮して，約40～80cmを重機によって除去し，以下を人力によって掘削した。その結果，１次調査で一部確認していた竪穴式住居跡のほか，新たに竪穴式住居跡１基・掘立柱建物跡１棟・土坑２基・溝２条さらに多数のピットを検出した。基本的な層序は上から，耕作土・灰色粘土(床土)・黒褐色粘質土・灰褐色粘質土・黄褐色粘質土(地山)である。灰褐色粘質土中には，弥生時代中期の土器を，黒褐色粘質土中には古墳時代後期から奈良時代にかけての土器を，それぞれ包含していた。ただ，灰褐色粘質土はトレンチ南西部にわずかに残るのみで，黒褐色粘質土と面的に区別しての調査は行えなかった。また，黒褐色粘質土もトレンチ北３分の１程度はほとんど削平されていた。各遺構は一様に黄褐色粘質土(地山)上面で検出した。また，遺構埋土は灰褐色粘質土と黒褐色粘質土とに明確に分かれた。上記の事実から，前者を弥生時代，後者を古墳～奈良時代の遺構と考えた。

なお，調査地域全般にわたって伏流水の影響か地下水位が高く，川岸側の９・10トレンチを除いて，調査期間を通して比較的浅い箇所でも湧水をみた。

(辻本和美・西岸秀文)

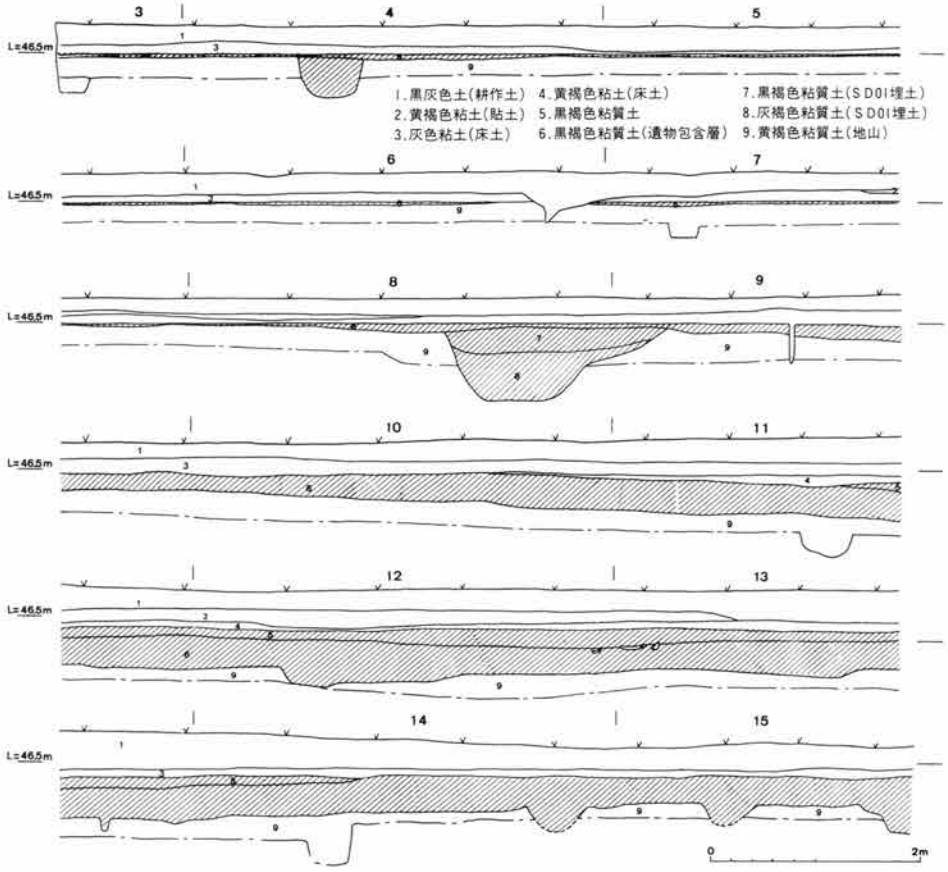


第23図　９トレンチ遺構配置図

4. 検出遺構

二次にわたる調査の結果，弥生時代から奈良時代にかけての様々な遺構を検出した。竪穴式住居跡５基・掘立柱建物跡６棟・溝３条・方形周溝墓状遺構２・土器溜り１，その他多数の土坑・ピットがある。その主なものについて，時期を弥生時代・古墳時代・奈良時代の３時期に分けて概述する。

(1)　弥生時代



第 24 図　7・8 トレンチ東壁土層断面図

竪穴式住居跡：SB 01（第25図）　CG 8 区(注2)を中心に検出した竪穴式住居跡である。平面円形を呈し，直径約 5 m を測る。壁高約 10 cm と，著しい削平を受ける。床面は堅く締まっており，中央で炉跡を検出した。住居跡内外にピットがあるが，柱穴とは断定できない。埋土から少量の弥生土器片が出土した。

竪穴式住居跡：SB 02（第27図）　CG 13 区を中心に検出した竪穴式住居跡である。平面円形を呈し，直径約 4.5 m・壁高約 5 cm を測る。さらに，東側はほとんど残らず，著しい削平を受ける。出土遺物は皆無であった。

方形周溝墓状遺構：SX 01（第26図）　CI 11 区で，土坑とその両側の溝からなる遺構である。また，東側の溝から弥生時代中期に属する１個体分の甕(第32図15)が出土した。これらから，南北辺を欠くが小規模な周溝墓的な遺構と考えたい。

方形周溝墓状遺構：SX 02（第22図）　CG 14 区で，ほぼ直角に屈曲する溝である。断面

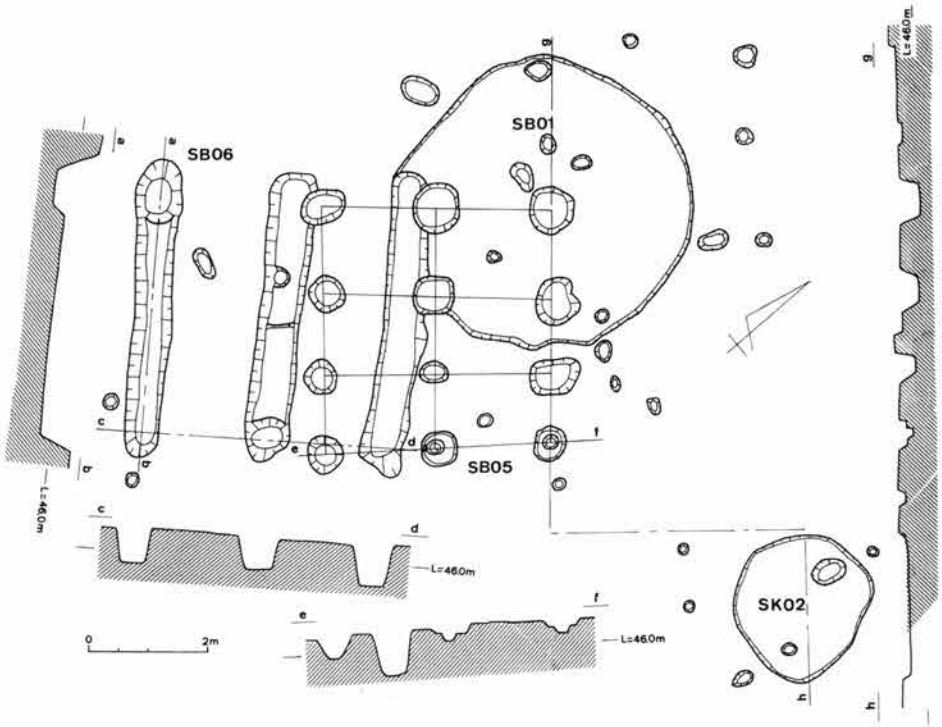
はU字型で，深さ約10 cmを測る。溝内より弥生土器片が出土した。これらから方形周溝墓の可能性が考えられる。

土坑：SK 01（第22図）　CI 15 区で検出した土坑である。検出位置がトレンチ南東角であるため全容は確認できなかった。トレンチの角で深さ約１mを測る。埋土から縄文土器片・弥生土器片(第31図１～７・第32図21)が出土した。

土坑：SK 02(第25図)　CI9区で検出した土坑である。平面はほぼ円形を呈し，直径約2m・深さ約10mを測る。床面のレベルは竪穴式住居跡 SB 01 とほぼ同一である。竪穴式住居跡SB01から約4. 5mの距離にある。

土坑：SK03(第27図)　CF12区で検出した土坑である。平面はほぼ円形を呈し，直径約２m・深さ約15cmを測る。竪穴式住居跡SB 02 から約3mの距離にある。(注3) 弥生土器（第31図９～11)が出土した。

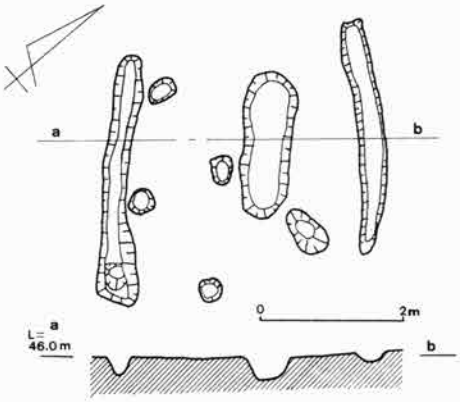
溝：SD01(第22図)　CE10区からCI9区にかけて東西方向に延びる溝である。トレンチ中央を横切る凹地状地形の北縁に位置する。断面はU字型を呈し，幅約1. 2m・深さ約50cmを測る。埋土は上層より黒褐色粘質土・灰褐色粘質土で，底部は地山下の礫層に達する。下層



第 25 図　SB01・SB05・SB06・SK02実 測 図

から弥生土器(第32図16・17・20・22・23)が出土した。

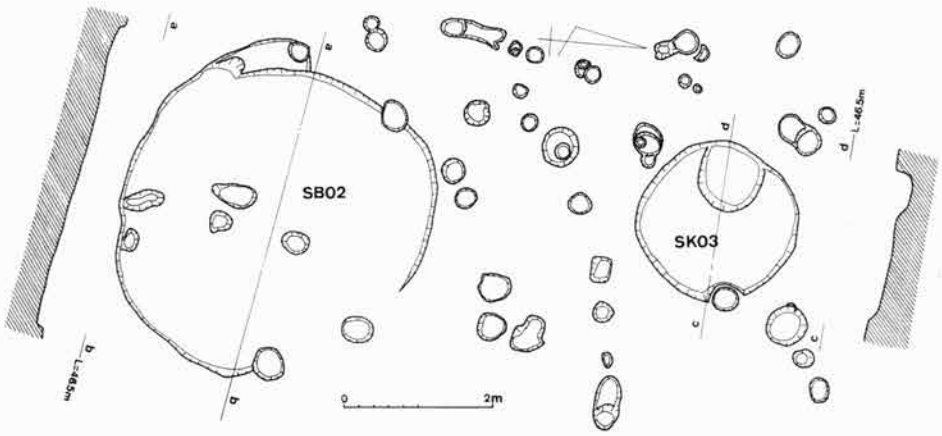
溝：SD 02　(第22図) CE 11・12 区をトレンチの壁に沿ってのびる溝である。北東部は竪穴式住居跡 SB 04 の手前約 2m で終わり，南西部は攪乱を受け不明である。断面はほぼV字型を呈し，幅約 0.8m・深さ約 0.6mを測る。埋土は上層より黒褐色粘質土・灰褐色粘質土である。両層の境から弥生土器 (第32図19)が出土した。



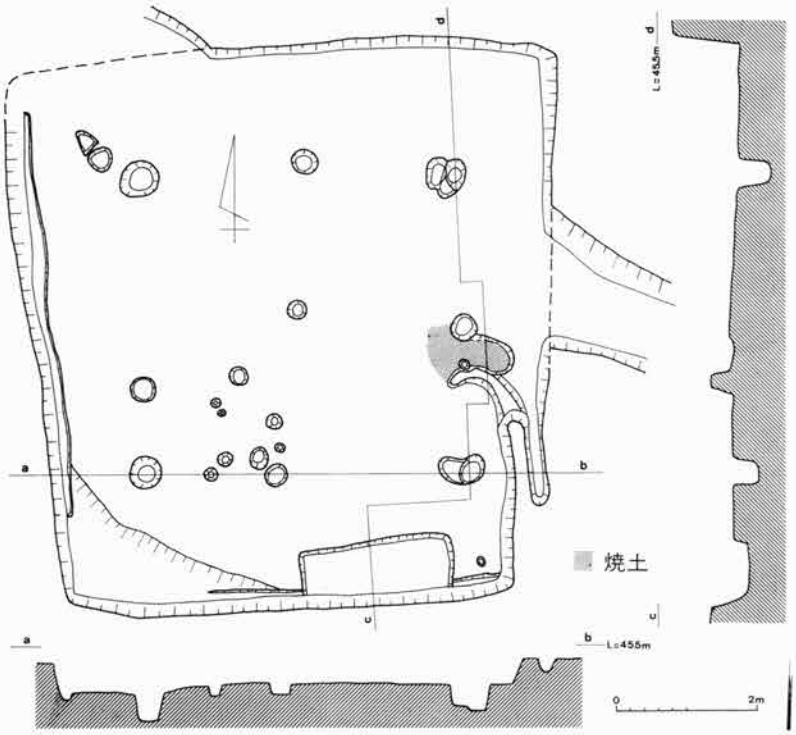
第 26 図　SX01 実 測 図

(2)　古墳時代

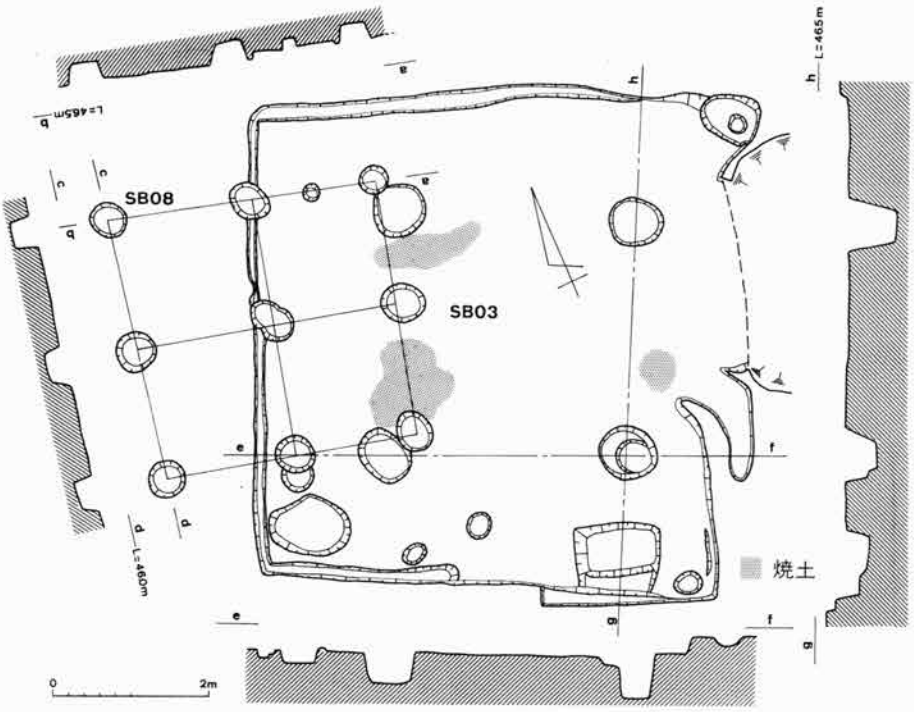
竪穴式住居跡：SB 03　(第29図)　CF4区を中心に検出した竪穴式住居跡である。東西6.5m・南北6.1mでほぼ方形を呈する。壁高は約15cm残存する。東辺の攪乱部の南側に煙道部を検出した。住居の一辺を掘り残してカマドを設置する形態は，いわゆる「青野型住居跡」(注4)と言える。床面は堅くしまっており，その上には焼土・炭が散在する。また，焚口部には約10cmの焼土塊が残存する。周壁溝は北辺・西辺・南辺でその一部を確認した。南辺中央部で途切れており，ここに入口部があったと推察できる。直径60～70cm・深さ40～60cmの柱穴を４個検出した。これらがその規模・配置から主柱穴と考えられる。北東角・南西角・南東角には貯蔵穴状の土坑がある。住居跡の埋土から出土する遺物(第36図)は，古墳時代後期から奈良時代にわたる。これは，掘立柱建物跡(SB08)に伴う遺物が混入したためと考えられ



第 27 図　SB02・SX03 実 測 図



第 28 図　SB04 実 測 図



第 29 図　SB03・SB08 実 測 図

る。６世紀末～７世紀初頭の住居跡と位置づけられる。

竪穴式住居跡：SB 04（第28図） CF10区を中心に検出した竪穴式住居跡である。北辺約８m・東辺約7.6mでやや台形に近い形態を呈する。壁高の残存状態は40～70cmである。それは，住居が南北方向の凹地状地形の底部にあったため，埋没後の削平があまり及ばなかったからと考えられる。カマドは東辺中央部にあり，「青野型住居跡」の形態をとる。焚口部には約10cmの焼土塊が残存する。そこから直角に折れ曲がる形で煙道部が設置され，その外側と住居の東辺とが一致する。柱穴は主柱穴と考えられるものが４個あり，直径30～40cm・深さ40～50cmを測る。東西の主柱穴間にもピットがあり，主柱穴が６個であった可能性もある。さらに，焚口部に接する形で両側に検出したピットは，カマドの立体プランを復元する資料となろう。住居跡南辺東側で壁に沿って東西約2.1m・南北約0.9m・深さ約10cmの土坑を検出した。土器が集中していることから，貯蔵穴的な施設が想定できる。６世紀末～７世紀初頭の住居跡と位置づけられる。

竪穴式住居跡：SB07（第30図） CE14区で検出した竪穴式住居跡である。東辺3.4m，東西は後世の攪乱により確認できない。壁高は約30cm残存する。床面は堅くしまっている。一部焼土があったのみで，カマド・柱穴等は検出できなかった。出土遺物は少なく速断はできないが，６世紀末～７世紀初頭の住居跡と考えられる。

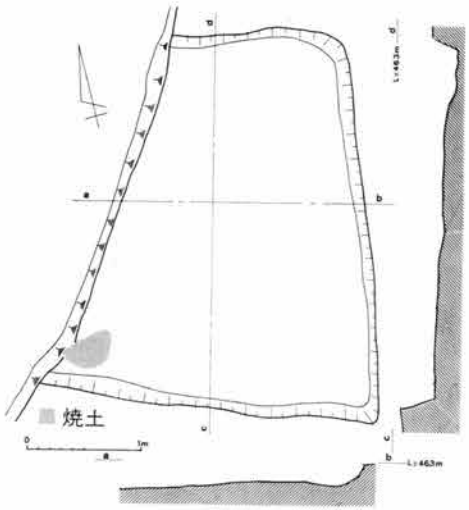
掘立柱建物跡：SB06（第25図） 布掘りの三条溝で，掘立柱建物跡と考えられる。三条溝は長さ4.8m・幅0.6～0.8mを測り，約1.5mの間隔で三条平行に配する。両端の溝は深さ約60cm，中央の溝は約30cmと前者に比べやや浅い。

土器溜り：SX 04（第22図） CI12区からCG11区にかけて，黒褐色粘質土中から多数の遺物が出土した。この地点は東西にのびる凹地状地形の底部で，流入してきた遺物が溜って形成されたと考えられる。（第33・34図）

（３）奈良時代

掘立柱建物跡：SB 05（第25図） CH６区で検出した２間（約4m）×３間（約4m）の総柱の掘立柱建物跡である。方位は３間の北辺で磁北より50度西に振っている。

掘立柱建物跡：SB 08（第29図） CE４区で検出した２間×２間の総柱の掘立柱建物跡



第 30 図　SB07 実 測 図

である。柱間は1.6mを測る。磁北から27度西に振っている。

掘立柱建物跡：SB 09（第22図）　CH 13 区を中心に検出した掘立柱建物跡である。北辺は2間以上(約8m）で，主柱穴間に補助的な柱穴があると考えられる。東辺6.5m・西辺9.5m の間に多数のピットが並び，建て替えがあったと考えられる。磁北から22度西に振っている。

掘立柱建物跡：SB10（第22図）　CG 15区で検出した掘立柱建物跡である。2間以上(4.7m)×4間以上(6.1m)の規模をもつ。磁北から17度西に振っている。

掘立柱建物跡：SB 11（第22図）　CI 4区で検出した掘立柱建物跡である。一辺2間(約5.3m)，あとは調査地外になるため確認できなかった。

溝：SD03（第22図）　トレンチ北端でほぼ東西方向に掘られた溝である。幅・深さともに約30cmを測り，断面は両壁がほぼ垂直に下がる_/字型である。（辻本和美・西岸秀文）

5. 出 土 遺 物

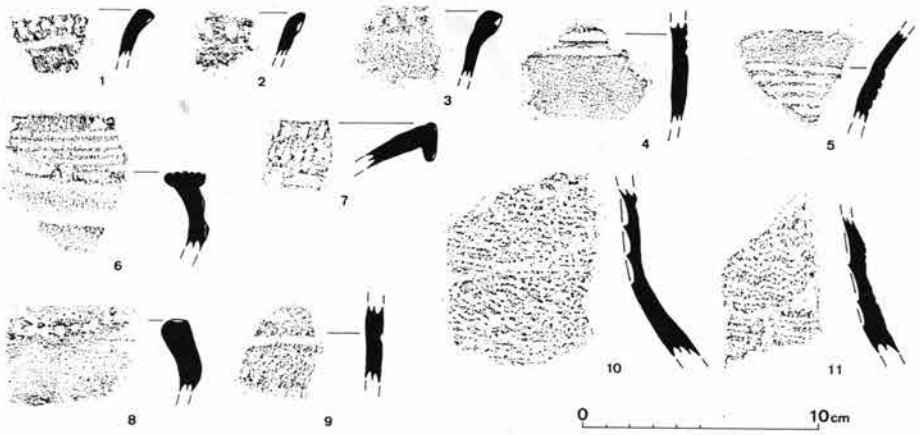
今回の調査では，整理箱約40箱に及ぶ遺物が出土した。以下，時代を追って概述する。

（1）　縄文・弥生時代(第31図・第32図)

今回の調査で検出した遺構は，弥生時代中期と考えられるものが最古である。以下に記すそれ以外の遺物は，近隣にその時期の遺構の存在とを示唆するものであろう。

1～3・8は鉢型土器の口縁部と考えられる。1～3は口縁部に8～10mmの隆帯をもつ。その隆帯上に，1･2は円形，3はくさび型の刺突文を施す。8は厚みのある口縁端部の上方に円形の刺突文を施す。これらの類似例は福知山市の武者ケ谷遺跡(注5)にみられ，縄文時代中期の資料として報告されている。同じ由良川水系の遺跡としてその関連性が注目できる。4は鉢の体部片で，少なくとも3条以上の沈線を施してあったと考えられる。5は壺の頸部と考えられ，5条の沈線を施す。9も壺の頸部かと考えられ，1条の沈線がみられる。4・5・9はいずれも弥生時代前期に属する資料と考えられる。6は直立する鉢の口縁部と考えられる。口縁端部を内外に拡張して面をもたせ，そこに5条の凹線文を施す。また，口縁部直下には3条の幅広い凹線文を施す。7は広口壺の口縁部で，端部付近で下方に大きく拡張する。その上下端にキザミ目文を施す。ほかに同様の面をもった端部に羽状文を施すものもある。これらは弥生時代中期中葉～後葉に属す。10・11は同一個体と考えられる壺の頸部である。4条1組のクシガキ直線文，4条1組のクシガキ波状文を交互に施す。
弥生時代中期前葉に属する。

12は，広口壺の口縁部で，大きく外反する口頸部をもつと考えられる。口縁端部は面をな



第31図　縄文・弥生土器拓影
1・2・3・4・5・6・7：SK01　8：包含層　9・10・11：SK03

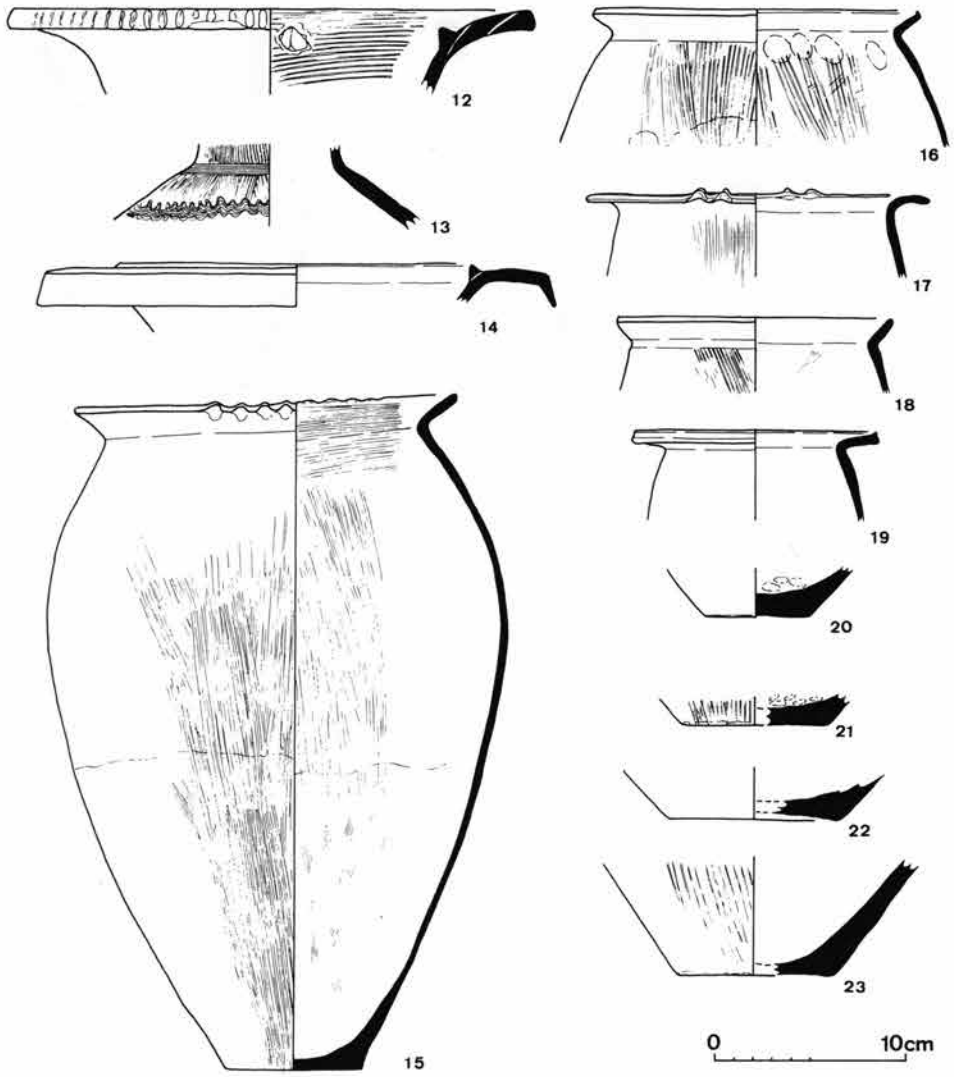
しキザミ目文を施す。内面に１か所直径約1 cm の円錐状の突帯を貼り付ける。13は壺の肩部から頸部である。肩部にクシガキ波状文，頸部にクシガキ直線文を施す。14は高杯の口縁部である。口縁部は水平に広がり，外縁は垂下する。内縁には１条の突帯を巡らす。15～18は甕である。口縁部が「く」の字状に外反するもの(15・16・18)，水平に近く屈曲するもの(17・19)がある。16・19はいわゆるはねあげ口縁を呈する。15は唯一完形に復元し得た。口径20.2 cm・器高 35.0 cm・体部最大径 25.0 cm を測る。口縁部は「く」の字状に外反し，端部はやや丸い。口縁部の３か所を波状に仕上げる。この形態のものが15・17のほかに図化できなかったもの２点を含めて計４点ある。(注6) 口縁部は横方向にナデ，体部から底部にかけてハケを施す。20～23は壺・甕の底部である。図示していないものを含めて計22点ある。内外面ハケを施すものが多くヘラケズリするものは確認できない。

（２）　古墳時代後期(第33図・第34図・第35図)

今回の調査で出土した遺物は，古墳時代後期のものが主体をなす。特に竪穴式住居跡(SB 04) 及び土器溜り (SX 04) から多数の遺物が出土した。ここではこの２つの遺構から出土したものについて記す。内訳は，須恵器杯身18・杯蓋10・高杯６・椀１・平瓶１・長頸壺１，土師器甕50・杯10・高杯１・壺１・鉢１・羽釜２・竈１がある。これらは一括性が強く，当地域の須恵器・土師器の組成等，土器の様相を知る上で貴重な資料を得たと言えよう。なお，杯身についてはＡ・Ｂに便宜上分類した。(注7)

須恵器

杯蓋（１・２・21・22・23）　丸味のある天井部から緩やかに下る口縁部をもつ。口縁部内面は横ナデ，天井部はヘラケズリを施す。口径12.4～12.9 cm・器高3.8～4.4 cmを測る。



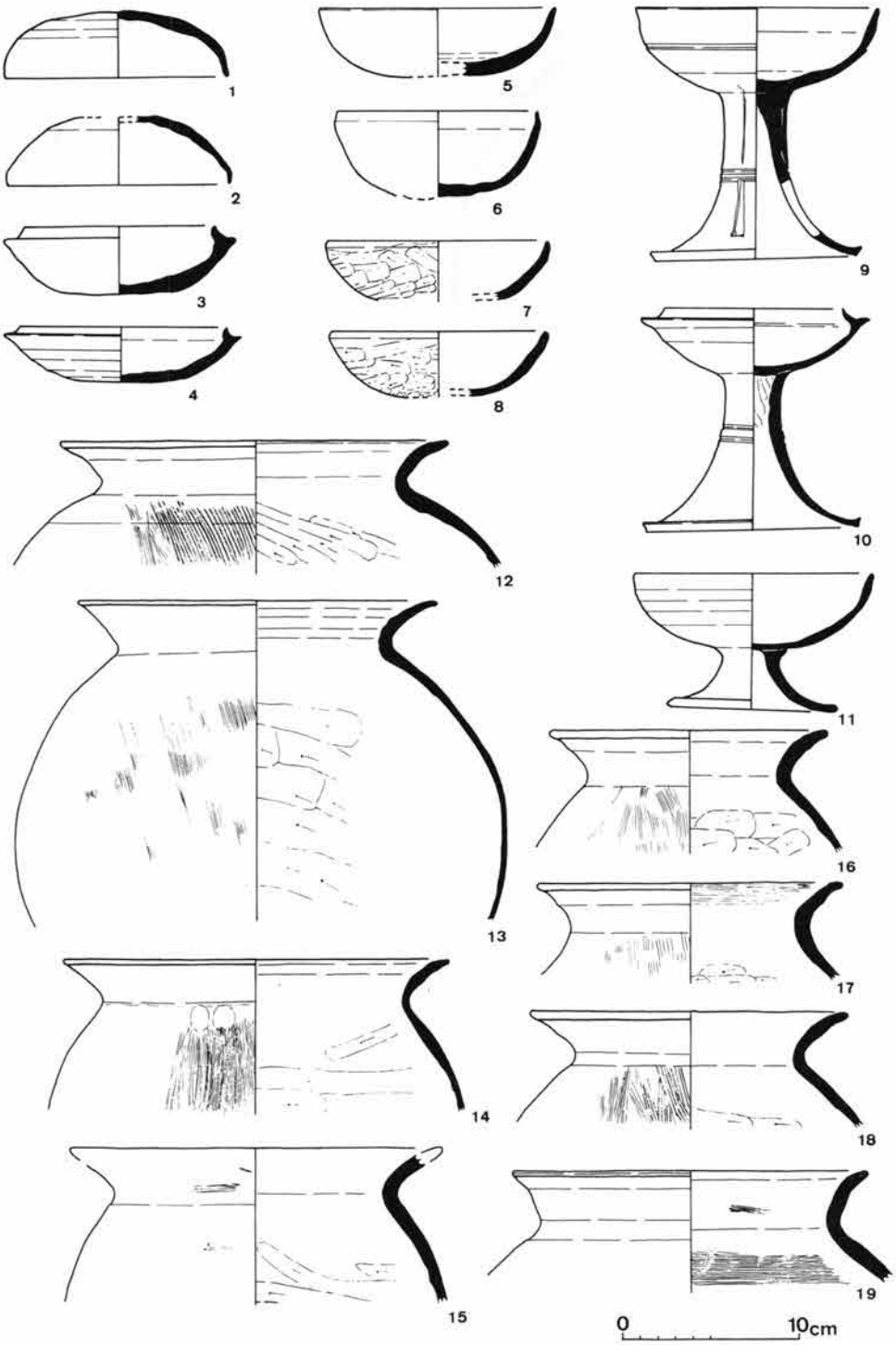
第32図　弥生土器実測図

12・18：諸遺構　13・14：包含層　15：SX01　16・17・20・22・23：SD01　19：SD02　21：SK01

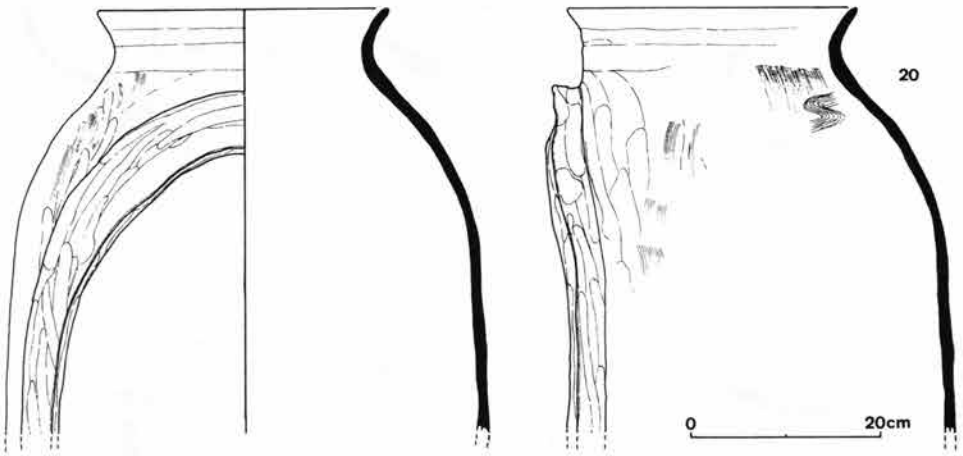
杯身A（3・4・26～30）　短く内傾する立ち上がりをもつ。3は底部外面はヘラ切り未調整，あとは横ナデを施す。4はほぼ全面横ナデを施す。26～30は底部をヘラケズリ，口縁部・内面は横ナデを施す。口径9.8～11.8cm・器高2.5～3.8cm を測る。

杯身B(31)　平らな底部にやや外反する口縁部をもつ。底部外面はヘラケズリ，口縁部・内面は横ナデを施す。口径10.6cm・器高3.1cmを測る。(注8)

高杯（9・10・24・25）　9・24は無蓋高杯である。9は長脚二段透かしの脚部をもつ。上段の透かしはヘラで沈線を入れるのみである。口径13.7cm・器高14.2cmを測る。24は脚部



第 33 図　SX04 出土遺物実測図 (1)



第 34 図　SX04 出 土 遺 物 実 測 図 (2)

を欠き，口径13.7 cmを測る。10・25は有蓋高杯で，短く内傾する立ち上がりをもつ。10は口径 10.1 cm・器高 12.6 cm を測る。25は口径 11.3 cm を測る。受け部の一部を指でつまみ，波状にする。

盌(38)　口径 19.0 cm・器高 8.0 cm を測る大型の盌である。底部と口縁部の境に明確な稜線を巡らし，杯蓋に非常に似た形態をなす。底部はヘラケズリ，あとはナデを施す。

土師器

甕(12～19・39～44)　強く外反する口縁部をもつ。基本的に口縁部には強いヨコナデ，体部外面にはハケ，内面はヘラケズリを施す。口径を測定できたのは25個体を数え，15.5～25.2 cm を測る。

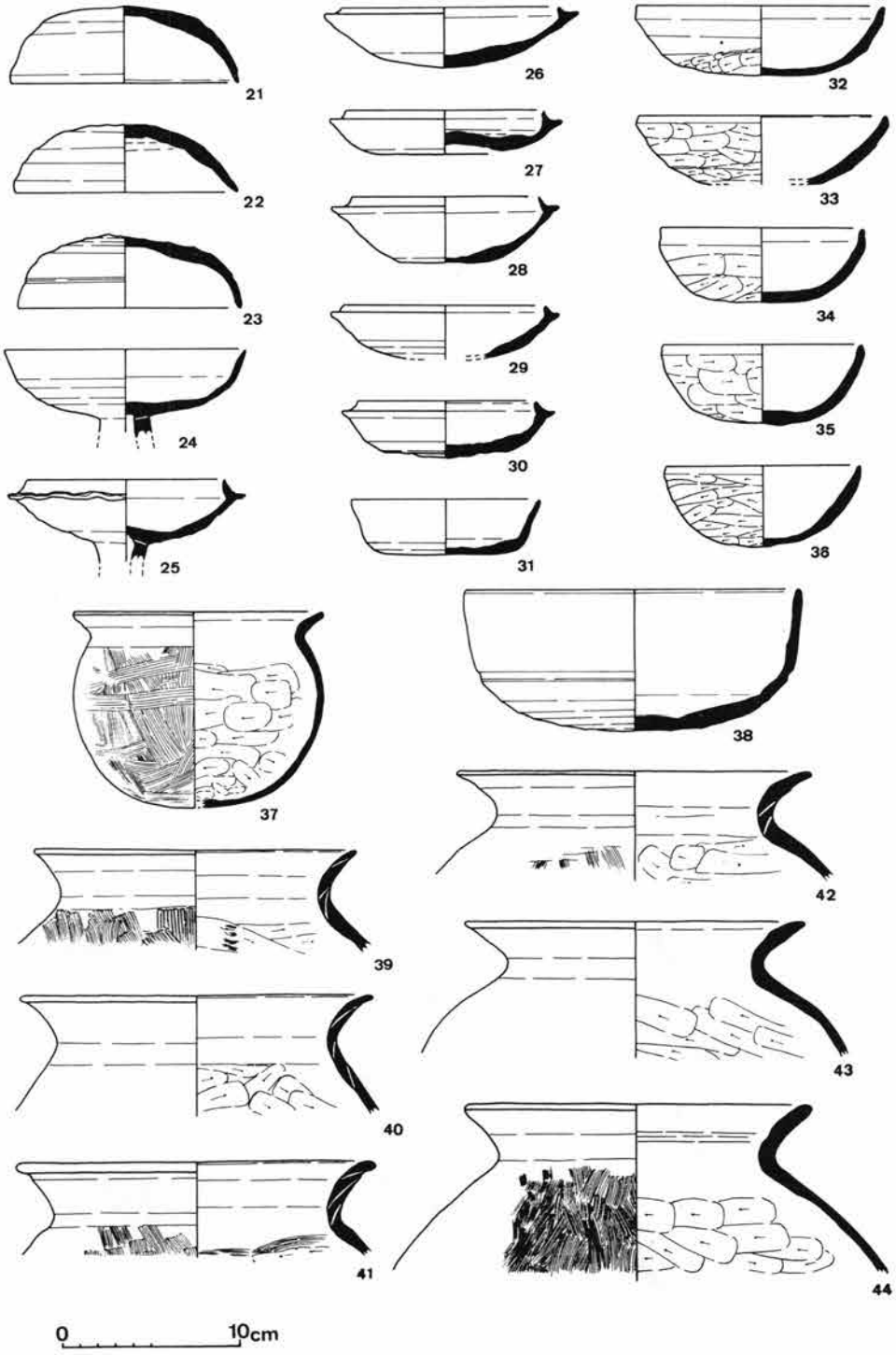
杯（5～8・32～36）　丸底に近い底部をもつ・口縁端部・内面はいずれもナデを施す。外面はナデるもの(5・6)，ヘラケズリするもの(7・8・32～36)がある。口径 11.1～14.0 cm・器高 3.8～4.7 cm を測る。器高指数28.6～30.9・34.2～36.5・40.5～41.2の3形態に分かれる。

高杯(11)　外方へ開く脚部に丸底に近い底部の杯部を有する。全部横ナデを施す。口径12.6cm・器高 7.8 cm を測る。

鉢(37)　口径 13.6 cm・器高 11.1 cm を測る丸底に近い底部をもつ鉢である。口縁部は甕と同様強く外反する。口縁部は強い横ナデ，体部外面はハケ，内面はヘラケズリを施す。内面底部には指圧痕がみられる。体部下半部は煤が多く付着する。

（3）　各遺構出土遺物(第36図)

1・3・4・6～8・11はSB 03の埋土から出土した。1は須恵器杯身で，短く内傾する立ち

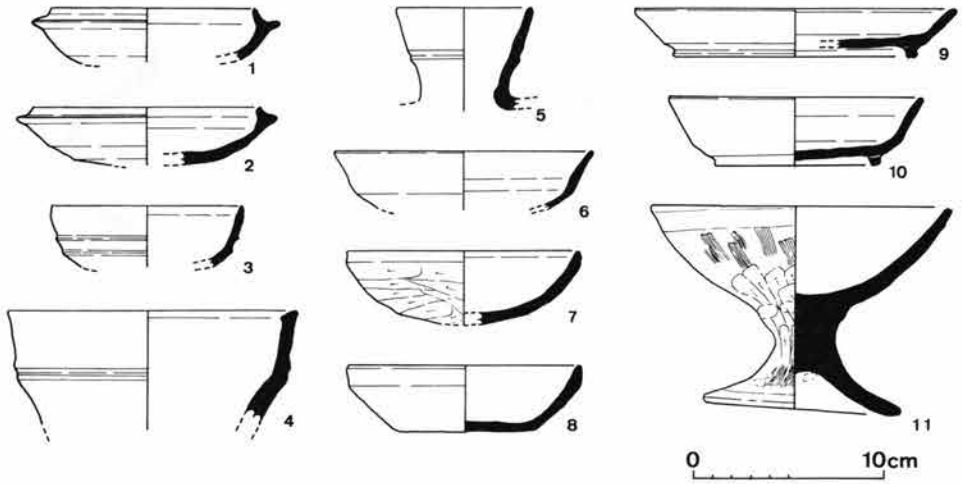


第 35 図　SB04 出 土 遺 物 実 測 図

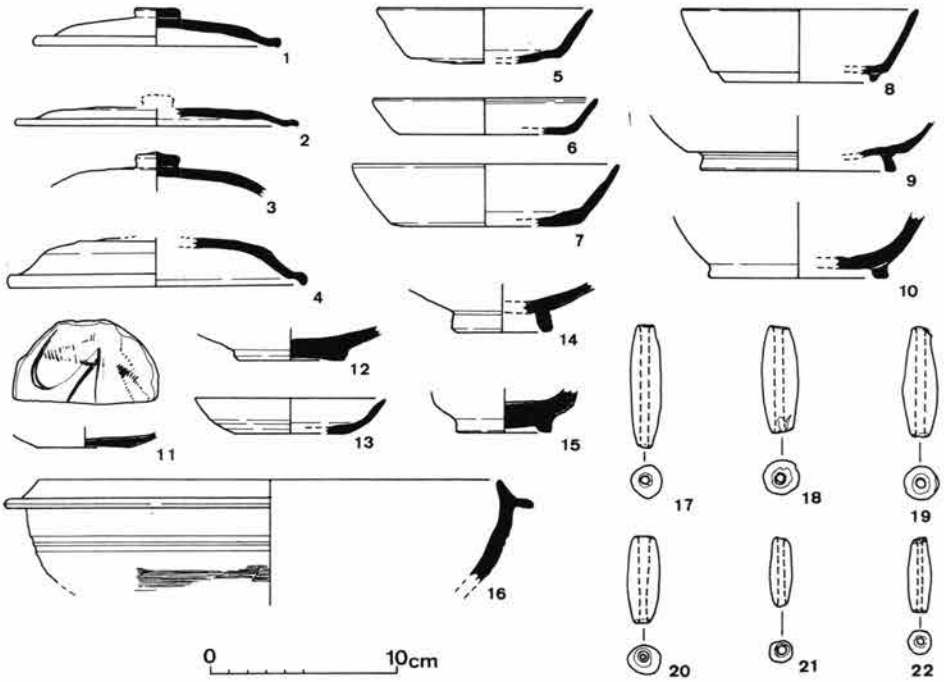
上がりをもつ。口径 10.4 cm・器高約 3.5 cm を測る。3は無蓋高杯の杯部で，体部外面に2条の突帯がつく。口径は10.0 cmを測る。4は須恵器壺の口縁部かと考えられる。口縁部の屈曲点に2条の沈線を施す。口縁端部はわずかに内に張り出す。6は須恵器杯身で，厚さ約 4 mmと薄い。7は土師器杯で，丸底に近い底部をもつ。口縁端部・内面はナデを，外面はヘラケズリを施す。口径 12.1 cm・器高 40 cm を測る。8は土師器杯で平らな底部をもつ。全面ナデを施す。口径 12.2 cm・器高 3.5c m を測る。11は土師器高杯で，住居跡南東部の貯蔵穴と考えられる土坑から出土した。杯部から脚部にかけての部分はヘラケズリを施す。3は，SB 07の埋土から出土した。須恵器杯身で短く内傾する立ち上がりをもつ。6は SB 06の南側の溝の底から出土した。提瓶の口縁部と考えられる。1条の沈線が入り，口径7.0 cm を測る。9は須恵器皿で，口径 7.0 cm・器高 2.5 cm を測る。10は須恵器杯身で，口径 13.5 cm・器高 3.5 cm を測る。いずれも底部と体部の境付近に貼付高台をもつ。

（4）　その他の遺物(第37図)

1・2・4は須恵器杯蓋で，平らな天井部をもち口縁部は屈曲する。3も同様の杯蓋と考えられる。5・7～9は須恵器杯身である。5・7はほぼ平坦な底部から体部が屈曲して斜め上方に口縁部がのびる。8は底部と体部の境付近に貼付高台をもつ。9は底部のやや内寄りに「ハ」の字状に開く高台をもつ。6は須恵器皿で，内側口縁部に沈線があり端部は丸くおさめる。10は須恵器壺で，底部と体部に外反気味の貼付高台をもち，体部は丸味をもって立ち上がる。これらの須恵器は，8世紀後半～9世紀初頭にかけてのものと考えられる。11は青磁皿で，見込みに猫かき状の施文がある。同安窯系とみられる。13は青磁皿，14・15は青磁椀で，竜泉窯系とみられる。これらの青磁は，いずれも13世紀のものと考えられる。12は



第 36 図　各遺構出土遺物実測図

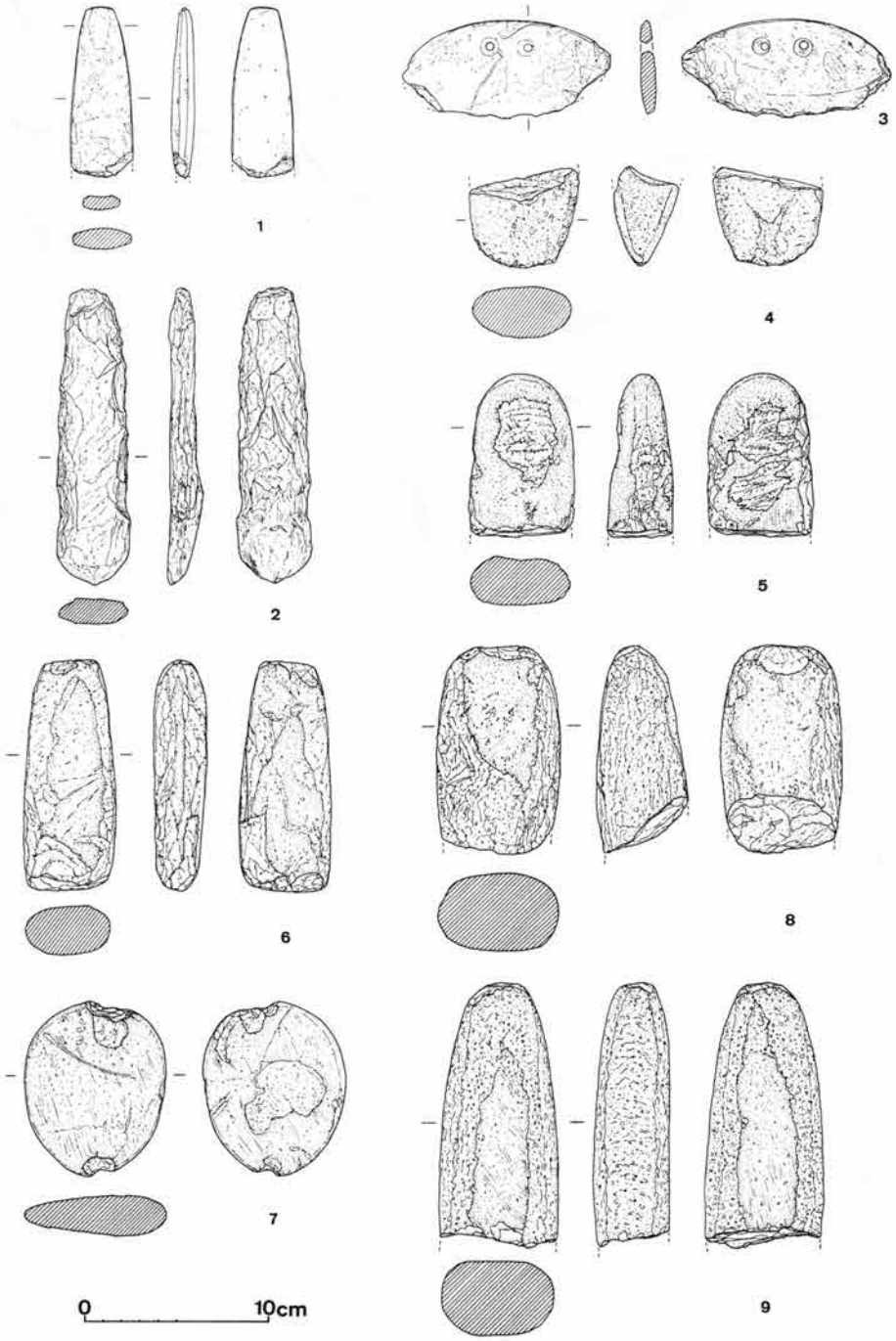


第 37 図　包含層出土遺物実測図

縁釉陶器皿で，胎土は須恵質，高台は削り出している。高台底はヘラで平滑に調整され，若干の施釉の痕跡がある。京都系で10世紀のものと考えられる。16は瓦質羽釜である。体部下半はヘラ削りの後ハケを施し，体部に２条の沈線がみられる。また，合計で43個の土錘が出土した(17～22)。重量は完形で残るもので 3.8～16.4ｇである。当地域の人々が漁撈にたずさわり，生活の多くの割合を由良川に依存していたことがうかがわれる。

（５）　石器類(第38図)

今回の調査では，土器のほか多数の石器も出土した。石斧12，石斧からタタキ石に転用されたもの３・タタキ石５・石鏃２・石庖丁１・石錘１・砥石１が確認できる。１は磨製石斧，２は打製石斧で，いずれも縄文時代のものと考えられる。３は石庖丁で，刃部は使用により一部欠損し，その周囲には線条痕が多くみられる。４～６・８・９は磨製石斧である。４は刃部のみが残り，５・６・８・９は刃部を欠く。５は敲打痕から，破損した後，タタキ石に転用されたと考えられる。７は石錘で，上下に紐をかけたと考えられる欠損部，擦痕がみられる。１は粘板岩，２はホルンフェルス，その他は砂岩あるいは玢岩と考えられるが詳細は検討を要する。主なものは図化し(第38図)，その数値については別表(付表１)のとおりである。



第 38 図　石 器 実 測 図

付表1　石器観察表（No.は実測番号と対応）

No.	器種	長さ（最大長）	幅（最大幅）	厚さ（最大厚）	重量	出土地点	備考
1	磨製石斧	9.2cm	3.4cm	1.3cm	52g	包含層	
2	打製石斧	16.2cm	3.8cm	1.9cm	145g	包含層	
3	石庖丁	5.4cm	10.9cm	0.8cm	55g	包含層	
4	磨製石斧	5.0cm	5.9cm	2.8cm	112g	包含層	刃部のみ残存
5	磨製石斧	8.8cm	5.7cm	3.4cm	268g	SB04	タタキ石に転用
6	磨製石斧	12.4cm	5.0cm	2.8cm	282g	包含層	
7	石錘	9.4cm	7.7cm	2.3cm	200g	包含層	
8	磨製石斧	11.3cm	6.6cm	4.6cm	520g	SB04	刃部欠損
9	磨製石斧	14.1cm	6.5cm	4.2cm	600g	包含層	刃部欠損

（引原茂治・西岸秀文）

6. おわりに

今回の調査で，数多くの知見を得ることができた。中でもその中核をなすのは古墳時代後期の遺構・遺物である。特に，今回検出した古墳時代後期の竪穴式住居跡3基のうち2基は住居の一辺を掘り残してカマドを設置するいわゆる「青野型住居跡」である。出土遺物から考えて当地域で杯身と杯蓋が逆転する前の段階，絶対年代にすると6世紀末～7世紀初頭頃のものと考えられる。これは青野遺跡をはじめ綾部市内で検出された「青野型住居跡」に先行し，最古に位置づけられる。「青野型住居跡」が味方遺跡で始まったとするのはあまりに早計すぎるが，その分布範囲が広がったことは確かである。また「青野型住居跡」は，その規模の差が大きいことも一つの特徴である。ここでも2基の大型住居跡とともに1基の小型の住居跡を検出した。これは，やがて統一権力が確立し，律令制国家体制が施かれる前段階の社会的様相を知る一つの手がかりと考える。

今回の調査では，主に弥生時代中期・古墳時代後期・奈良時代の遺構を検出した。しかし，出土遺物をみると，他の時代の遺物も数多く含まれ，近くにその遺物の示す時期の遺構が存在することも充分に考えられる。これにより味方遺跡は，縄文時代から中・近世に至る複合集落遺跡であることがわかる。調査地の周囲は幸いにもほとんどが水田で，その下に遺構が，存在することは充分に予想でき，その意味からも注目し続けなければならない遺跡である。今後の調査が期待される。

（西岸秀文）

注1　調査作業員

井田愛治郎　井田悦子　井田宗一　井田通枝　井田三千枝　梅原かず江　梅原幹夫　大西秀雄　片山尚子　川戸とよ子　木下元枝　久下晴美　四方和子　四方久子　新田千栄野　西村あさの　平井まつ枝　森津五郎(敬称略，50音順)

調査補助員

赤井敏行　今井節子　岩崎裕隆　植村浩昭　河波利明　黒田康夫　塩見幸三　繁田　豊　竹原　智之　野条信之　古屋敷和代　宮内啓隆　山下健一郎　(敬称略，50音順)

整理員

田中智子　出口貴志野　(敬称略)

注2　地区割表示については昨年度の方法を踏襲した。アルファベットの前のCは，7・8トレンチが第1次調査のC地区に当たることを示す。1区画を4m方眼に割付け，道路敷設予定の中軸線に平行なラインをアルファベット，垂直なラインを数字で示した。

注3　SB01 と SK02, SB02 と SK03, どちらも住居跡に付属するような形で土拡を検出した。両者間に何らかのセット関係が想定でき，類例の検索，土坑の性格等今後の検討課題となろう。

注4　中村孝行氏は，「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集　綾部市教育委員会　1982) において，それまで「カマドを置く一辺の半分が蹴込まれた形」あるいは「扁平な『L』字型」と形容された特殊な平面形をなす住居跡を統一して「青野型住居跡」と名付けられた。本稿でもそれに準ずるものとする。

注5　渡辺誠・鈴木忠司編『武者ケ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市教育委員会　1977

注6　指によるもの(15・他1点)ヘラによるもの(17・他1点)がある。青野A地点(釋　龍雄・山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司『青野遺跡A地点発掘調査報告書』(綾部市文化財報告　第9集　綾部市教育委員会)1976ではヘラによるものが多く報告されている。

注7　立ち上がりをもつものを杯身A，もたないものを杯身Bとした。

注8　遺物は住居跡の床面より約5cm 上面で出土した。後世の混入品とするか，あるいは，杯身Aの示す時期に宝珠つまみをもつ杯蓋とセットになる杯身が当地域にすでに存在していたことも考えられる。

4. 土師川改修工事関係遺跡 昭和60年度発掘調査概要

1. はじめに

この調査は，土師川改修工事に伴う事前の発掘調査である。調査対象地は，河川改修区間の中で，延長約600mにおよぶが，その大部分は，すでに昭和59年度に調査を終了している。(注1) 今年度は，昨年，調査に着手できなかった場所について発掘調査を実施した。調査地は，京都府福知山市長田878-2に所在し，水田の中で島状に高まり，周辺水田面から約1.2mあり，標高約29.6mを測る。土師川から約25m離れた位置で，増水時には冠水する高さであるが，以前は墓地として使用され，調査地に残っていた石塔では「一應宗月」，「祖流信長」等の文字を読み取ることができた。この調査地一帯は，和田賀・前ケ嶋・仲堤遺跡として知られる範囲に入り，かつての分布調査によって，チャートの削器や石鏃をはじめ，弥生・古墳・奈良など各時代の土器類が出土し，極めて長期間にわたって集落として利用されていた土地であることが判明している。しかし，昨年度の調査でも，遺跡の核心に触れることはできず，集落の実体は必ずしも明確になっていない。(注2)

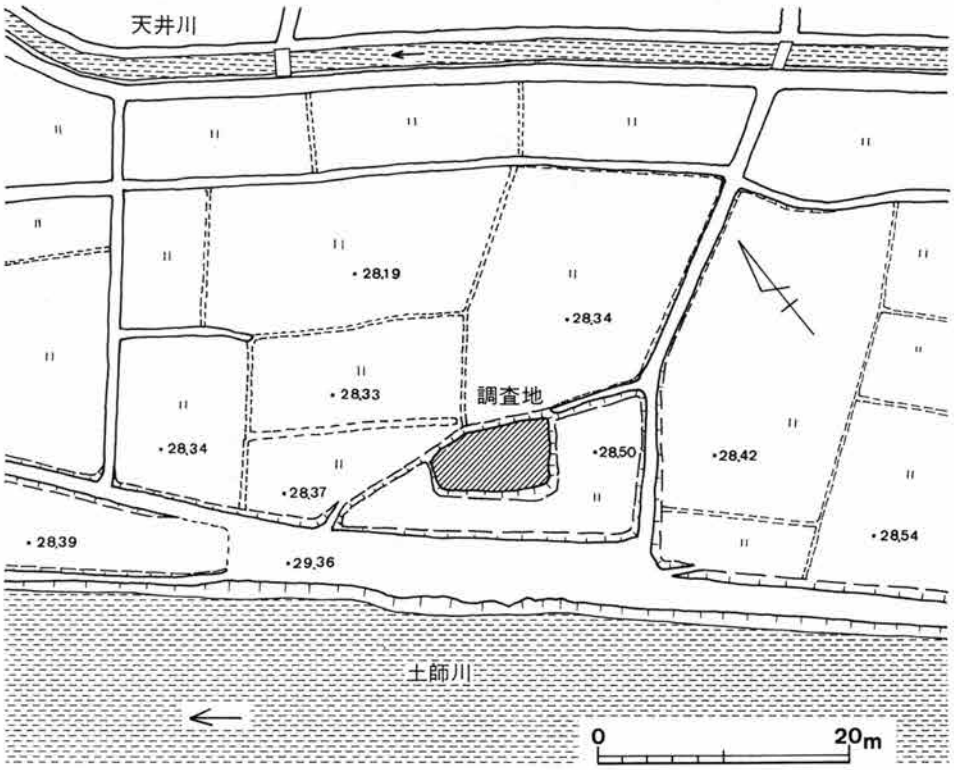
第39図　調査地位置図(1/50,000)

調査は，京都府土木建築部の委託を受け，昭和60年9月26日から11月13日まで実施した。調査を担当したのは，当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・同調査員肥後弘幸である。なお，調査にあたっては，福知山市教育委員会，土師川改修工事事務所，福知山市建設部土師川改修促進同盟会等，関係諸機関の方々に数多くの御協力を賜わった。また，長田上松区長・吉

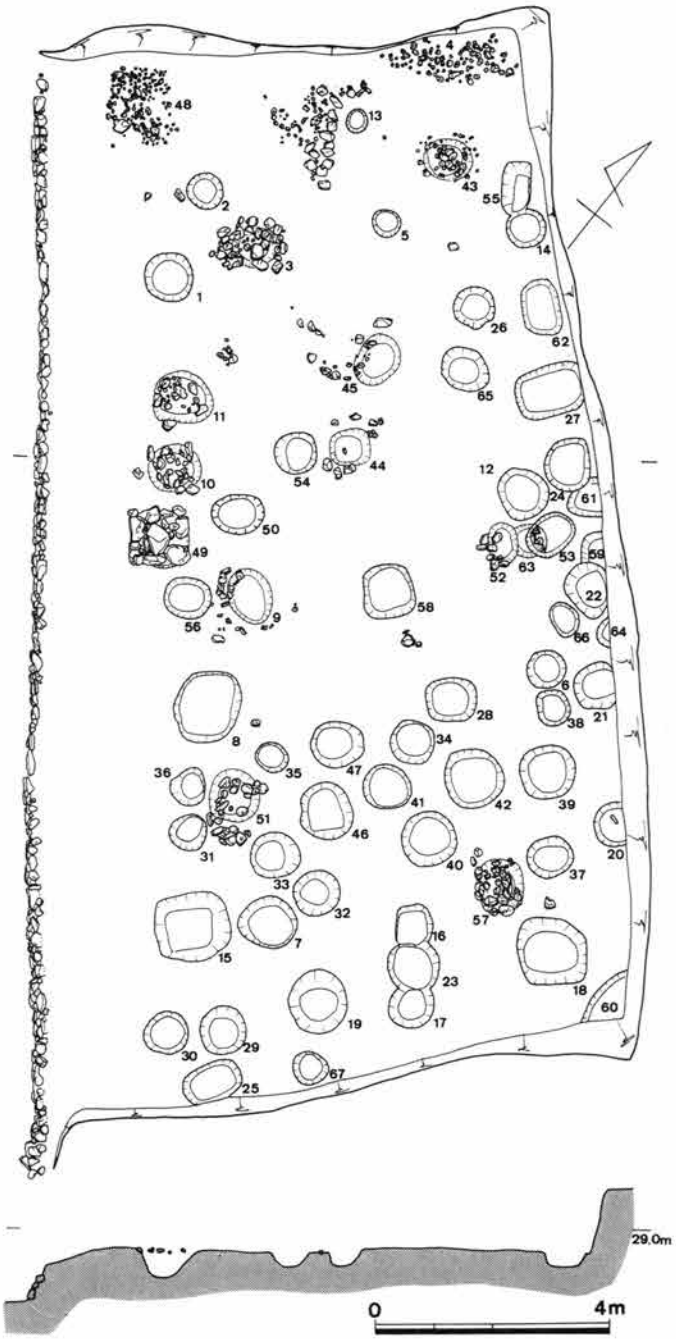
見芳郎氏，段区長・水谷高氏をはじめ，地元の方々には，調査参加を含め，多くの御助力をいただいた。記して謝意を表す。

2. 調 査 概 要

現地調査は，9月26日に作業員・調査補助員の参加のもとで慰霊祭を行い，慰霊祭の終了後，樹木の伐採及び重機による掘削を開始した。トレンチを土師川と平行に設定した。表土をはがした時点で一石五輪塔や墓石等の破片が出土した。表土の下の不安定な暗褐色砂質土と次の灰褐色砂礫層の途中まで除去した。表土下約80 cmで初めて墓の施設の一部であったと思われる人頭大の石が目立つようになり，重機掘削を止めた。10月1日から人力掘削を開始し，図面等の作成も並行して行った。墓地は数回にわたって造成されたらしく，墓坑には砂混じりの礫層の上から切り込む一群，その上層の褐色砂層から切り込む一群，さらに，上層の灰褐色砂礫層から切り込む一群がある。砂礫層の上には暗褐色の砂質土が堆積しており，表土はその上にあることが判明した。11月13日には納骨を残して現地作業を終了した。12月20日長田上松地区の共同墓地にて納骨を行った。



第40図　調 査 地 周 辺 地 形 図



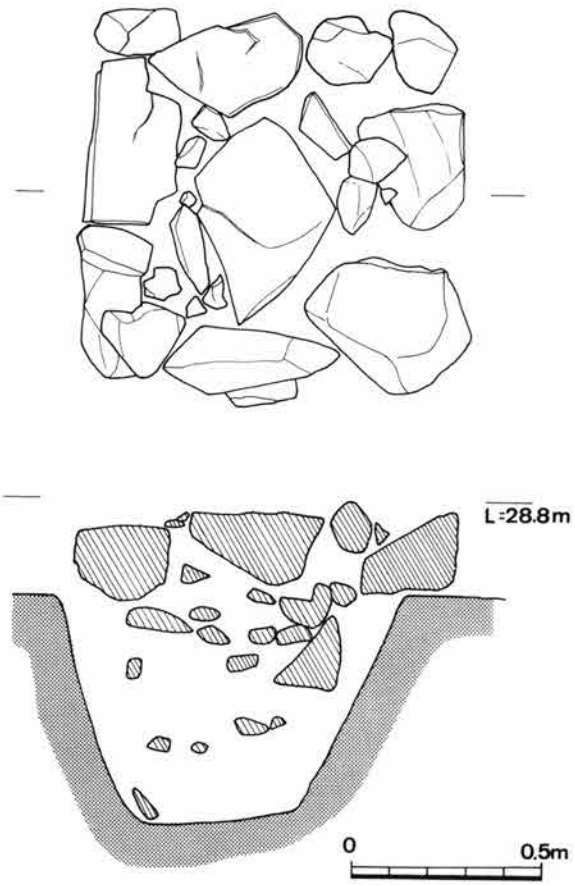
第41図　遺　構　実　測　図

(1)　検出遺構(第41図・第42図)

検出した遺構は土坑墓と思われる施設とそれに付随する石垣状遺構である。

土坑墓には墓坑上に石組，集石等外部施設の見られるものと，施設等が見られず土坑のみ観察できるものがある。(付表2)

外部施設のあるものの中には10・11・49号墓のように方形に組まれたものと，3・57号墓のように拳大の円礫を寄せ集めたものがある。49号墓(第42図)は人頭大の角礫からなる一辺1mの方形の石組を持つものである。この石組の真下に直径0.8m・深さ0.7mを測る土坑があり，土坑内にも角礫が入っていた。人骨・遺物等を持つものがわずかにみられるが，棺等の施設はなかったものと思われる。



第42図　49号墓実測図

石組・集石のある墓坑は63号墓を除いていずれも褐色砂層の上から切り込まれていた。人骨の残っているものはなく，遺物も釘・土師器小皿を持つものがわずかに見られるが，多くは棺を持っていなかったものと思われる。

63号墓は52・53号墓下層で検出した集石のある墓坑で，64・66号墓とともに褐色砂層の下の砂混じりの礫層の上から切り込む。64・66号墓からは歯・釘・貨幣各6枚が出土した。4・48号墓は集石の下からは墓坑を検出できなかった。

石組・集石等が見られず，墓坑のみのものは，今回検出した古墓の大半を占め，その多くが砂礫層から切り込んでいる。人骨の残っているものが多く，遺物には釘のほかに，副葬品として，土師器小皿・瓶子・煙管・煙管入れの金具・陶製人形・貨幣等がある。被葬者は多くが座棺に入れられて葬られていたらしく，頭蓋骨が四肢骨の間に陥没した状況が観察できた。いずれの土坑も直径 0.8m ほどの小さなもので，深さも本来 1m ほどであったと思わ

れる。人骨はあるのに釘の出土しないものがあり，これらは棺に入れずにそのまま埋葬した可能性がある。

石垣状遺構をトレンチの西端で検出した。人頭大の河原石を3段に乱石積みしたもので，高さ約50cmを測る。遺存していた長さは約19mであるが，本来は南北にもう少し続いていたものと思われる。この石垣は墓地造成当初に墓域を区画することを目的として造られたものと思われるが，以後墓地の造成が繰り返されるのにあわせて改築された形跡はなかった。

(2) 出土遺物(第43・44図)

墓地に伴う遺物と上流から流されてきた遺物が墓坑内及び包含層から出土した。また，それらとは別に人骨を34体回収した。墓地に伴う遺物には，土師器小皿・陶器椀・瓶子・陶製人形・煙管・飾り金具・銅椀・貨幣及び釘がある。

土師器小皿は各墓坑から出土したがその多くが破片であり，墓坑埋土と石組・集石内出土であることから，近世の葬法やお参りに伴うものであろう。陶器椀(1)は包含層から出土したもので，口径10.8cm・高さ6.6cmを測る。瓶子には4・5がある。5は口径2.2cm・胴部径8.0cm高さ13.4cmを測る丹波焼きの瓶子である。陶製人形には・土蔵(6)・犬を抱く子供(7)と猫(8)がある。7・8はいわゆる伏見人形であろう。

煙管(11～14)は墓坑底から計8本出土した。12を除くといずれも脂返しと呼ばれる湾曲部の短いもので火皿は逆台形を呈するものである。18世紀から19世紀にかけての特徴を示す。飾り金具(9・10)4点出土したがいづれも煙管に共伴している。煙管入れの飾り金具であったものと思われる。銅椀(図版19-3)は口径6.0cm・高さ3.0cmを測る小型品である。貨幣(第44図)は計28枚出土した。66号墓出土の永楽通宝を除いてすべて寛永通宝である。

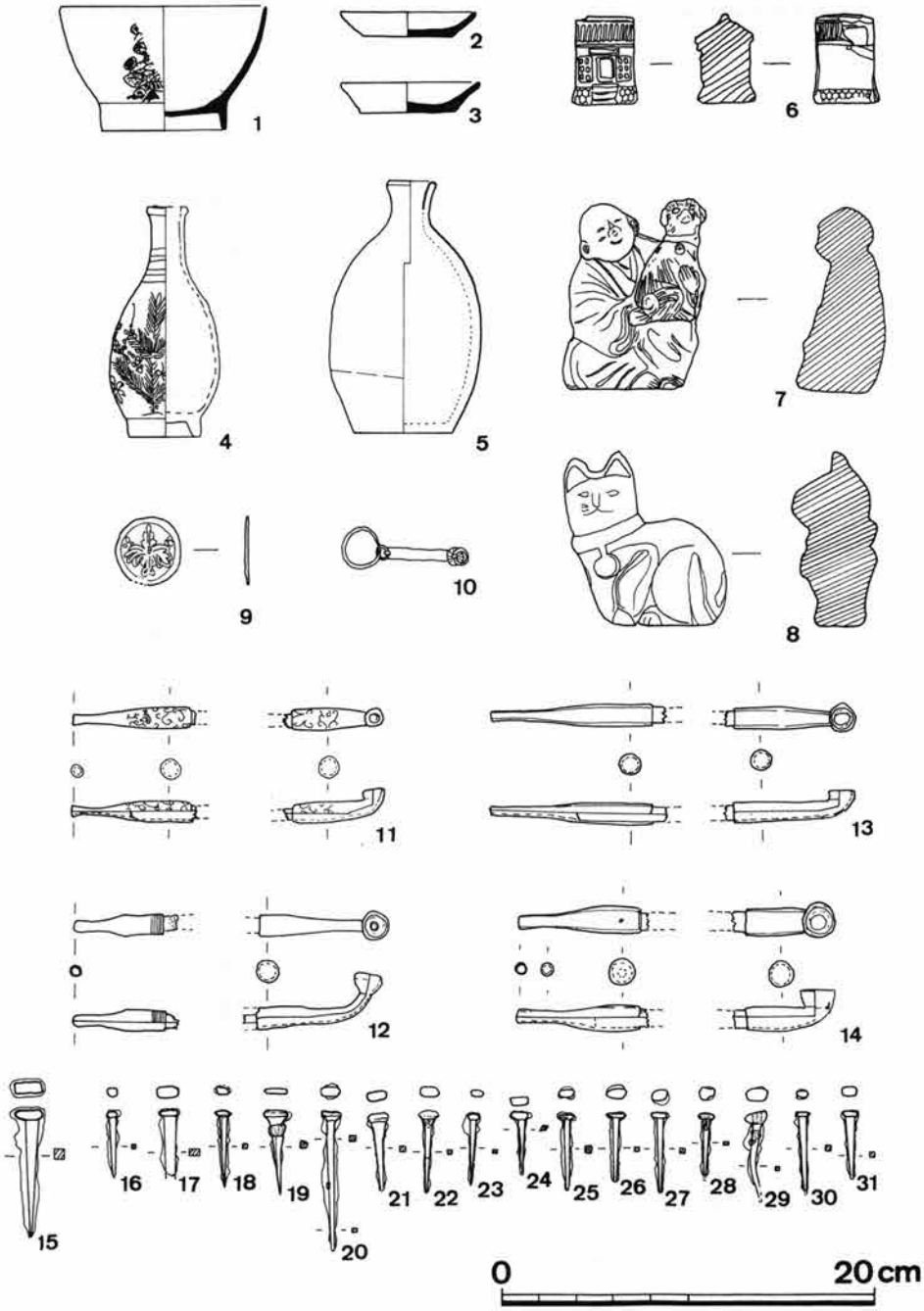
釘(15・31)は出土数の最も多い遺物で約300本出土した。長さ8cmを測るものも数本あるが，多くは4cm前後のものと2cm前後のものである。頭部形態は鋲頭形と方頭形のものが見られる。棺と煙棺入れ等に用いられていたと思われる。(注3)

墓地とは無関係な遺物として弥生土器片と須恵器土器片があるが，著しく摩滅している。

3. ま と め

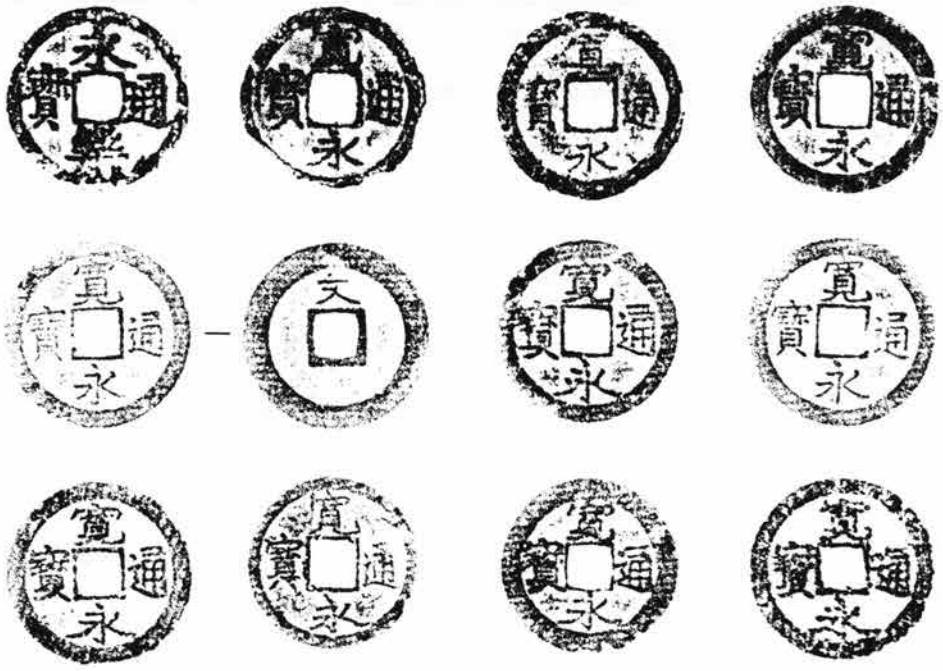
今回の調査地は最近まで墓石・一石五輪等が残っており，明治時代初頭まで墓地として利用されていた。しかし，その範囲・構造等はすでにわからなくなっていた。今回の調査でその構造及び範囲を解明することができた。墓地の被葬者については田中家と吉良家である。

調査の結果67基もの古墓が検出でき，幾世代にもわたって人々が埋葬されたことがよく観察できた。同じ墓地の中でも時代ごとに墓の作り方や，副葬するものが異なったりしている



第43図　出土遺物実測図

1. 陶器　2・3. 土師器　4・5. 瓶子　6～8. 陶製人形　9・10. 金具　11～14. キセル　15～31. 釘　2. 61号墓　5・14. 26号墓　7. 5号墓　8. 16号墓　9・23・24. 35号墓　10・16～18. 62号墓　11・12. 8号墓　13. 27号墓　15. 64号墓　19～22. 7号墓　26～28. 23号墓　29・30. 4号墓　31. 47号墓



第44図　貨　幣　拓　影（実大）
1～4．64号墓　5～10．66号墓　11．14号墓

様子がうかがえる。特に，19世紀には被葬者の生前の愛用品を副葬する習慣がうかがえる。出土した遺物は18世紀から19世紀後半までを示すもので，墓碑に記されていた享保・宝暦等の年号と一致した。

江戸時代後期の墓地という調査例の少ない遺跡を調査でき，当時の一農村の様相を知る資料を得た。今後，このような埋蔵文化財にも調査の手がのばされて，考古学の立場から改めて時代考証が行われることを期待する。　（長谷川達・肥後弘幸）

注1　三好博喜「土師川改修関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第13冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1985

注2　59年度の調査で検出されたものと同じである。注1参照。

注3　古泉　弘「江戸の街の出土遺物」（『季刊考古学』第13号　雄山閣）1985.11　54頁編年表に基づく。

付表2　検出墓坑一覧表

番号	施設（集石）	人骨	釘	副葬品	銭	備考	番号	施設（集石）	人骨	釘	副葬品	銭	備考
1			6	○		土師器小皿	4	○		2	○		土師器小皿
2		○	3	○		土師器小皿，子供	5			4	○		土師器小皿，人形
3	○		5	○		土師器小皿	6			1	○		土師器小皿

番号	施設(集石)	人骨	釘	副葬品	銭	備考	番号	施設(集石)	人骨	釘	副葬品	銭	備考
7		◎	46	○		キセル	38						
8		◎		○	6	土師，キセル2	39						
9	○		3	○		青磁器	40			3			
10	○(方形)			○		土師器小皿	41						
11	○(方形)			○		土師器小皿	42						
12		○	10				43	○					
13			4				44	○					
14			7		1		45	○		16			土師器小皿
15		◎	6	○		土師器小皿	46						
16		◎		○		人形	47		◎	17			
17		◎					48						墓拡なし
18		○	18				49	○(方形)					
19		○	4				50						
20		◎	11				51	○		1			土師器小皿
21		◎	5		2		52						
22		◎	2	○	1	キセル，飾金具	53						
23		△	21				54						
24		○	1				55		◎	2			
25		◎					56						
26		◎				キセル，飾金具瓶子	57		○				
27		○	9			キセル1	58			5	○		土師器小皿
28		◎					59		○				
29		○	3				60		○	2	○	1	土師器小皿
30						墓拡内に円礫	61		○	6	○		土師器小皿
31		○	2		5	キセル	62		○	38			土師器小皿 キセル，飾金具
32			9				63			6			
33		○	2				64		△	6		6	
34		△					65						
35		○	4	○		キセル，飾り金具	66		△			6	永楽通宝1
36		△	3				67						
37													

人骨：◎ きわめて良好　○ 良好　△ 歯等一部のみ

5. 下畑遺跡昭和60年度発掘調査概要

1. は じ め に

下畑遺跡は，京都府与謝郡野田川町字三河内小字下畑および字幾地小字角外に所在する。この遺跡は，背後の丘陵周辺から弥生土器・須恵器等の遺物が採集されていたことから，昭和47年に京都府立加悦谷高等学校の校地拡張の際，初めて試掘調査が実施された。調査は野田川町教育委員会を調査主体として，同高校教諭浪江庸二氏の指導のもとに同高校郷土研究部生徒を中心に実施されている。(注1) 調査の結果，体育館建設予定地の丘陵上から弥生時代から鎌倉時代の遺物が出土したが，良好な遺構の検出はみられていない。その後，同高校の校舎改築工事に伴い，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターを調査主体として昭和57年(注2)と同58年(注3)に2度の発掘調査を実施している。昭和58年度調査では，平安時代末から鎌倉時代初頭の井戸跡1基を検出し，黒色土器椀・漆器椀等に代表される多量の遺物が出土している。

今回の発掘調査はそれらの調査に続くものであり，新教育課程の第Ⅲ類開設による体育館付属のトレーニング・ルーム建設に伴う事前の発掘調査である。調査を実施するにあたり，各関係諸機関と協議の結果，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが調査主体となり，発掘調査を実施することが決定した。調査は同センター調査課主任調査員長谷川　達・同調査員竹原一彦の両名が担当した。現地調査は昭和60年5月20日に着手し，7月19日に終了した。調査期間中は以下，各関係機関から多大の御協力を得た。記して謝意を表したい。

調査協力

京都府教育委員会・野田川町教育委員会・京都府与謝教育局・京都府立丹後郷土資料館・京都府宮津地方振興局・京都府立加悦谷高等学校・地元地区有志の方々

2. 位 置 と 環 境

与謝郡野田川町は，丹後半島の基部に位置する。丹波・丹後境の赤石岳に源を発し，途中滝川等の支流を集めながら加悦町を北流する野田川は，野田川町に入ると流れを東北方向に転じ，名勝天の橋立のある阿蘇海へと流れ込んでいる。野田川により形成された南北に長い，通称加悦谷が開ける。加悦谷地域は古くから人々の生活が営まれている。縄文時代早期から中期の遺跡に加悦町有熊遺跡(注4)がある。弥生時代以降になると遺跡数は飛躍的に増加してくる。野田川町においては，弥生時代後期とみられる突線鈕式袈裟襷文銅鐸を含む2個の銅鐸が出土した比丘尼城遺跡(注5)や梅谷遺跡(注6)等があり，隣町の加悦町須代神社遺跡より扁平鈕式流水文銅

鐸が出土している。(注7) 古墳時代に入ると加悦谷中央部に蛭子山古墳・作り山古墳・白米山古墳等を代表とする，京都府下でも最大級の前方後円墳が築造されているほか，後期群集墳が周囲の丘陵部に多数存在している。蛭子山古墳等の規模からみて，被葬者は加悦谷地域のみならず周辺諸地域へも強くその影響力を及ぼしていたとみられる。古墳時代以降の加悦谷は，調査があまり実施されておらず，不明な点が多い。中世に入ると周辺の丘陵上には山城が多数築かれるようになる。そのほか地蔵山遺跡の中世墳墓群(注8)や下畑遺跡などの集落遺跡が知られるようになる。このほか，各地で中世遺物が採取されていることから，同時期の遺跡は今後の調査によりさらに増加するとみられる。

下畑遺跡の東北には四辻の地名が残っている。この場所は南の丹波から丹後へ通じる加悦街道と，宮津から但馬へ抜ける出石街道の交わる所である，加悦谷地域が早くから開けたのも各地域間の交通上における重要拠点としての役割をもっていたからであろう。

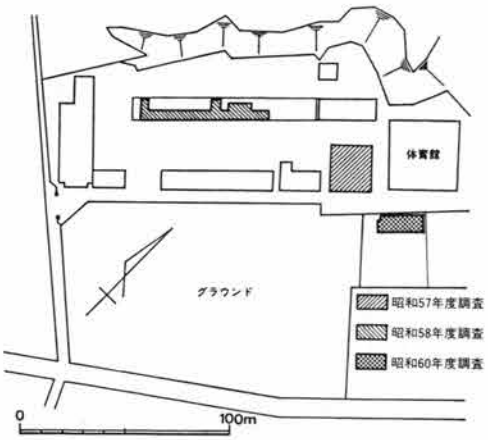
3. 調　査　経　過

トレーニング・ルーム建設予定地は体育館の東南方向約20m付近に位置し，テニスコートとして使用していた地点である。調査予定地に25m×10mのトレンチを設定し，昭和60年5月20日に重機による盛土除去作業を実施した。その後，作業員の手掘りによる遺物包含層の掘り下げを行い，遺構の検出をめざした。調査地内の遺物包含層は主に砂質土層である。数cm～数10cmの厚さで幾重にも堆積していた。山脚が迫る調査地西北部は地表下約40cmで淡黄色粘質土層(地山層)が現われ，地山面は西北から東南方向に下がる傾斜をもっていた。調査地中央部以南では灰色系の砂質土が厚く堆積し，その下面は南端付近では地表下約2.0mまで下がっていた。この遺物包含層中には弥生時代中期から鎌倉時代の遺物が含まれていた。

第45図　調査地位置図(1)

調査地西北部では，弥生時代中期の溝と同時期と判断する埋葬主体部を検出したほか，溝・ピット等を検出した。調査地東部では近世以前の遺構は認められなかった。

調査期間中は地形の関係上湧水が多く，調査終了段階間際は梅雨期に入った。



第 46 図　調 査 地 位 置 図 (2)

4. 検 出 遺 構

調査地の東端付近で弥生時代中期後半の溝２条(SD1・2)，埋葬主体１基(SX1)，鎌倉時代の溝１条(SD3)，時期不明のピット３か所(P. 1～P. 3)を検出した。

SD1　調査地北端付近で検出した溝である。約40cm前後の溝幅をもつとみられ，深さは約5cm前後と浅い。溝中からの出土遺物はみられない。SD2と同様に暗褐色系の粘質土が堆積していた。

SD2　SD2の西南に近接して検出した溝である。溝はほぼ直角に曲がり，両端は西および北方のそれぞれ調査地外へと延びている。溝幅約40cm・深さ約10cmを測る。溝中には暗褐色系の粘質土が堆積し，弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式)の土器が一括して出土した。

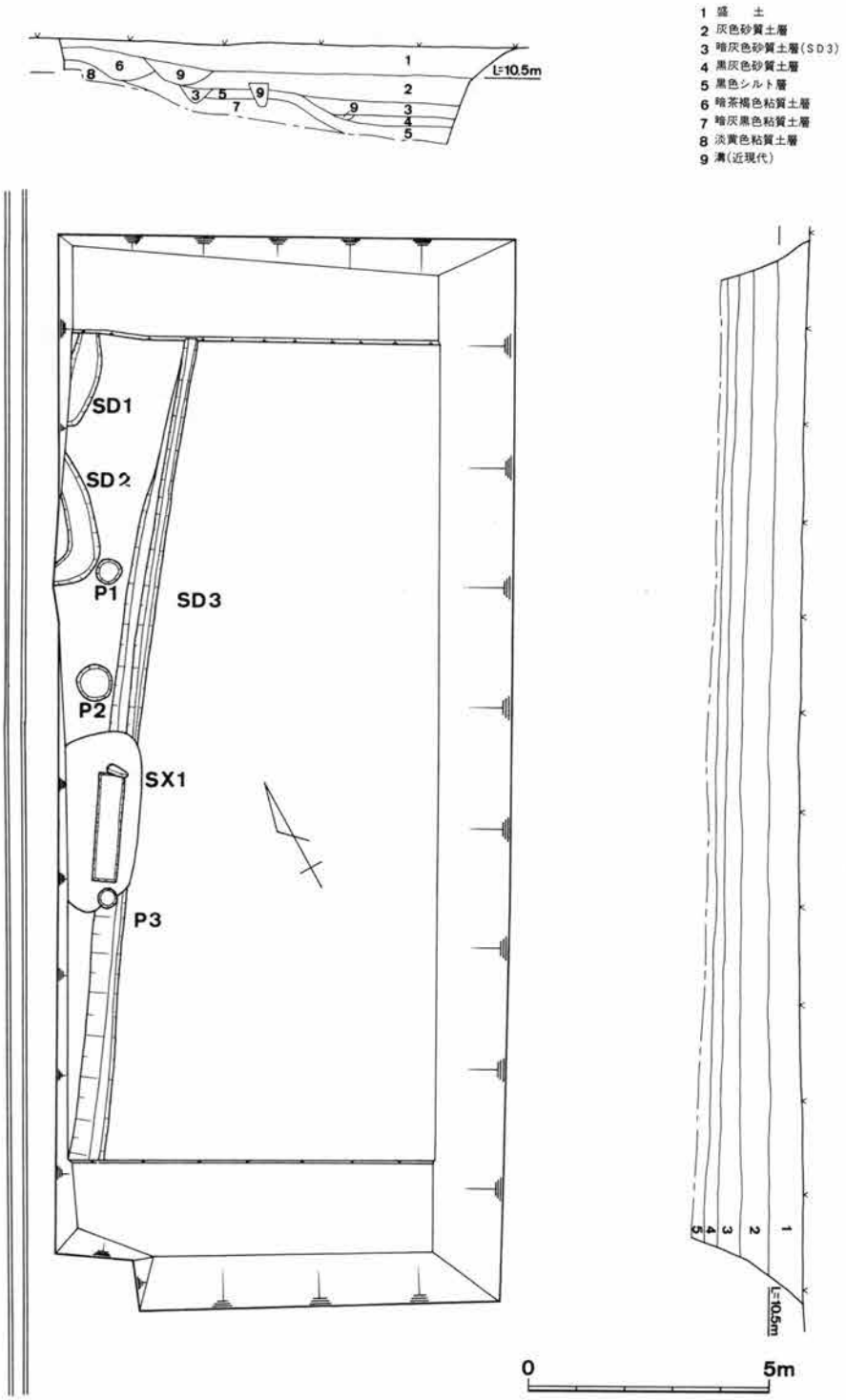
SD3　調査地の北西部を西南方向から東北方向へ流れる溝である。この溝は旧丘陵の裾を流れていたものと判断する。SX1の上部を切って流れており，溝中からは鎌倉時代に属する土器の出土をみていることから，同時期に比定することができよう。

SX1　調査地中央部西端で検出した埋葬主体である。掘形は西北側上部が調査地外に延びる。掘形は全長約3. 8m・幅は約1. 7m(推定)・深さ約60cmの規模をもつ。平面形はやや楕円形を呈する。掘形内の中央部からやや東南側に偏って，主体部とみられる土質の変化が認められた。主体部は全長約2. 3m・幅約50cmの規模をもつ。主体部内に遺物は認められないが，掘形内から弥生土器の細片が少量の出土をみた。

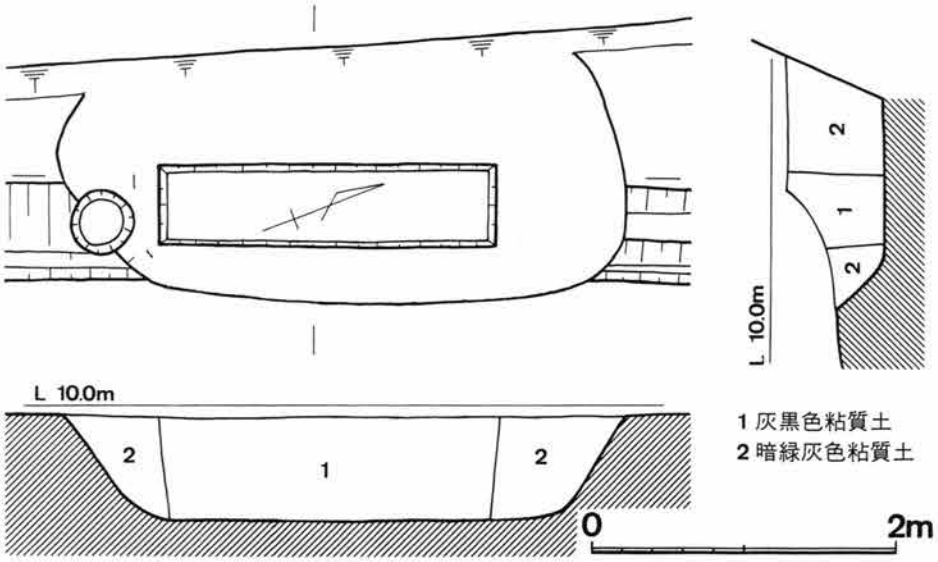
その他，時期不明のピット(P. 1～P. 3)を検出した。また，近世以降とみられる溝を調査地の上層部で検出したが，一部の溝中には樹枝を埋め込んだ例も認められた。

5. 出 土 遺 物

今回の調査では，弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺物の出土をみた。出土遺物の中



第 47 図　調査地平面図・断面図

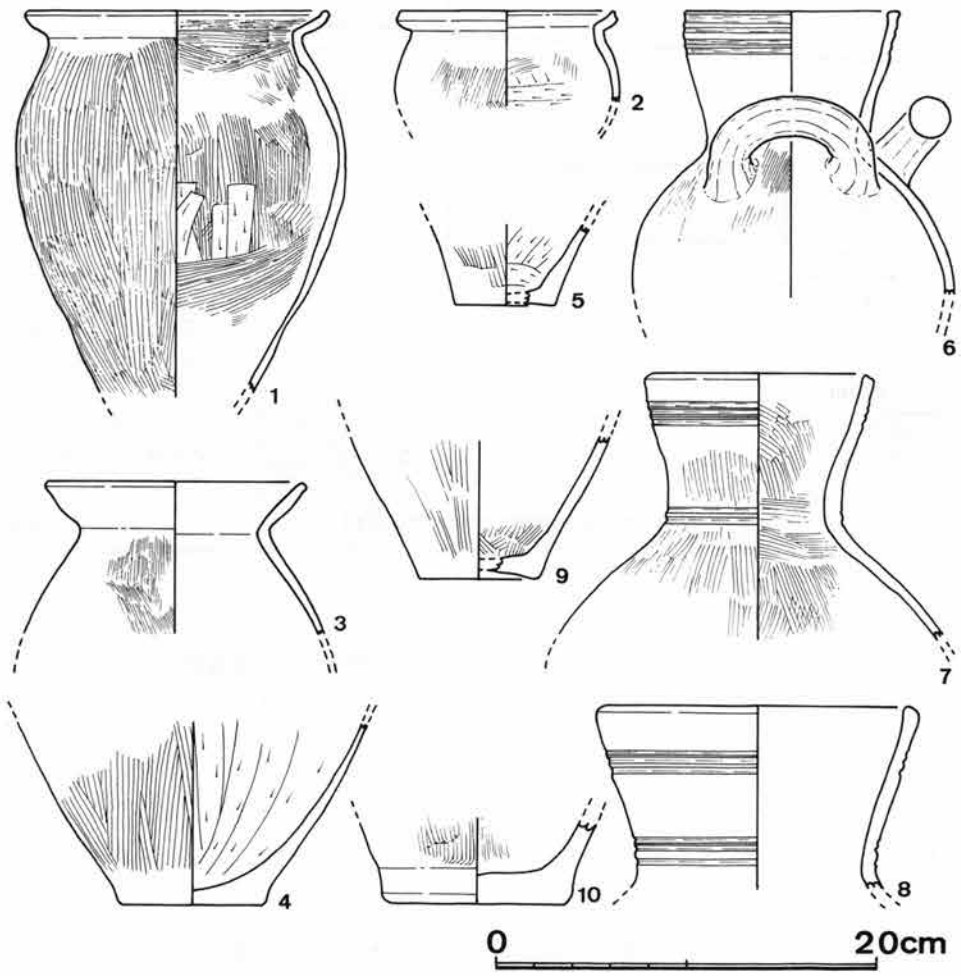


第 48 図　SX1 平 面 図 ・ 断 面 図

で弥生土器は溝に伴う出土であるが，古墳時代以降の遺物はすべて包含層中からの出土であった。

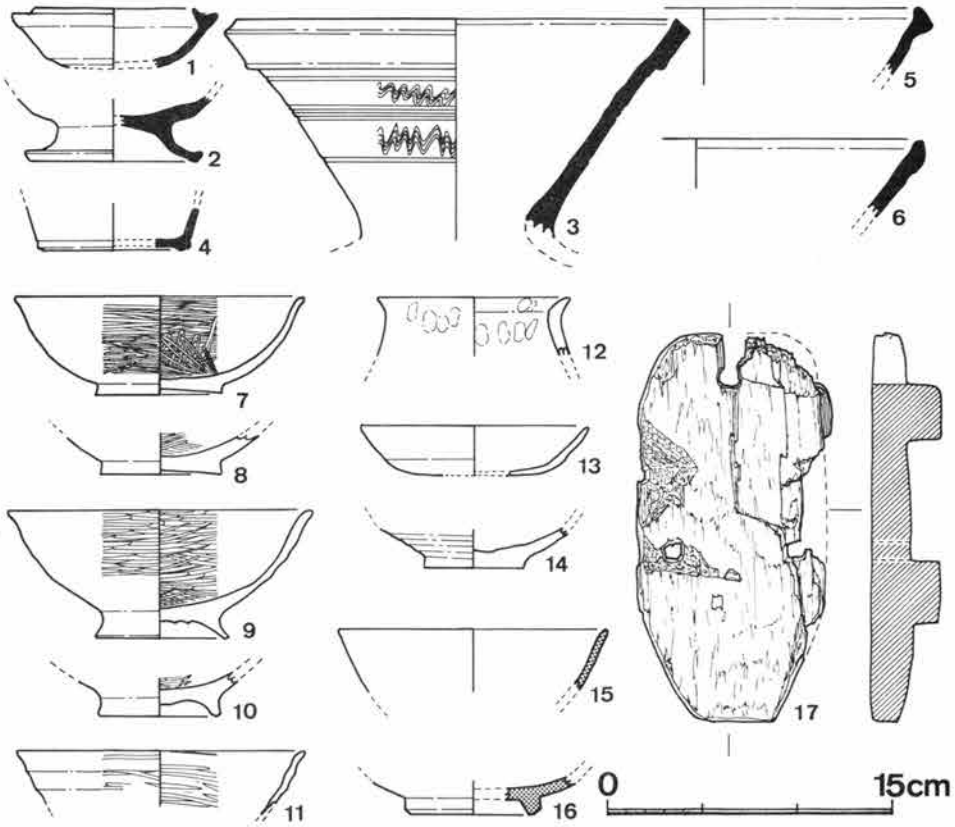
弥生土器(第49図)　この遺物はすべて溝(SD2)より出土した一括性の強い遺物であり，弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式)に比定できる。器種としては甕と壺に限られ，甕4個体分・壺6個体分が出土した。(1～5)は甕である。甕の口縁はくの字状に外反し，端部を上方につまみ上げる例(1・2)とまっすぐおさめる例(3)が認められる。体部外面と内面上半部はハケ目調整，内面下半部はヘラ削りを施している。(6～10)は壺である。壺には肩部に把手が付く例(6)があり，今回の出土遺物中には把手部分の出土が8個みられ，口縁部の形態・施文法が，いずれも同様であることから，すべての壺に把手が付いたとみることもできる。壺には口径において12cm前後を測る小型のもの(6・7)と17cm前後を測るやや大型のもの(8)が認められる。外上方へ立ちあがる口縁部は端部付近でやや内湾する。口縁部には数条の凹線を巡らせ，口縁端部にのみ4条の凹線を巡らせる(6)と口縁端部からやや下がる位置と頸部付近に2～3条の凹線を巡らせる(7・8)が認められる。体部の内外面はハケ目調整を施すが，(7)では口縁部の内外面にもハケ目調整痕を残している。

その他の遺物(第50図)　(1～6)は須恵器である。古墳時代後期の杯身(1)・低脚杯(2)が出土している。(3)の壺口縁部は口径約26cmを測る。頸部から外上方へまっすぐ開く口縁部には2～3条の沈線を3か所に巡らせ，2か所の施文帯部には不規則な波状文を施文する。口縁端部外面は約3cmの幅で肥厚させるが，波状文等の施文は認められない。(4)は



第 49 図　弥 生 土 器 実 測 図

輪高台をもつ平安時代前期の杯である。（5・6）は鎌倉時代前半の東播系とみられる鉢である。（7～10）は黒色土器椀である。底部に糸切り痕を残す平高台をもつ（7・8）と輪高台をもつ（9・10）例が認められる。体部の内外面はミガキ調整を行い，外面は体部下半にまでおよぶ（7）と，体部の中央付近で終える（9）が認められる。これらの黒色土器椀は平安時代後期に属するとみられる。（11）は瓦器椀であり，内面と口縁部外面に粗い暗文を施文している。この瓦器椀は鎌倉時代前半に比定される。（12～14）は土師器であり，壺（12）・皿（13）・椀（14）が出土している。（15・16）は白磁の椀である。器表面は全体に荒れているが，にぶい光沢をもつ白色釉がかかっている。（16）の削り出し高台部分に施釉は認められない。（17）は木製の連歯下駄であり，長さ14.4cm，幅9.8cm・高さ3.9cmを測る。この下駄は歯が磨り減



第 50 図　出 土 遺 物 実 測 図

1～6. 須恵器　7～10. 黒色土器　11. 瓦器　12～14. 土師器　15～16. 白磁　17. 下駄

っており，ある程度の使用があったとみられる。

以上，今回の調査で出土した遺物のうち代表的な遺物をみてきた。この他，遺物包含層中から輸入銭1枚が出土している(図版第23-6)。銭は北宋銭の一つで，政和元宝(1111年初鋳)である。

6. ま　と　め

今回の調査では，前回までの調査では検出することができなかった弥生時代中期の良好な遺構・遺物を検出することができた。現体育館部分の調査では試掘坑から弥生時代中期の土器が少量出土し，その土器は未検出であるが溝状遺構に伴うものと考えられた。今回の調査地は，この弥生土器を出土した試掘坑から東へ約40m程離れた平地部分であり，両地点間の比高差は約7～8mを測る。

今回の調査で検出した弥生時代の確実な遺構は溝（SD2）だけである。この溝は立地からみて丘陵裾を走る溝とみられるが，隣接する墓坑の存在および出土遺物の内容から墓に伴う溝の可能性もある。一部分のみの検出であり，この溝に関しては不明な点が多い。下畑遺跡における弥生時代の遺跡範囲は，今回までの調査成果からみて，体育館背後の丘陵を含む加悦谷高校の東北部周辺に広がるとみられる。

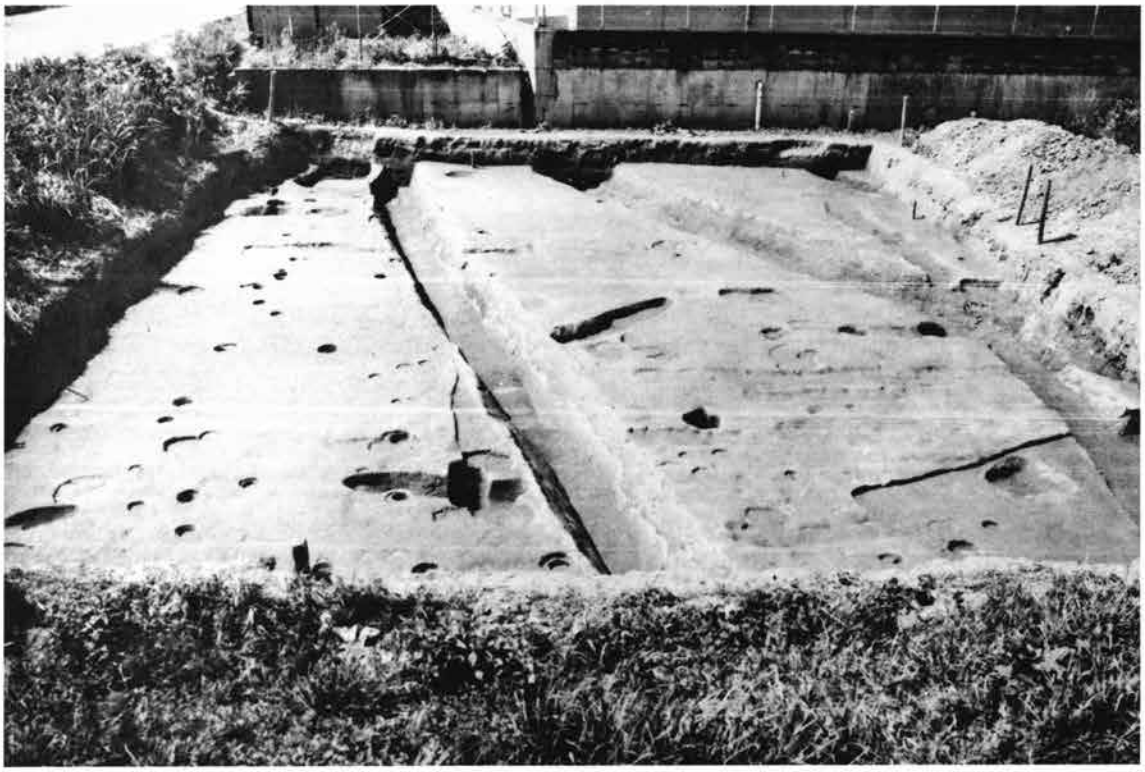
弥生時代以降に関しては，残念ながら良好は遺構を検出するに至らなかった。調査地は丘陵裾部に位置し，早くより水田として利用されていたものと判断する。

今回の下畑遺跡の調査はごく限られた場所であり，昭和58年度調査で検出していた平安から鎌倉時代の集落跡の広がりを確認することはできなかった。今後，周辺地域での調査を実施する機会に恵まれれば，弥生時代から鎌倉時代にかけての下畑遺跡の全容が把握していけるものと思われる。

（竹原一彦）

注1　『下畑遺跡発掘調査概報』野田川町教育委員会　1972
注2　竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第4冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1982
注3　竹原一彦「下畑遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第6冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1983
注4　長谷川達「有熊遺跡の出土遺物」（『京都府埋蔵文化財情報』第2号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）1981
注5　西田直二郎・梅原末治「丹後与謝郡発見の二銅鐸」（『歴史地理』32巻2号）1918
注6　三河内小字梅谷の低位段丘部より弥生土器・磨製石斧・種子等の遺物が出土している。
注7　梅原末治「桑飼村明石須代神社境内発見の銅鐸」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊　京都府）1919
注8　『野田川町史』野田川町　1970

図　　版



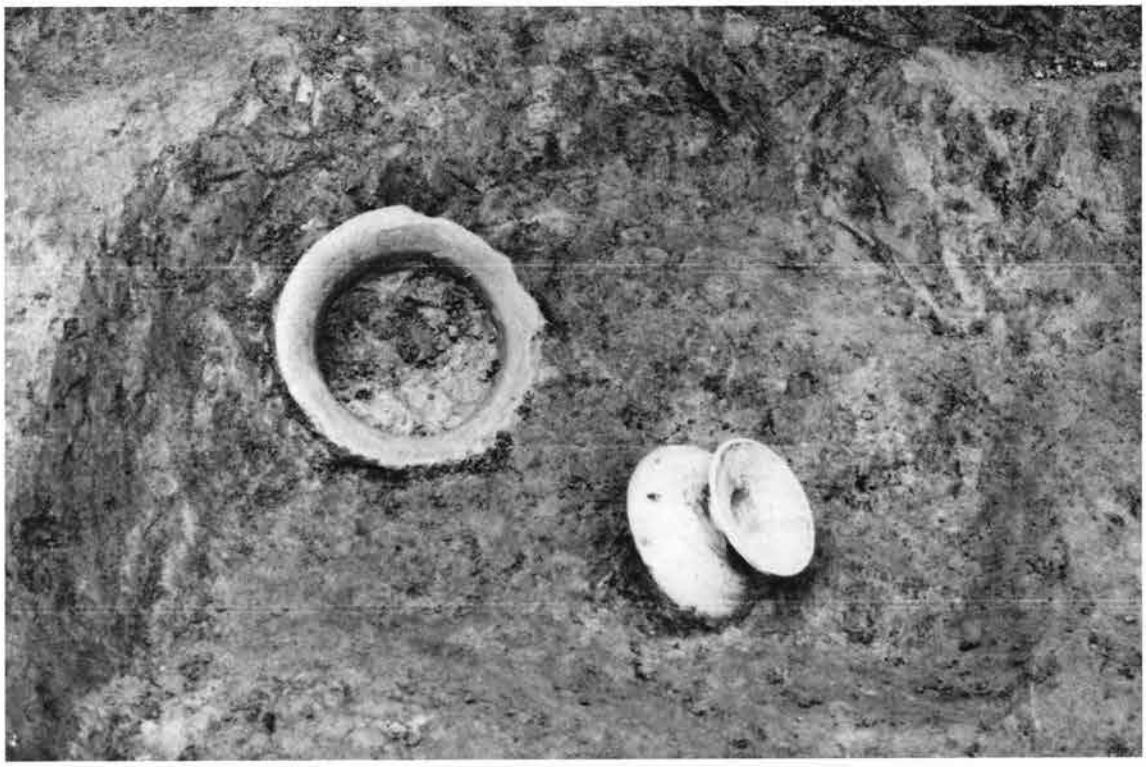
(1)　調査地全景（北から）

(2)　SD01全景（南から）

(1)　SD02全景（南から）

(2)　SB01検出状況（南から）

(1)　SK09遺物出土状況（南から）



(2)　SK18遺物出土状況（北から）

1

30

5

32

24

38

29

28

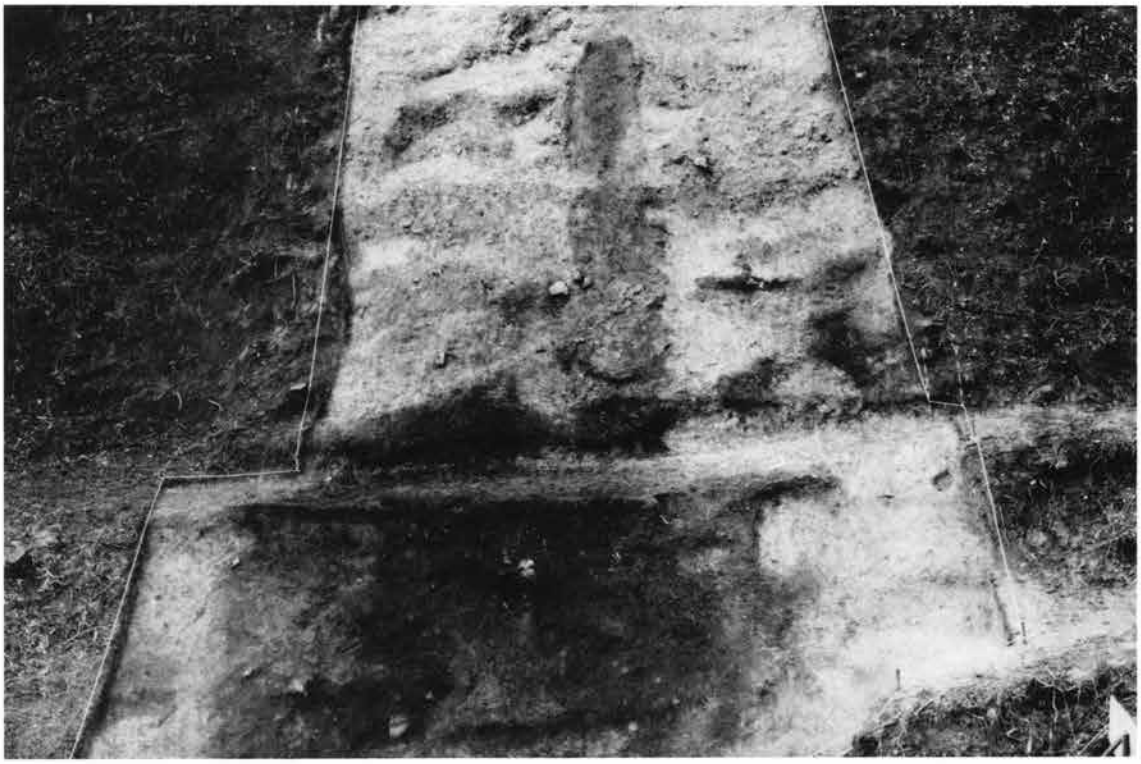
46

41

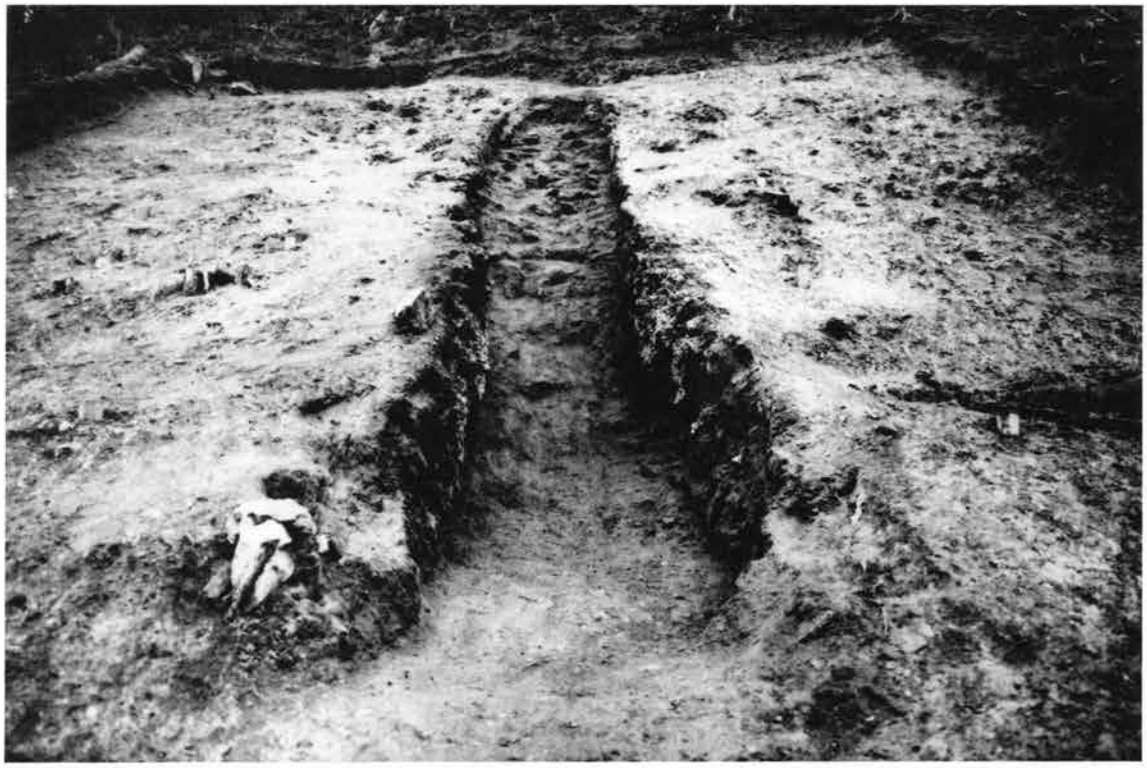
出土遺物（各番号は、実測図番号に一致する）

図版第５　　篠・西前山窯跡

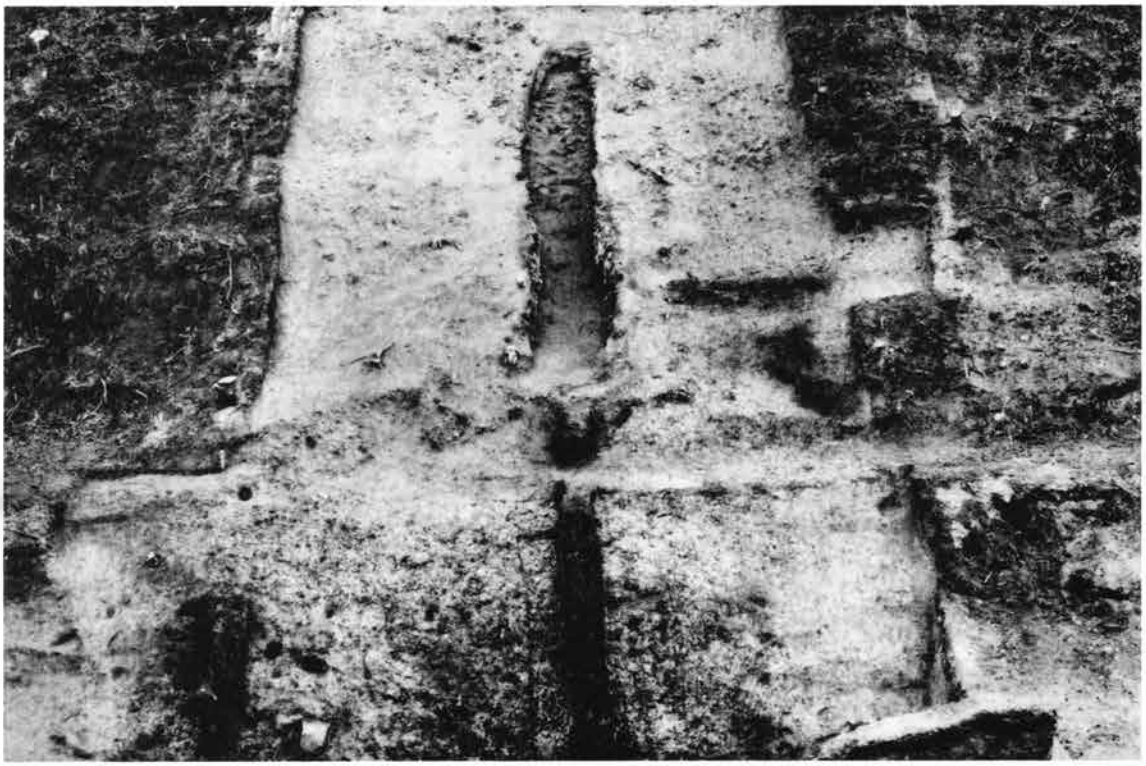
(1)　１号窯全景（北西から）



(2)　１号窯・灰原検出状況（北西から）



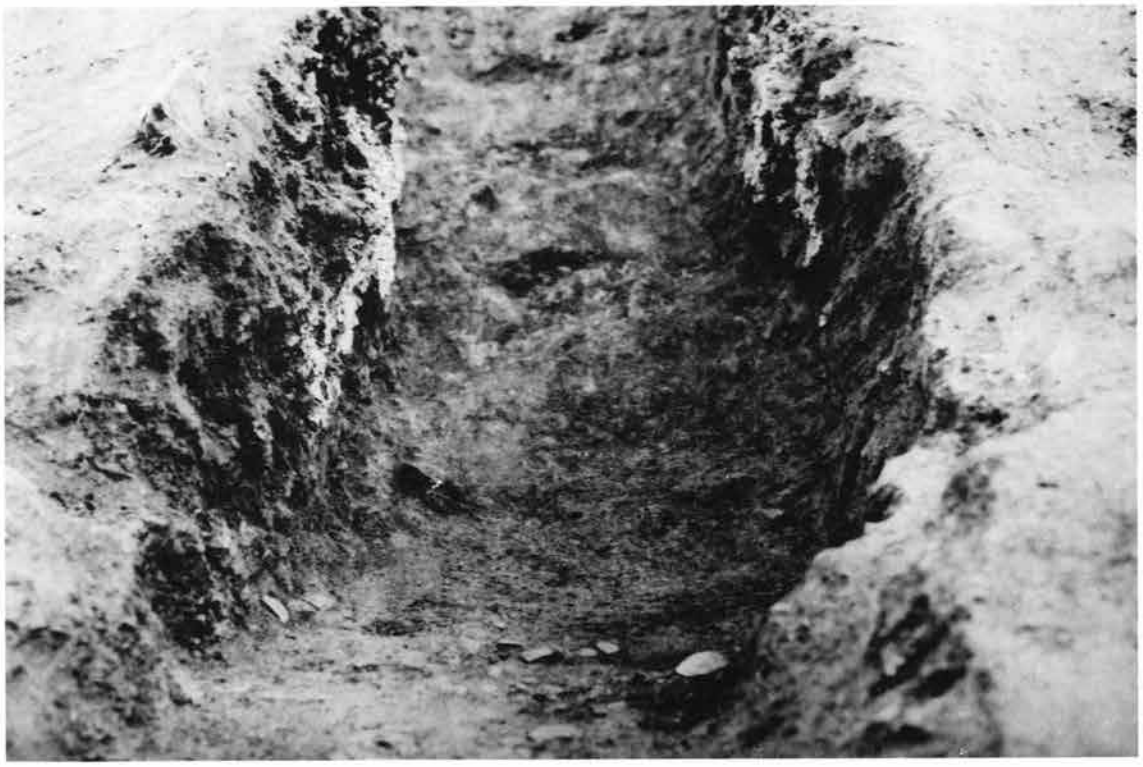
(1)　1号窯近景（完掘後）



(2)　1号窯灰原近景（完掘後）

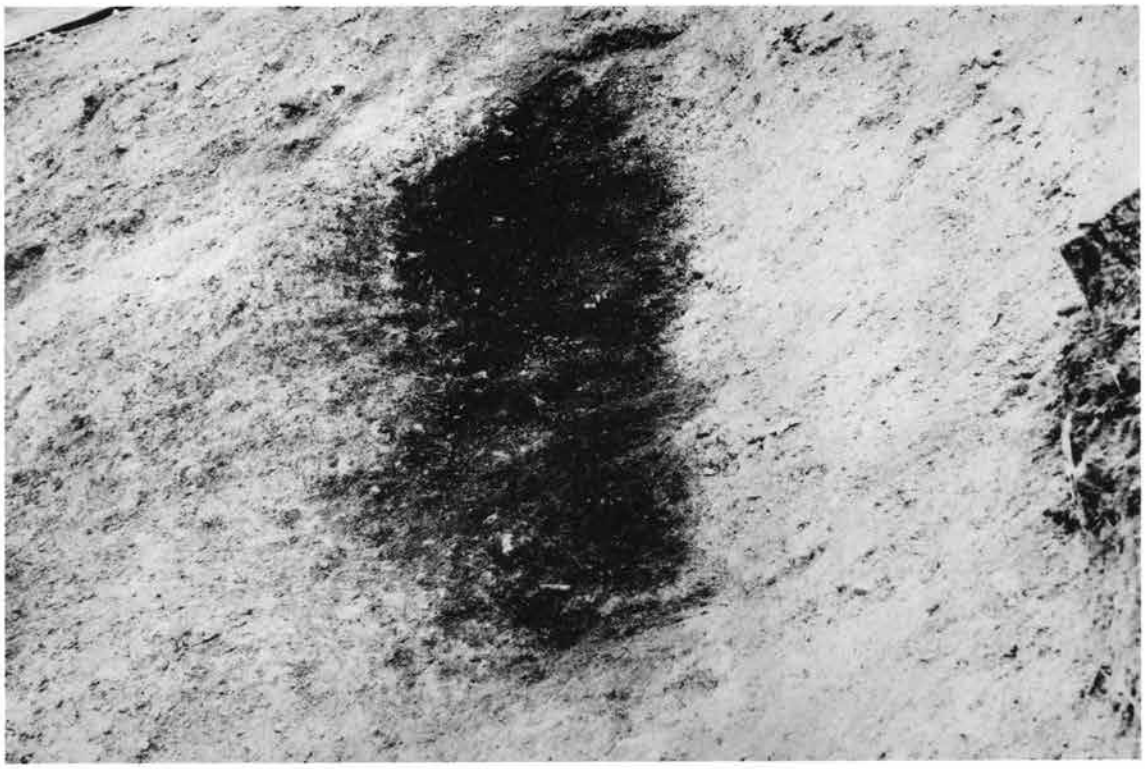
図版第7　篠・西前山窯跡

(1)　1号窯窯壁焼成部の状況（西から）



(2)　1号窯焚口部・焼成部（北西から）

図版第８　　篠・西前山窯跡



(1)　窯状遺構検出状況（南西から）

(2)　第１トレンチ掘削状況（東から）

図版第９　篠・西前山窯跡

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

出土遺物

図版第10　味 方 遺 跡

(1) 調査地遠景

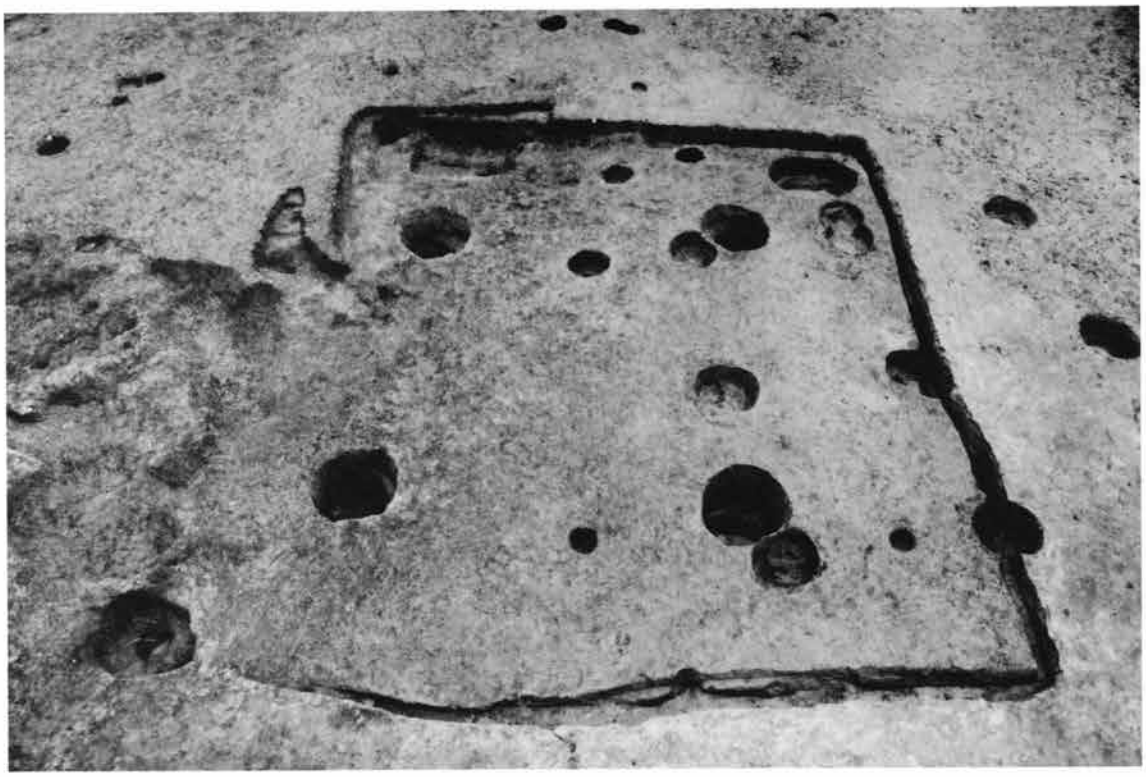
(2) 調査地全景（南から）

図版第11　味 方 遺 跡

(1)　SB02・SK03（東から）

(2)　SX01（南から）

図版第12　味 方 遺 跡

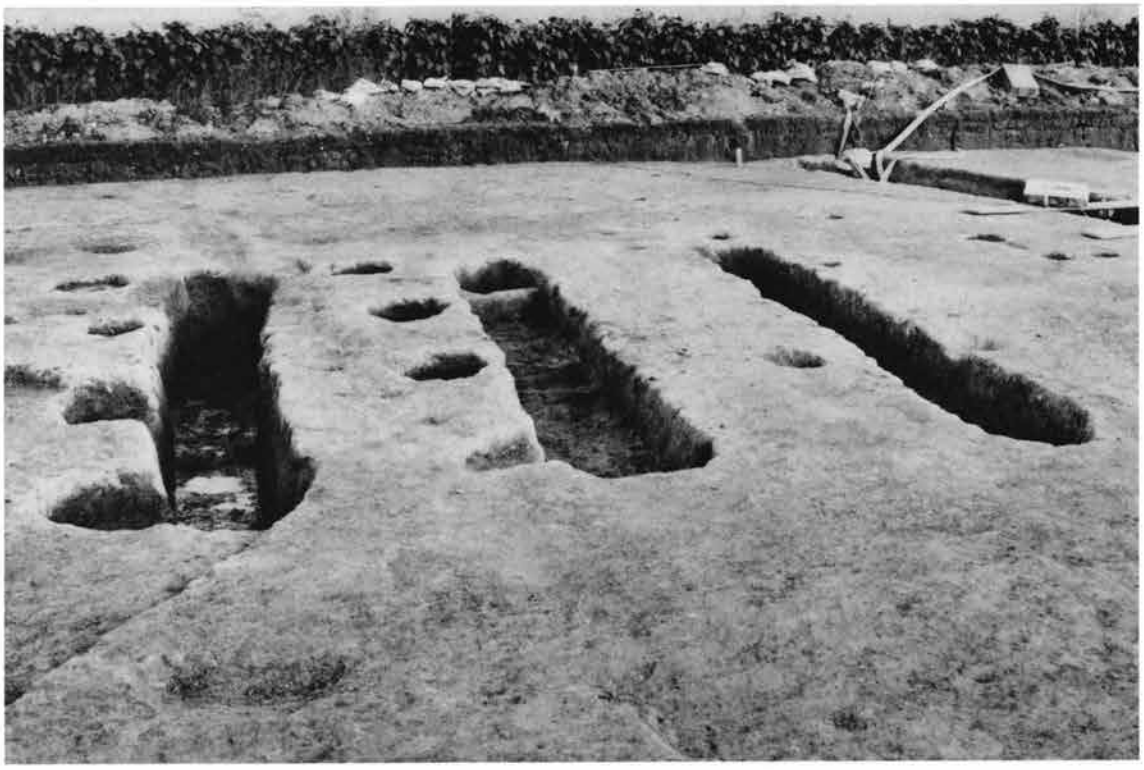


(1)　SB03（北から）

(2)　SB04（北から）

図版第13　味 方 遺 跡

(1)　SB01，SB05，SB06（北から）



(2)　SB06（西から）

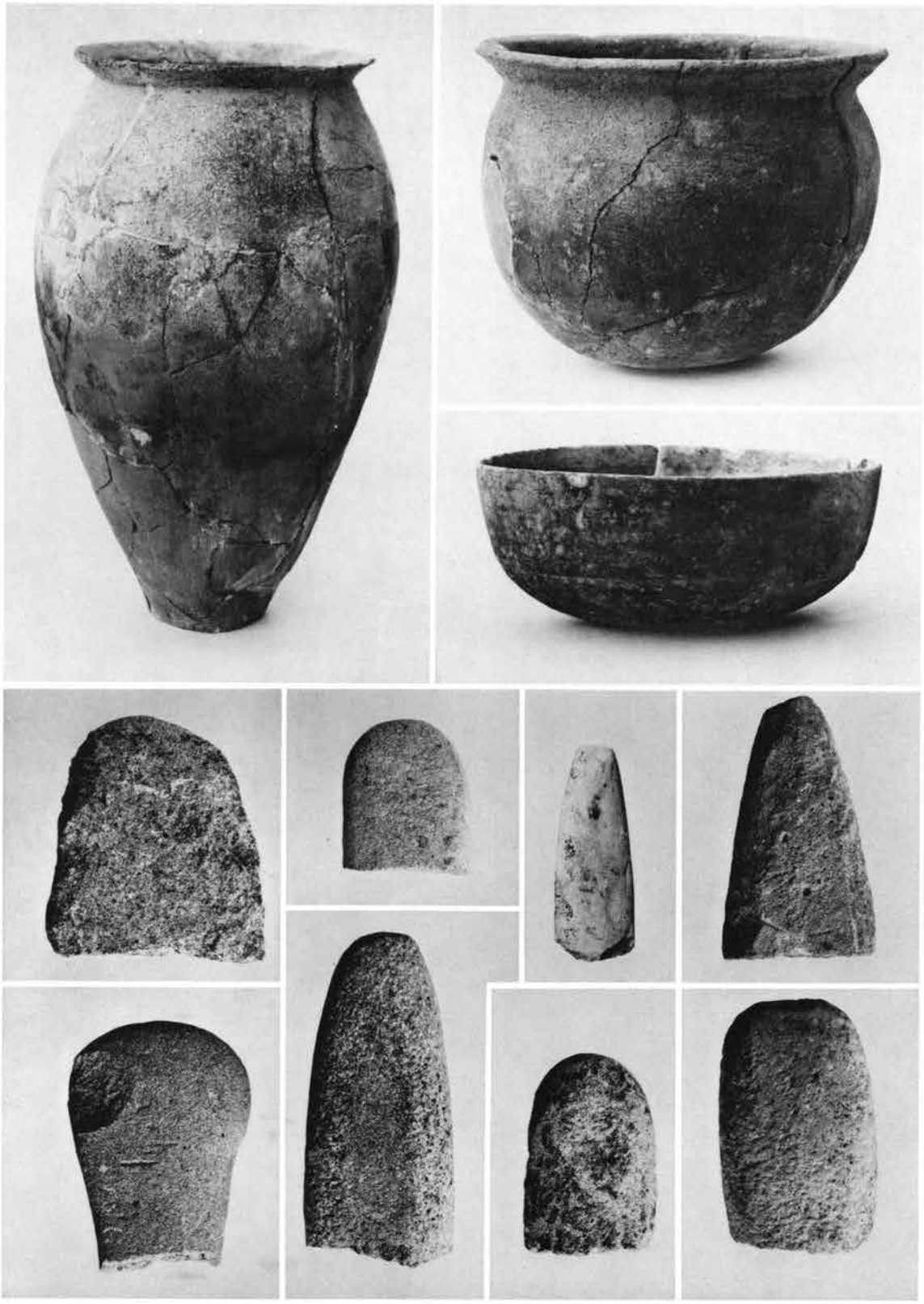
図版第14　味 方 遺 跡

(1)　SX04遺物出土状況（西から）

(2)　SB04遺物出土状況（東から）

図版第15　味 方 遺 跡

出土遺物(1)



出土遺物(2)

図版第17　土師川改修関係遺跡

(1) 遺構検出状況（南から）

(2) 遺構完掘状況・トレンチ全景（西から）

図版第18　土師川改修関係遺跡

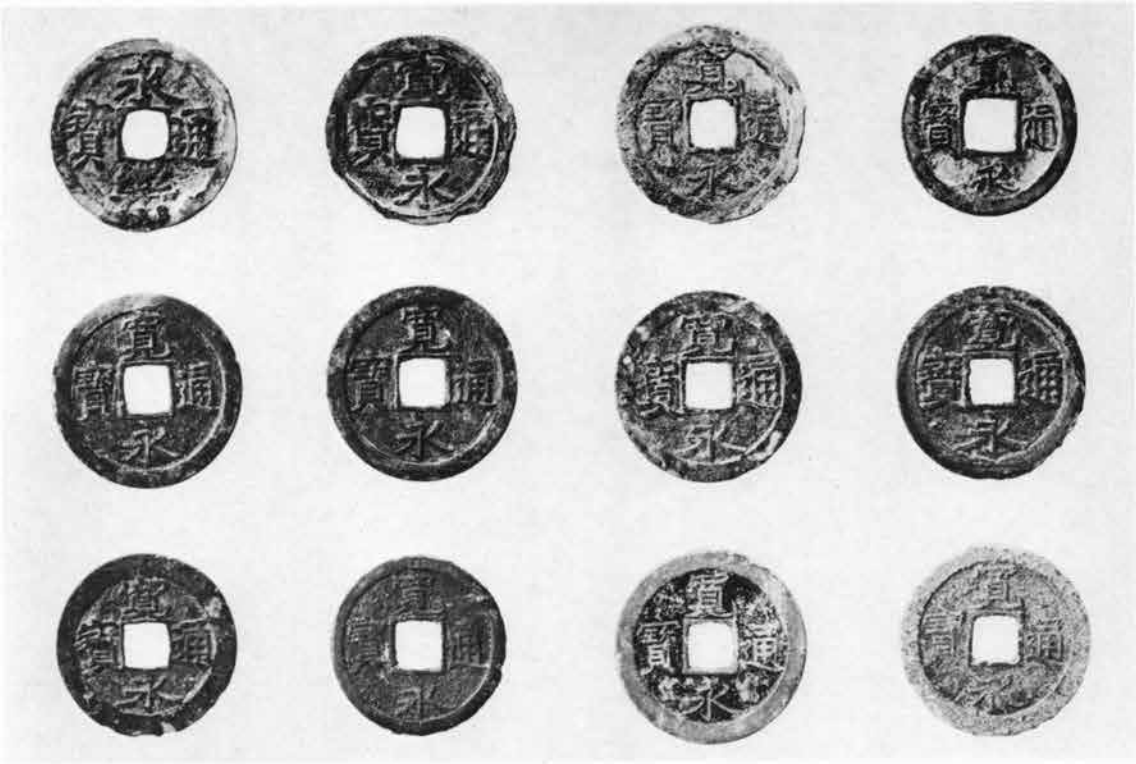
(1)　49号墓上部石組

(2)　43号墓上部施設

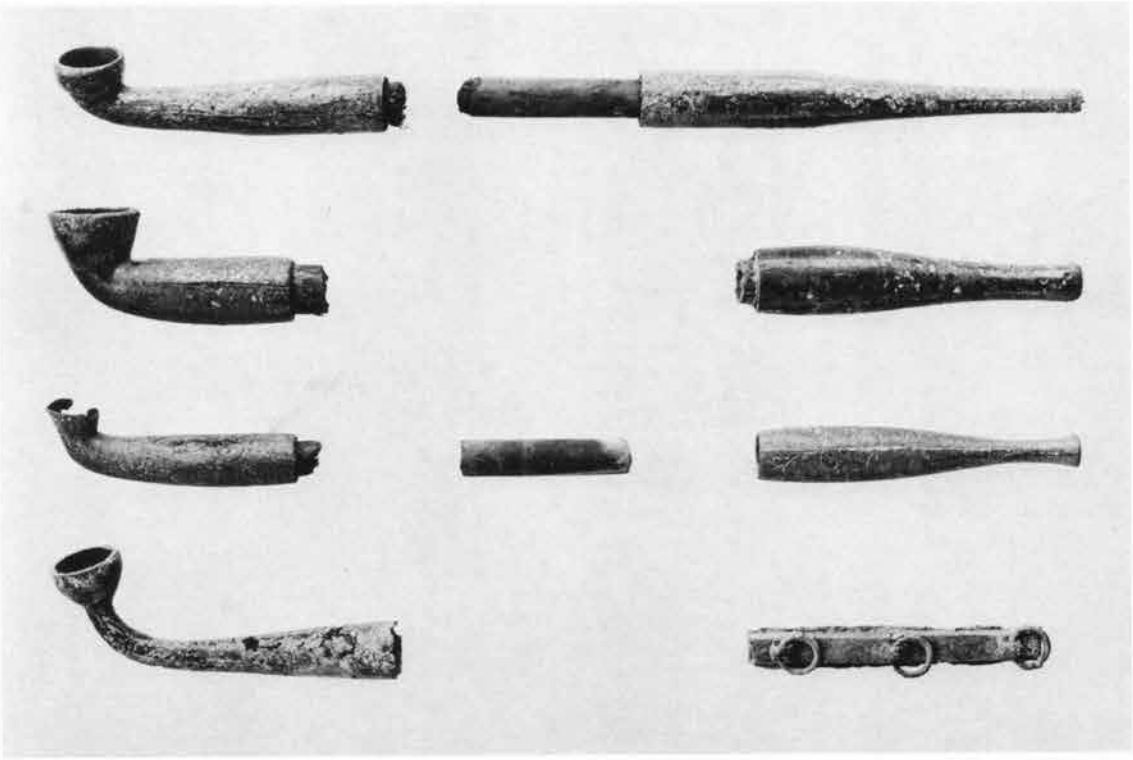
図版第19　土師川改修関係遺跡

出土遺物

1・2．土師器小皿　3．銅椀　4．瓶子　5～7．陶製人形



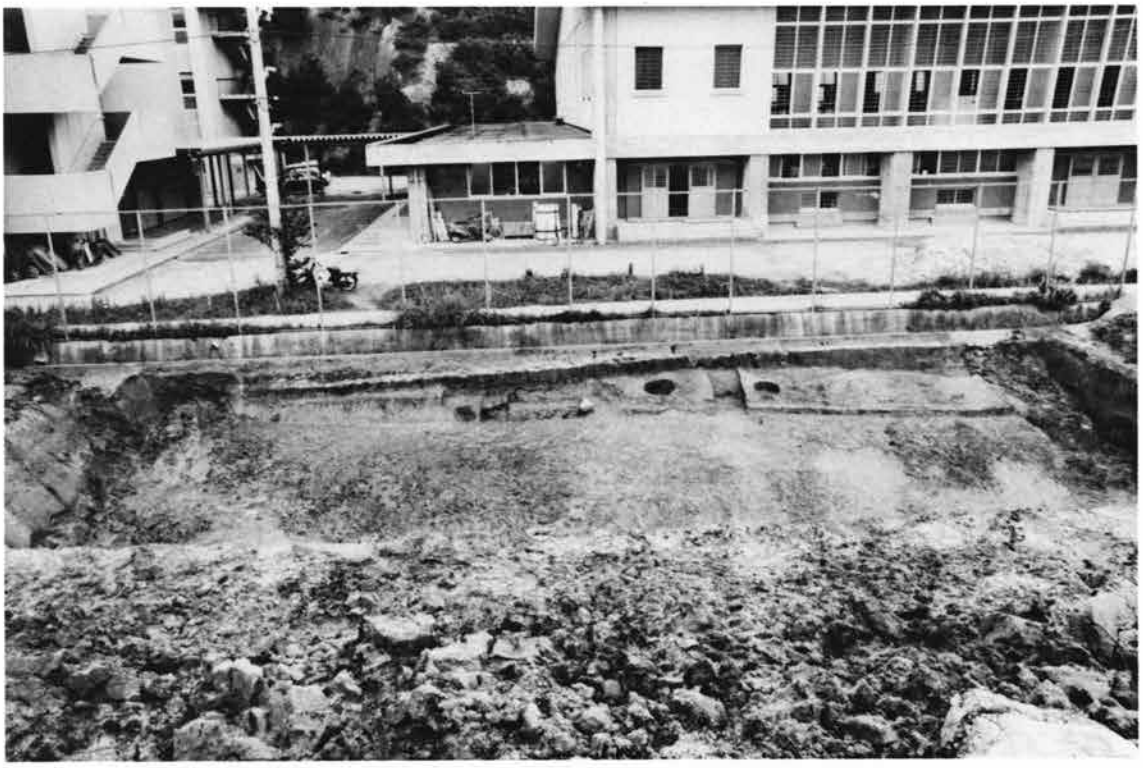
(1) 貨　銭



(2) キセル及び飾り金具

図版第21　下 畑 遺 跡

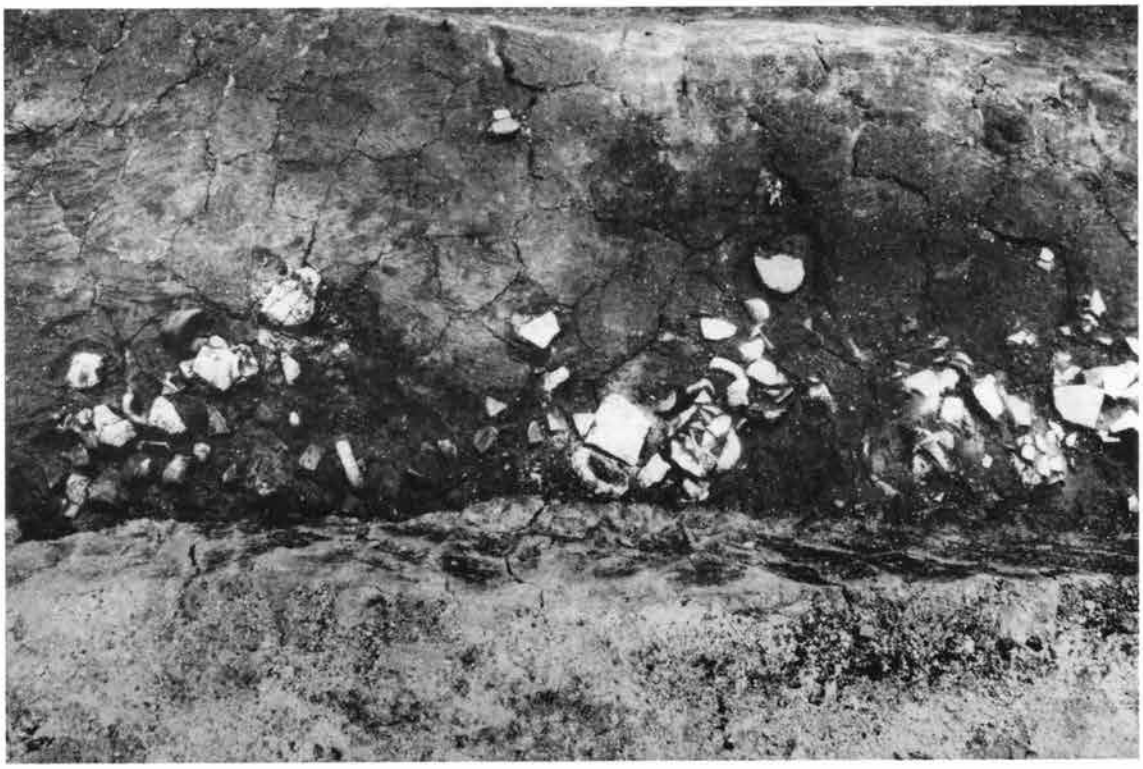
(1) 調査前全景（東南から）



(2) 調査後全景（東南から）

図版第22　下 畑 遺 跡

(1)　SX 1（西北から）



(2)　SD 2　弥生土器出土状況（西北から）

1.～3．弥生土器(甕・壺)，4･5．黒色土器椀，6．正和元宝，8．木製下駄

京都府遺跡調査概報 第18冊

昭和61年3月20日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155（代）